

915.6-Y867



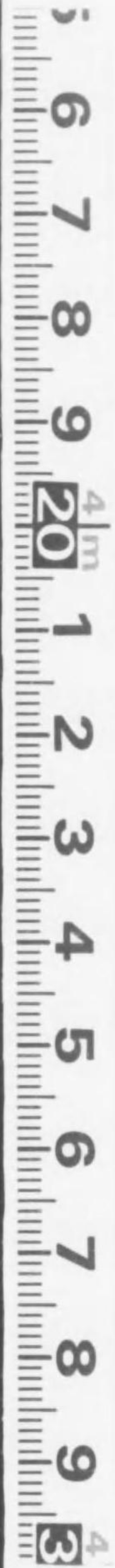
2.5.6  
86

# ふ思に河山

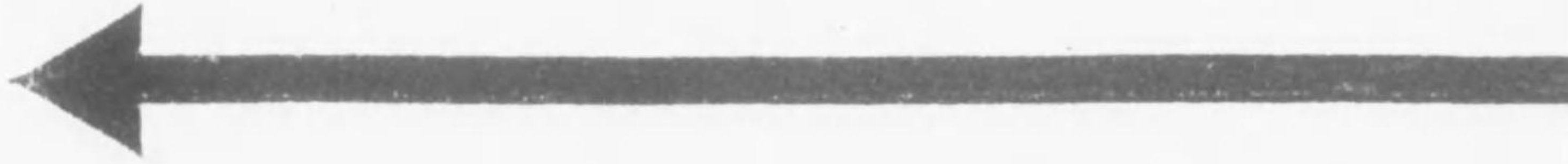
著 郎二絃田吉



吉田二郎



# 始





915.6

Y86



集選行紀

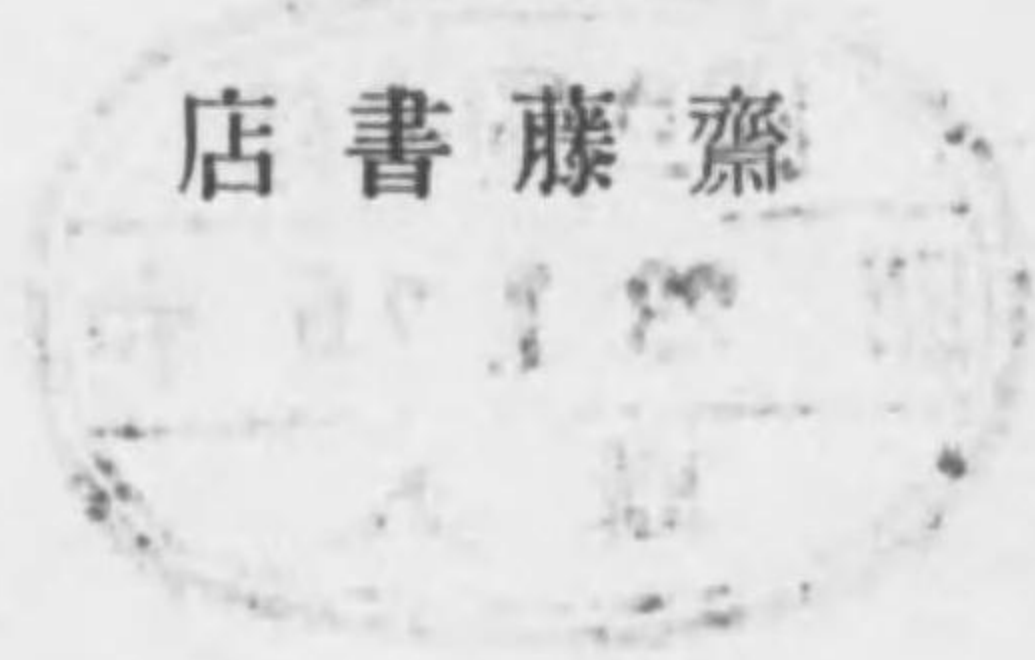
# ふ思に河山

著郎二絃田吉



京 東

店書藤齋





自序

家を捨てたるに非ず、捨てざるに非ず  
これ旅である。

一日の旅もさびしく

千日の旅もうれし

漂泊の旅なるがゆゑに。

有限の世界にありて無限の世界を觀す

漂泊の旅なるがゆゑに。

迷悟の境涯にありて、迷はず悟らず

あるがまゝに秋風を感じ

あるがまゝに山河に思ふ

漂泊の旅なるがゆゑに。





或る秋のことであつた。

京の旅に、三條の橋畔にたゞすみ、若い托鉢の僧を合掌して送つたことがあつた。或る野分のころであつた。黙々として浅間の根腰を越ゆる老廻路は合掌してわたくしを送つてくれた。漂泊の旅なるがゆゑに。

新居濱の海は暗く、波の音は靜かであつた。

知らぬ遊女の二人岸に立つて蓮の花の精靈船を流すのを見た

波に揺られゆく燭を見つゝわたくしも合掌した。

漂泊の旅なるがゆゑに。

人は旅にある時ことごとく善人であり

人は旅にある時善人のみを見る。

昭和二十二年初秋

著者

### 目次

上高地遊記	九
秋の山をたづねて	二九
竹の小窓	四五
旅日記	五七
芳野紀行	七〇
修善寺行	八六
山で逢つた人・別れた人	九七
アカシヤの花	一〇五
朝の海	一〇九



草鞋脚絆の旅	二五
松島紀行	二〇
光悦寺まで	一七
八月の霧島	三五
楡の都	一五
本里ヶ原	一六
雲は湧き雲は消ゆる	一七
雨の修善寺より	一五
孤島の春に	一九
玄海の島	一八
旅三月	一九
句の味と旅	二〇
奥の旅	二四
京の冬	三〇
旅人のところ	二六
馬關海峡で	三八

一茶の故郷まで	二二
木曾川	二六
秋の登音	二四
初冬の京にて	二四
「おくのほそ道」を歩む	二六
信濃の旅	二七
柴屋寺を訪ふ記	二五



山河に思ふ

著者自装



## 上高地遊記

七月十八日午後四時、水鶏のたたく音に旅の夢を破らる。霧が重く落葉松のこみちをこめてゐる。ほととぎすの啼く山道を下りて沓掛の町に出る。夜が明けたばかりの千曲川原を埋めて月見草が咲いてゐる。篠の井から姥捨にかかるころは雲も晴れ、善光寺平に入る千曲川を霧の下に見る。四つ五つばかりの村童が赤く熟れた杏子をかかへたまま畑の隅に立つて汽車を眺めてゐる。姥捨は田を植ゑはじめた幾日もなき眺めである。

孤島霧をかすめて川をわたるを見る。

ほととぎす 鳴け 姥捨は 田植ころ

幾つかのトンネルをくぐつて明科に出れば、視野一轉して高瀬川をへだてて松本平に移る。



山にはまだ刈りのこされた麥がある。草芙蓉があかく夜明けの山ぎはに咲いてゐる。高瀬川の白い積をへだてて雨にぬれた連山が蹴く巨岩のごとくそり立つてゐる。山のひだひだに雪溪のかがやくを見、山を戀ふ旅人の心はをどる。雲は山腰をかすめては散る。

松本に着いたのは午前十一時半、島々までは電車があるが、上高地に登るにはは出発の時間が遅すぎるので、大町から見えた大塚の石川氏と道伴れになり強力二人、同勢四人にて島々まで自動車を走らせる。

日本アルプス上高地は久しい間のわたくしのこがれの地であつた。町を出て間もなく松並木に沿ひ、梓川を右に見、飛騨高山への街道の古驛舊宿を過ぐれば山はいよいよ迫り、川はいよいよ白き瀬をなして流れる。

梓川の長い橋をわたり、水柳のやはらかな影をながめつつ島々に着く。午後二時。道は島々南澤の流れに凭り、ところどころ霧のやうな飛沫を浴びて歩一步路に入る。上高地まで山徑六里、前程を思うて先づ靴の紐を結ぶ。

山は迫つて谿は深く、岩を切り、崖を削つてわづかに一筋のこみちを通するのみである。

山は雲にかくれ、谿は蔭暗くして奔湍雪の如し。断崖諸所にかかりて行人の足をとどむ。桂、とう、さわくぬぎ、みやまななかまど、したのき、白樺など殊に多く、桂は二抱へ三抱へのものも珍しくはない。岩魚留の桂は周圍二丈三尺。丸味を帯び、雨にぬれた桂の葉のやはらかなるは

とりわけて捨てがたいものである。

折から雲低く垂れて懸崖に雨を呼び、たまたま閑寂なる鳥の音を聴く。霧は嶺に迷ひ、煙雨糸のごとく、重疊の峰をつつむ。時雨降らば猿も啼くべし。

榎の葉を幾倍したる形にて大きな五葉よりなれる野草がそこいらを埋めてゐる。いかにも怪奇的な葉である。厚くどす黒く、觸らば棘を感ずるであらう。案内の男に訊ねればゴハ（五葉）といふ。

或る時は道に岩魚釣る男の下り来るに會ふ。或る時はリュクサックを背負ひ、天幕をかつぎ、ピッケルを掴み、岩のやうな靴をはき、日焦けた顔の頼母しい青年たちの黙々として山を下るに逢ふ。ゆきかふ人は或ひは黙禮し、或ひは短い挨拶を交はして通り過ぎる。山を歩む人々のなつかしい美しい習慣である。

小粒の雨はやがて驟雨となり谿をへだてたばかりの懸崖をも見失ふ。風さへ加はつて谿川のすさまじい瀬の音、木を搏つ嵐の聲に一鳥啼かず。

谿のいたるところ山氣凝つて涼々の聲を聞く。極樂水、涼澤等に佇んでは眞清水をくむ。極樂水の名に恥ぢない。山中の醍醐味いひつくしがたし。

飛瀑は霧と化して河心の巨巖をつつんでゐる。巖頭に石南花の霧を浴びて白日夢のごとく咲いてゐるのを見る。



天正十三年の秋、飛騨高山松倉の城主三木休安の弟秀綱、豊臣秀吉の臣金森長金に攻められ城を捨てて逃ぐ。中途にして妻子を見失ふ。妻女その子とともに島々南澤に迷ひ杣人らに捕へられて、木に縛せられて殺さる。流れに臨んでその跡がある。山を搏つ嵐の中に立ちどまつて不運なる人々の魂を弔ふ。さらに梨の實を川に投じて吉凶を卜したといふ淵をのぞいては、あはれに思ふ。日本アルプスのなかにはいつてまで、かやうな痛ましい残忍な人間生活の一面を見ようとは想像もしないことであつた。杣人たちの小屋を通り過ぎて岩魚留の茶屋にいこころから、ふたたび雨ははげしく、日は暮れかかつて来た。

つたうるしの花の雪のごとく、またたびの葉のやや紅らみたるが美しく山をかざつてゐる。薄暮の山徑はしばしば雨に途絶えてしまふ。徳本峠まではなほ一里。風はますます荒れる。

徳本峠は海拔七千百尺、上高地よりする登山者にとつて日本アルプス第一の關門である。日さへあらば、天気さへよくば上高地の谿谷をへだてて直ちに穂高の靈峰と面接すべく、恐らく穂高展望の随一なるものであらうに、日は暮れ、あらしは木を搏つ。

峠の茶屋の戸を排して中に入れば、すでに五六人の學生たちは毛布をかむつて寝につかうとしてゐる。雨を防ぐためにかむつて来た桐油紙は破れ、肌は雨に打たれて寒さにあななく。シャツを取りかへ、冬の外套を着て、少憩の後、山を下る。

日は暮れたがまだ道はほの白く見える。雪路は杳然として道に沿ひ夕闇のなかに流れてゐる。山を下るにつれて木立深く、道はやがて爪先も辨じがなくなる。雨のなかに提灯を點して道を拾ふ。雨具の下に辛うじて燭をいたはりつつ守る。幾度か燭を消しては嵐のなかに立ち迷ふ。道に沿うた雪路のみが闇のなかにたどたどしく泛かぶ。下つて行く谿の方の霧の中からにはかに二三點の燭が見出された。旅館「五千尺」からの迎への火ではないかななどと語りながら火を目あてに下りてゆく。五六人の若い人たちが立ちどまつてゐて「大きな牛が數頭この下の道の眞ん中に寝てゐても下りてゆけぬから、峠まで引きかへさうと思つてゐる。」といふ。わたくしたちは山を下つて行つた。いかにも立派な乳牛が一頭の仔牛をつれてあらしのなかに悠々と道の眞ん中に寝をべつてゐる。仔牛の頭を撫でてやれば仔牛は雨に打たれた眼をしばたきたながら旅人を仰ぎ見る。

間もなく道は平坦になつた。廣い蔭の葉と熊笹につつまれたぬかるみの道を急ぐ程に道は沼と化してしばしば堰を渡す。野兎が道を横切つて提灯の燭をかすめる。天も地もただ晦冥。山も見えず空も見えない。恐らくわたくしたちは五六千尺の深い霧の海の底を歩いてゐるのであらう。振りかへれば後からついて來てゐたかの五六人の登山者たちはいつの間にか遠ざかつてしまつて、はるか霧のなかにただ一度夢のごとく描き出された火影を見出したのみで、つひに火影をひ、聲を失つてしまつた。



わたくしたちは急ぎに急いだ。幾度か燭をかざしては丸木橋をわたつた。濁流は丸木橋を沈めてゐた。その間にも山の男たちは山案内の喜作爺がその子とともに雪崩に打たれて死んだこと、乗鞍の牧場に熊が出て番人を喰ひ殺した事など、いかにも山の物語りらしい話をつづける。

燭が消える。嵐は路に狂ふ。ただ嵐の聲のみである。闇として聲なきにもまざる山のわびしさは嵐の夜の、嵐の吐息する間の山の沈黙であらう。木に凭りては冷たき雨を避けつつ嵐の底の死靜に耳を傾ける。

靴には水が溢れ、背には冷たい雨が流れ込む。着替へたばかりのシャツもぐつしよりになる。ままよ道あるも、道なきもかまふことかは。快く雨に打たれつつ草を分け木の下をくぐる。

霧のなかに二ツ三ツ四ツと幻のやうな燭がまたたき初める。若い人たちのキャンプである。小梨平の柔かな草の上には若い人たちの美しい夢を守る幾十のテントが寂然として嵐のなかに横たはつてゐる。

上高地の嵐の夜は若い人々の靜かなるテントを洩れて来る燭によつていかに尊くせられ、懐かしくせられてゐるか知れない。若い人達よ、君等こそ人生の最も尊い幻に生きてゐるのだ。君等こそ天上へのあこがれを如實に生きてゐるのだ。ただ一本の蠟燭、一個の飯盒、一枚の毛布、一挺の手斧。君等はまさにゾルデンの池のほとりの哲人の生活に生きてゐるのだ。小梨平のやはらかな草のなかに君等の天幕を洩れて来る一本の蠟燭の火を見る時、上高地の夜がいかに尊く静く

せらるることであらう。君等の草の中のキャンプの火は、かの中世紀のモナステリーの窓を洩れて来る聖火の如く靜かである。君等の草の中の夢を想ふ時わたくしの胸はうづく。

夜十時、上高地の旅宿「五千尺」に着く。

雨のためにテントを逃げて来た人たちが集まつて来たので宿は俄の混雑である。

旅館「五千尺」は六百山の懸崖を背にし、梓川をへだてて直ちに穂高に對してゐる。裏の小暗い湯桶に浸り靜かに恐ろしい嵐を聴く。燭は暗く寛の水は氷のごとく冷たい。いかにも山寺のやうな建物の感じである。部屋々々のランプの燭の薄暗きも山の宿らしいなつかしき感じをわかせる。

館主丸山氏の好意で二階の西南端の一室に先づ扱れたる軀を横たへる。

食膳に供へられた尺にも餘る岩魚の鹽焼きのうれしさにわたくしは珍しくも酒杯を重ねて快く酔つた。

窓の下は直ぐに梓川の激流になつてゐて、渚の水柳が夜の影をこめて窓を打たんばかりに繁つてゐた。

隣室には七八人の若い人たちが雨の暗れるのを待つて眠つてゐる。ひどく扱れてゐるらしく折折の板戸を蹴つては夢を破る。

幾度か眼をさましては頭をもたげてガラス窓越しに空を見た。星一つなかつた。ただすさまじ



い嵐の聲と、瀬の音のみ夜つびて狂ひに狂ふ。

まだ夜が明けきらぬうちに隣室の若い人たちは雨を衝いて宿を出て行つた。

夜明け方になつて雨は小降りになつたが、梓川の流ればひたすらに水聲を増しに増した。

わたくしは起きて窓を排して直下の流れをながめた。梓川はやや濁つて渦をなして流れてゐた。水柳の下葉は重く水に垂れてゐた。小雨が横なぐりに降つてゐた。河童橋の上には二三の若い人達が空模様を案じてはたすんでゐた。

わたくしは不圖その刹那に窓と直面してそそり立つてゐる黒い岩山の一角を見出した。雲は低く垂れてわづかに梓川彼岸の水柳と白樺の森林地帯のみを遺してゐた。

十分二十分わたくしは暗い心を抱いて、密雲の奥に隠された穂高の雄姿を想像しつつ、低く垂れた水柳の枝をくぐつてゆく梓川の流れを見つめてゐた。

岩燕が半天をかすめて南から北へ矢の如く飛んだ。

魂飛ぶといふのは恐らくその刹那のわたくしの心境を説明したものであらう。

わたくしは惘然として偉大なる穂高の靈峰に直面してゐる自分自身を見出した。

明神岳から前穂高の正面がその織のごとき千仞の懸崖を嵐の相搏つにまかせ、雲の相摩するにまかせ、突兀として天に接してゐるのであつた。文字通りに一萬幾百尺の穂高は轟々として北の

半天を翻つて直ちに天に觸れてゐるのであつた。そしてわづかに梓川の碧珠のごとき流れをへだてて窓に迫つて来た。

雨は沛然として岩をうち、雲は遽然として岩壁に砕けた。

嶺をつつむ雲の奥からは縹渺として幾百條の銀糸のやうな瀧が斷崖を傳はり、直ちに天に懸かつて落ちてゐる。まさに銀河三千丈、千曲萬折して天に懸かる姿である。雲は徐に徂徠しては銀河を香煙の懷につつむ。

雲はその嶺をあらはにすることを惜むかのやうに、纏綿として一聯の尾根のはとりを低迷してゐる。時としてわたくしたちは雲のなかにちやうど紗をへだてて物を見るやうに淡墨で描かれた尾根の一線が高い天空を横さまにつらぬいて走つてゐるのを見た。

わたくしは雨に濡れた穂高を見たことを心からよろこんだ。嶺も岩も雨に濡れて織のごとき黒い。そこに雲のなかに釣りつけられた幾百條の飛瀑がその黒い岩壁を縫うて天から飛び、散るのであつた。

雲が晴れ、雨が止むにつれて穂高の大雪路は黒い岩山と岩山の間は大傾斜をなして天界から悠然として流れて来た。最初は瀧のごとく見えた。雲が黒い霧を靜かにはひながら尾根の方へ上るにつれて雪路は横にも縦にもひろげられて行つた。

雪路をとりまく幾つもの岩山と岩山との間には匍松の森林地帯が、たとへば青い島々のやうに



とりのこされてゐて、それらの島と島との間には、やはらかなしかも雪窟におとらぬほどな廣い草原が雑々としてかがやいてゐる、白い雪に對してその草の青さは貴い瓊玉を聯想させる。半日その草の上に仰臥して白日夢を娛しむことを得ばまことに人生の至福であらう。雲は靜かに草原をかすめ、雪窟に消え、やがて絶壁に湧きて天に攀づ。

空が晴れた！ と若い人々が狂氣して叫んだ。雲のすきまから日の光りがミルクのやうな白樺の幹を照らしてゐた。積のほりにはまだ小雨が低徊してゐた。

その刹那であつた、わたくしはかつて見たことのない美しい自然を見た。優婉といふにはあまりに大きく尊かつた。莊嚴といふにはあまりに聖麗であつた。眞に恍惚の境であつた。

雨にぬれた穂高、明神の全幅を通して七月の太陽は一草一石一木の上にも白銀をちりばめてしまつた。岩は白銀にかがやき、瀧も、雲も、斷崖もことごとく光つた。岩を落ちる一涓一滴ことごとく光りに光つた。

たちまちにして雲は山をつつんだ。ただ幾百條の銀龍のみが日の光りを浴びて黴い岩に縁り、雲の間に或ひは閃々として、或ひは縹渺として、わたくしたちの頭上一萬尺の高さを弄るのであつた。

わたくしは雨の上高地を訪れたことをありがたく思つた。

\*

午後はまた雨であつた。

雲は風のごとく梓川の破にわき、水柳をつつみ、白樺の林にまつはり、雨は秋のごとく靜かであつた。

山は聳え、山はかくれた。

白樺の樁火をかこみて山の話をきくによき、つめたき雨の午後であつた。

「もし人間がゐなかつたら自然は如何に空漠たるものであらう！」わたくしは山の一案内人たるにすぎなかつた上條嘉門次爺を思ひ出すにつけても、ブレークの詩の言葉を今さらのごとく感ぜざるをえなかつた。聖麗なる上高地の自然は一嘉門次爺の物語りによりて、さらに幾倍の尊さとなつかしさとを感じさせる。

十五歳のころか、しき（炊く）の意。袖などに伴うて山に入り炊爨の勞を執る小童）として山にはいつた日から七十一歳の秋死ぬ日まで五十六七年の間、かれは殆ど黙々として山のなかに一生を送つたのであつた。夏は梓川のほとりに岩魚を釣り、冬は山に狩する、その間は山のごとき沈黙を守つて山の案内をする。そして一年のうち島々の家にかへるといふことは數日に過ぎなかつたといふことである。かれの一生についてはすでに親しくかれを知れ、色々なアルピニスト達の手によつて色々に傳へられてゐるからここに贅言する必要はない。ただかれがいかに完全な、いかに立派な山の案内者であつたかについて眞骨頂を語るべき一逸 だけを記して置くことにす



る。大正五年であつたか、有名な登山家某氏が日本の登山者界で、初めて穂高縦走を企てた時かれは七十歳の老驪を提げて案内を引さうけた。恐らくかれはその企てをもつて最後の案内と覚悟してゐたことであらう。今まで長い間多くの山岳家たちによつて果されなかつた穂高縦走は見事に成し遂げられた。その榮ある成功の刹那においてであつた。かれはその巔に達せんとしたる刹那、先登者の最後の一步をさし控へて雪の上に立ちどまつた。そして登山家某氏に穂高縦走第一番目の名譽を永久に譲つた。

雪と雲と岩山の尾根とに育て上げられたかれの魂はまことに聖麗なる山そのものの歌々たる權化であつた。

ただ一人の山案内人嘉門次爺がかつてそこに住み、かつてそこに歌々として山を眺めつつあつたといふことだけでも上高地の自然はどれだけ印象深く、尊くせられてゐるか知れない。

「爺さんはいつものにこにこ笑つてゐましたが、怒る時はこはい顔をしました。爺さんが怒るのは犬の行儀がわるい時でした。爺さんの犬は幾匹ゐても行儀よく順々に御飯をたべましたよ。」嘉門次爺についての丸山氏の物語はそれからそれへとつきるところを知らなかつた。

丸山氏は上高地のために家産を盡したほどの山の讚美者である。山を語り爺さんを語る氏はいかに仙骨を帯びたる人である。

ふたたび雲がときれて日光が水柳の葉を照らしつけた。西の窓からは梓川のほとりの水柳の葉

越しに焼岳の緑い肌と、白く立ちのぼる煙とがすぐ近くの空に見えた。

明神岳の懸崖の中程から梓川の破を横切つて美しい虹がかかつてゐた。

わたくしたちは河童橋をわたつて大正池の方へ歩いて行つた。梓川の水はすでにいつものやうに青く澄んでゐた。岩魚を釣る男たちが水柳の下にしやがんでゐた。

梓川に沿うて十町ばかりも下つたところに温泉宿清水屋がある。山から下つて来たばかりの若い人たちが縁端に腰を卸して肩の荷を卸したりしてゐた。そこから六百山や、霞澤岳等の南壺式な岩山が梓川を控へて繪のやうに美しく眺められる。

すぐその隣の古びた家では、冬になれば熊を狩るであらう山の獵夫たちが五六人しきりに額をあつめて茶盤を見つめてゐた。

白樺の林のなかをくぐつて、焼岳の爆發の名ごりも生々しい熔岩や枯木の間を飛びながら池のほとりに出た。

十五年前の焼岳の噴火の際、吐き出された熔岩が梓川の流れをふさぎ、山を焼き、つくり出したのが大正池である。白骨のやうな白樺の幹ばかりが焼けのこつて池の中に林立してゐる。穂高の雪山が池の底深く沈んでゐる。岸では杜鵑がなき、老鶯がさへづつてゐる。

「オフイリヤが眠つてゐさうだ！」水柳の下の静かな影をかへりみて石川氏はかくいふ。たしかにそこにはこまやかな水柳の影にいだかれてオフイリヤのかなしき歌をきくにふさはしき水



のしじまがたたへられてゐる。雲はオフィリヤの影を見失うてなほ水の上をためらふ。願みれば頭上三千尺ばかりにして焼岳が燃えてゐる。山の肌は緒く荒れてゐる。燃えのこされた山の木がそのままに黒く焦げて針の山のやうな形をしてゐる。すさまじきほどに引きさかれた山の罅が當時の恐ろしい光景を想像させる。山を砕くダイナモの爆音が川下の方からつづけさまに響いて聞えた。

草を分け、行潦を飛んで梓川をわたり七八町ばかりも歩いたところに殊に美しい白樺の森林があり、川の瀬音を聞きつつ森をさ迷ふ。草むら越しに見る梓川の面にはすでに夕霧がこめてゐた。幾度か行潦を涉り、白樺やあららぎの小暗い葉蔭を過ぐれば向日葵に似た黄色な花が見渡す限り如何にも美しく下草を埋めて咲いてゐる。案内の男にたづねればかんじや草といふ。このあたりにはちゅうどなどいふグロテスクな花も見かける。木立がやや展けて青い空の影を仰ぐと見る間に六白山や霞澤岳の裾にからんで田代池がつめたくひろがつてゐる。水は浅い。しかし如何にも清冽である。その白く静かなる池の面を見ればむしろ死の湖とも名づくべきであらうか。どこまでが池であるか、或ひは草原であるか、沮洳地であるか、白樺の森であるか、劃然たる境はきはめがたい。夕霧のこむるところ模糊として或ひは森となり、或ひは水となり、草となる。空山一鳥啼かず、頽唐の氣冷たく漂ふのみである。じつと耳をすませば瀧の音が聞えるが、木立が深いために瀧を見ることはできない。十以上の小島が浮島といつた形で點々としておのがじし一つ

一つの死靜の姿を守つて池の面に泛かんでゐる。恐らくかつて一連の森林地帯であつたものが、水のために浸蝕せられて、その一部分だけがわづかに浮島のやうな形になつてとり残されたものであらう。その一つ一つの小島には石南花が咲き或ひは白樺の美しい幹がをりからの落日にやはらかな影を靜かな水の面に投げてゐるものもある。池の面には白い藻の花が咲いてゐた。わたくしたちはそこにもやはれてあつた小舟に乗つて小島の間をめぐつた。北すれば穂高の雪谿が池の底深く沈んでゐる。さらに東すれば六白山や霞澤岳が水の底に揺れ、西すれば焼岳の噴煙が池心に燃ゆる。

冷たい水、荒れたる草、田代池は蕭條として秋のごとく寂しい。

日は暮れてしまつた。わたくしたちは深い霧のなかを「五千尺」の方へかへつて行つた。

夜はふけてゐた。

隣の部屋では若い人たちが明日の行動について遅くまで語り合つてゐたが、それも絶えた。

夜は死のごとく靜かであつた。わたくしはランプを消して寝た。しかしどうしても眠れないのでガラス窓越しに空を仰いだ。

わたくしは肅然として大きな自然の前に魂を搏たれた。

海拔五千尺の梓川の磯は數里の間を霧につつまれてしまつた。そこには山を戀ふ若い人たちの



幸福な眠りが草のごとく静かに息づかひしてゐる。

その若い人たちの静かな草の夢を見守るかのやうに梓川の礫をめぐつて東西南北に一萬尺の穂高や、焼岳や、安房や、霞澤岳や、さらに鎗や、赤澤や、常念や、蝶や、大瀧の山々が夜の寒のごとく静かに暗く天に聳えてゐる。

天には雲一つなかつた。山はすでに秋のごとくつめたかつた。霧のやうな銀河が梓川を横切つて穂高の肩をかすめてゐた。何といふ動い山であらう。まことに巨人のごとき穂高は半天の崖のまたたきをとさして暗のなかに聳えてゐた。

\*

梓川は朝霧につつまれてゐた。水柳は露重く眠つてゐた。

鎗、穂高の雪路から島々にいたる十餘里の間、梓川は鐵のごとき懸崖に抱かれて帯のやうに流れてゐる。雪に解けて流れ落ちる花崗岩の砂は梓川の礫を銀よりも白く美しくしてゐる。その青い水と銀よりも白い礫をさしはさんで十餘里の間を爛々たる細葉につつんでゐる水柳はまことに上高地の黒い岩山のあひたに見出さるる唯一のなごやかな夢の巢である。

岩燕は水柳のやはらかな葉蔭に故郷をおもふべく、山を戀ふ若人たちは水柳のほとりに山を思ふべく、人を思ふであらう。

穂高の雪路には夜明け方の日の光りが薔薇色に漂うてゐた。山はまだ鐵のごとく黒く冷たかつた。

窓によりかかつて山をながむれば、まことに氣澄み骨冷ゆるを覺ゆる。

小梨平を過ぎ、幾度か丸木橋をわたり、徳本峠の方へ元來た道をたどること一里ばかり、梓川を横切つて木立の下をくぐれば明神ヶ池である。

このあたりに白樺の皮の無慚に剥ぎ取られたのを見た。ふかき憤りを感じるのはわくたしむとりではあるまい。山を愛することを知らぬ人は呪はれてあれ。ただ一人のエゴチックな心を充たすために幾千の山を愛する人々の心は暗くされる。

池の直ぐ手前に嘉門次爺の小屋がある。小屋のうしろにはつたう、しの花が白く咲いてゐた。雨が降りつづき、川があふれ誰れ一人訪ぬる者もない日など二日でも三日でも水に浸された小屋のなかで、黙々としてただ一枚の床板の上に眠つてゐたといふかれのおもかけを想像しながら池のほとりへ歩む。小鳥が美しい聲で鳴いてゐる。

池は一つであるが、中程に岬のやうな木立が突き出てゐるのちよつと見には二つのやうな形になつてゐる。直ぐ取つ付きの池はきはめてシンブルな形である。水は深く明るい。奥の池はさらに深く青い。岩魚が遊んでゐる。池は黒い森林につつまれ、直ちに明神岳の根に接してゐる。水の面には明神岳の斷崖が影を映してゐる。そこはかつて嘉門次爺が筏して岩魚を釣つてゐた池であり、かれの子嘉吉が溺れて死んだ池でもある。



自然よ時として人工以上の巧みさを弄ぶ。ここにも幾個の小島がある。小島といつても枯淡清明まことに拘すべき大きな庭石である。その一草一石の布置、稚樹の配列、老木の姿態は天工の妙をつくし微をきはめてゐる。

大きな島、小さな島、その間を瓊のやうな水と白い藻の花とがつらねてゐる。水は重くかはやいてゐる。静かに茶を點じて眺むべき泉水である。心なき旅人にとつてはほとんど何の感銘をも與へないであらうほどあまりに自然的な、靜的な、幽遠な、枯れ過ぎた天工である。春のごとく明るきがうちに茶の寂をたたへ、禪家の靜觀を籠めてゐる。わたくしは金剛寺の庭を聯想したのである。池のほとりには石南花が咲いてゐた。

わたくしはち梓川に沿ひ、牧場を横切つては放牧の仔馬のたてがみを撫で、さらに上流二里餘見河原へ急いだ。老木の蔭深く、下草のやはらかな牧場は奈良の淺茅ヶ原あたりをさらに幾百倍したる感がある。深山の姫百合の木ふかき蔭につつまれて處やかに咲いてゐるのを見る。

穂高の雪谿を背にして放牧の仔馬の群が梓川の清流を横切つて嬉戲してゐる小點景を見る。まさに天品である。

牧場を通り過ぐれば徑は懸崖に沿ひ、清流を俯瞰しつつ幾度か棧を渡り、丸木橋に足をすべらす。

足をとどめては脚下の清流に見入る。

アルプスの雪が解けて翡翠よりも青い淵を作つてゐる。まさに翡翠よりもかがやかに磨かれたる流れである。礫は銀よりも白い。

横尾の屏風岩。赤澤、常念、一の股、二の股を穿むやうになれば間もなく餘見河原である。雪崩に打たれて父子ともに死んだ喜作の名をとどめてゐる喜作新道、赤澤の横の匏松地帯に高く一部分を雲に包まれて走つてゐるのが見える。

川をへだてて赤澤の左手に、穂高の後方にもすこいほどな赭黒い鎗の尖端が蒼天に沖してゐる。それにつづいて左方に大雪溪を抱いた岩山の尾根が長く天を走つてゐる。

青い大空に接するばかりにそそり立つた赤黒い岩山の鎗の姿は旅人の心をおびえさせる。餘見河原から見たいかにもかたい鋭い岩山の感じ、更に赭黒い岩山の肌は北齋の富士に似てさらに峻にして硬く、物ごいものである。更に孤獨にして冷厳なるものである。空を被うて鬼氣迫るものである。

超人のごとく孤獨にしてさびしくものすこき青空の鎗をながむれば魂わななき何となき悲しさの胸にわくを覚える。ひそかに涙して山を仰ぐ。

ふたたび牧場の方へ道をたどつて徳本峠に達したのは午後の五時であつた。すくうしろから峠をのぼつて来た牧場の男たちは今しがた穂高の雪谿に熊があらはれてゐたことを話してゐた。



「あの雪路には昔から熊がよう出たものだ。わしは嘉門次爺さんからそんな話を幾度も聞いたことがあつた。」二人の男はさういつて穂高の雪路をながめてゐた。

徳本峠に立てば穂高はさらに高く、上高地は銀よりも白い梓川を抱いてさらに静かに横たはつてゐるのを見る。丸山氏にならつて神河内と呼ぶにかにもふさはしき別乾坤なることを悟る。

牧場の男たちは峠の木の下に羚羊の毛皮をひろげて穂高をながめながら酒を酌んでゐた。わたくしたちは走るやうにして山を下つた。

岩魚留の茶店の幼い子供たちは今朝山から捕へられて来たばかりの野兎の子をおぢちやにして抱いてゐた。可憐な野兎の子はすでに死んでゐた。山から捕へられて来た兎の子の外におもちやを持たぬ山の子をあはれと思ふ。さらに山の子らにおもちやにされて死んでゆく野兎の子を。

上高地の最も美しい季節は九月の下旬初雪のころである。山には淡雪がかかり、雪に隣する匂松、白樺の森林地帯はみちに燃え、上高地の草は青く、梓川の水は白く、たまたま秋の落日が穂高のいただきに黄金の雲を掃曳せしむる時、眞に上高地の美はきはまる。

わたくしは丸山氏のかういつた物語を思ひ出しながら峠を下つた。

ける上高地の「五千尺」を立つて十三時間歩きに歩いて夜の九時、眞つ暗な島々の宿に着く。草鞋の紐は無備にも切れてしまつてゐた。(大正十五年初秋の頃)

## 秋の山をたづねて

九月十七日はちやうど仲秋の明月にあたるといふので信濃の山の人たちは芒を切り、朝から月見の支度をしてゐた。

一茶の句を踏るまでもなく、昔から信濃は月の名所である。千曲、犀川の流氷が一つに流れ合ふ善光寺平の水に映る仲秋の明月の影を姥捨の山から見おろす感じはまた格別であるにちがひないが、高原の國であり山の國である信濃の月は何處にゐて眺めても他に見られない月の光りの美しさをもつてゐる。恐らくその原因の一つは海遠く、山澄み、空の色が深いせいであらう。

十五日の朝、といつてもまだ午前三時であつた。わたくしは山に登る時の習慣として、いざ山に登るとなればほとんど眠れないほどに興奮することがある。いつも山に登る朝は三時ころには起きて裏の落葉松の中で飯盒飯を焚く。その日も飯盒飯を焚いて夜の明けきらぬうちに家を出た。



前の澤で水鶏が鳴いてゐる。水鶏は夏も五月雨のころ鳴くものとはかり思つてゐたが、九月に入つてもまだ鳴いてゐる。無論五月雨ころに鳴くのと、秋ちかくなつて鳴く水鶏とは種類もちがふさうだが、思ひなしかこのころのは聲も低くわびしい。

その日の朝淺間の根腰を越えて、上信の國境を六里ヶ原に入つて秋草をながめた。六里ヶ原は南に淺間、北に白根を控へた大廣野である。この前たづねたころは天明の淺間の大噴火にもたゞ一軒焼け残つたとつたへられてゐる別去の茶屋があつたが、今は二三年前の雪の日の噴火に焼けて新しいバラックになつてゐる。

別去の茶屋あたりまでは數年前までは熊も出て來た話を聞いたが、今は自動車も通ふほどになつたので、熊が好むといふ淺間葡萄は昔のまゝにみのつてゐるが、熊の話はめつたに聽かれなくなつた。

六里ヶ原を横切つて秋草の花を見てのかへりにわたくしは不圖上信國境あたりの大空を見上げた。こんなに美しい空、こんなにも深い色の大空があり得べきものであらうか。わたくしは幾度かさう思つては立ち寄り、空を見上げた。

海の潮風が吹かないせいもあらう。山の高いせいもあらう。ともかく上州から信にかけたの高原の空の色はいひやうもなく深く、青く、みがき出されてゐる。信の月の名はいさゝかの割引もなく恐らく天下無比であらう。

十七日の明月を見るといふたのしみは、數日前から、毎夜空を仰ぐことを忘れさせなかつた。十五日の夜も月は落葉松の林の中に蒼白い光を投げてゐた。十六日の夜もほとんど雲もなき月の光りを落葉松のなかに浴びることできた。

「明月を見るならば碓氷の峠まで歩いて行つてのことだ。」と思つたので、沓掛から輕井澤を通りすぎて碓氷峠まで歩くことにした。避暑の客たちはほとんど歸つてしまつたので。廢墟の甲をたどるやうな心で芒の中を歩まなければならぬこともあつた。貸馬と書いた札を懸けた馬小屋には三四頭の馬が秣を喰んでゐた。

舊輕井澤の出外れ、峠へかゝらうとするすこし手前の老木の下に芭蕉の「馬をさへながむる雪のあしたかな」の碑がある。碓氷峠にかゝることに忘れかねる句碑である。

「今日こそ空には一點の雲もない！」峠にゆき着いて見晴し臺の上に立つた刹那、わたくしは子供のやうになつて空といふ空をながめた。妙義から榛名赤城まですでに夕暮の色をこめてゐる。西の空には八ヶ嶽、さらに遠く穂高、槍ヶ岳まが明かな輪廓を描いてゐる。淺間はいたゞきの石までが拾はれさうに大空に映つてゐる。

待つてゐた明月はまだ夕陽も落ちきらぬ間に忽然として利根川の白い流れの上に淺黄幕に懸つた芝居の月のやうな色と形であらはれてゐた。日が暮れて、いくらかの間を置いて地平線の上に



徐々にあらはれて来る満月を想像してゐたわたくしたちには、いさゝかあつけなさを感じないわけにはゆかなかつた。

山の上はあまり寒いので、碓氷権現の社家町の方へ行つて火を焚いてもらふことにした。

妻の藤棚にはまだ岐阜提灯などがつるしてあつた。藤棚の下に女が持つて来てくれた木を焚いてあたりには霧ともなく、雲ともなく、んのと山をつゝむ山気がたゞよひはじめてゐた。殊に妙義の怪奇的な曲線、描いた懸崖峭壁が月光を浴びて銀のごとく、鐵のごとくそゞり立つてゐる風情は碓氷の月をして一層神秘的にさへ感じさせた。利根の流れが月の下に杳然として漂ふ。しかしそれも間もなく消えて、野といふ野は一様に黝く、空のみが秋らしく澄みに澄み、磨きに磨かれてゆく。

地に這ふて一つの燈がまたゞく、二つとなり三つとなり、十となり、二十となる。

「高崎ですよ。」

「前橋、富岡、それから高崎のさらに向うに一つの大きな火が見えませう。あれが熊谷の火ですよ。」焚火をめぐつてこんな會話が取りかはされる。

運ばせて来た行厨が開かれる。けさ南の松山で狩つた初茸が煮られてゐる。酒を掬む。天下の秋はわたくしたちのものである。

「こんな雲一つない明月といふものは信濃では十年に一度もありません。」と社家町の老婆はいふ。いかにも信濃らしき明月である。高山の明月である。話は偶然にも見晴し臺の老婆のことに移る。十日ばかり前わたくしは霧の深い日、見晴臺の老婆の店に憩うて茶を飲んだことがあつた。今夜も軀一人で信濃上野の國境の月を眺めてゐるであらうと思つてゐた。

「あれは輕井澤のお祭の夜碓氷峠を歩いてゐて腦貧血で死にましたよ。」と社家町の老婆はいふ。今夜は軀一人眺むる山の月もないのかと思ふと無常寂滅の感慨もわく。

わたくしたちは峠を下りて、二里ばかりの道をふたゞび杳掛の方へ歩いて歸つた。淺間のいたゞきにはめづらしくいつもの白い噴煙も見えなかつた。近道をするために、わたくしたちはキャベツ畑の中を横切りながら幾度か仰いで月をながめた。キャベツ畑の隅にはキャベツや木炭を積んだバラック建の倉庫があつた。數年前の秋、田舎廻りの旅役者が来てその倉庫の中で芝居を打つたことがあつた。お姫さまに扮した若い女が舞臺衣裳のまゝキャベツ畑を歩いてゆくのを見たこともあつた。その可笑しさを思ひ出しながら、わたくしは淺間を見た。淺間は秋よりも靜かに明月の光りを浴びてゐた。

「あんまり月がいゞでとても眠れない。一層のことこのまゝ淺間の根腰をまはつて六里ヶ原までして見るか。」などといふ男もあつた。

わたくしは家に歸つてもなほ寝るのが惜しかつたので、落葉松の下を歩きながら月を眺めた。



雪よりも白く野菊が咲いてゐた。

突然夢を破られた。屋根も壁もみくちやにされるほどの激震である。空といふ空、地といふ地が摧け、裂け、落ちる音であらうか。わたくしは寝巻のまま飛び起きて北の縁側の雨戸を明けた。浅間の爆發である。仲秋の明月は照つてゐた。いかにも静かに。

北の半天が爆煙のために眞暗になつてゐた。黒い爆煙の柱が幾千尺の高さに登つてゐた。黒い柱をめぐつて、或ひは黒い柱の懐から幾十條の青い電光が走つてゐた。幾百千尺の高さに打ち上げられた石と石と相搏つ音が凄じい光りを誘ふ。明月の夜の静寂を壊る爆音の凄じさはまさに天空の嵐といふべきであらうか。地の底一面に湧きかへる熔岩の煮え立つ音であらうか。地を揺り、山を動かし、空に響いて響く。まことに名状しがたい無氣味さである。山の人たちは噴火口を御釜と呼ぶ。いかにも思ひつきな呼び方である。噴火口全體が、否、浅間の山全體が一つの釜となつて、岩を煮、熔岩を沸かしてゐる。岩の煮立つ音が秋の空にこだまして萬馬の空を翔けるよりもなほ凄じい響を立ててゐる。山は吐息するやうに呻つては熔岩を吐き出す。そのたんびに空に鳴動する。稻妻、空に相搏つ石、火山のスロープを跳躍しつゝ落ちてゆく火石、碎くる火岩、見る間に浅間はいふまでもなく、谿をへだてた前掛山も石尊山も一面の火の石につままれてしまつた。方幾里の間ごととく火の石に掩はれてしまつた。幸ひわたくしの家は落葉松の中の

一軒家であるために人聲も聴かなかつたが、沓掛の町では女子供の泣きさわぐ聲が悲惨であつたといふことを後で聴いた。爆發とともにわたくしたちの胸に泛かんだのは、夜の十時頃家の横を通つて浅間に登つて行つた人たちのことであつた。小諸口からもまた登山者があつたに違ひない。そんなことを考へてゐると天に沖して燃え立つてゐる爆煙の恐ろしさが聳々と胸に迫つて来る。庭の草の中に石の落ちて来る音がする。壯觀といへばまことに壯觀であるが、山に登つた人たちのことを考ふれば悲愴きはまりなきものである。一臺の自動車は沓掛から峰の茶屋に走つて行つた。これも後で聴いたことであるが、峰の茶屋の娘は沓掛の自動車をかしづいて来てゐるといふことであつた。嫁の里の安否を氣づかつた男は自動車を運轉してまだ石の降つてゐるなかを沓掛から峰の茶屋まで飛んで行つたのであつた。午前三時ころであつた。七十幾歳の依田老人が沓掛の方からわたくしたちの安否を氣づかうとたづねて来てくれた。歸りに老人は温泉に浸つて夜明けちかくまで六里ヶ原で熊を撃つた話などを若い者たちに話してきかせてゐた。夜が明けると浅間はいつもの静かな浅間であつた。熔岩の一部分が燃えてゐるほかは山の肌もいつものやうになめらかであつた。

「峰の茶屋では石が飛んで来て屋根や床を突き抜いたほどだつたので、親子五人が抱き合つて泣いてゐたといひます。」上州から藪を積んだ馬を曳いて来た男は、噴火のことなどは忘れたやうな顔をして通り過ぎて行つた。



二日前淺間の根腰を越えて、六里ヶ原に歩いた時わたくしは降の茶屋で三人の子供たちが、大きな空箱の中に入り、上から糸立を冠つて笑ひながら寒い風を避けてゐたのを見た。わたくしはその時のことを思ひ出しながら馬子の話を聞いてゐた。正午ころには降の茶屋まで行つた輕井澤の若い配達夫が拳大の石を拾つて来てくれた。石にはまだ硫黄の香が残つてゐた。十八日の空は飽くまでも晴れてゐた。庭の落葉松の幹には、胸毛の眞つ赤な啄木鳥が来てさかんに木を啄いてゐた。山は死より静かであつた。

十九日の朝は雨が降つてゐた。午後の二時の汽車で信濃大町から山案内の茂市が来るといふ電報であつた。雨の中を香掛の驛まで出かけてゆく。茂市はきよとんとして雨の中に下りた。

「山はどうだらう？」雨の中を歩きながらわたくしは山のことをたづねた。

「今年は早雪でな、十三日に立山は眞つ白でした。十四日には爺ヶ岳も、蓮華も眞つ白になりました。」

「出發がすこしおくれたかな……」

「山に登るのはすこしおくれたやうですが、途中までともお伴しませう。」茂市は淺間の爆發のことは知らなかつた。相かはらすのんきな山男である。

雨がひどく、霧が深いので外にも出られず、茂市は温泉に浸つては秋の山をながめてゐた。

二十日も雨であつた。わたくしたちは雨のなかをリュックザックを背負つて汽車に乗つた。

小諸あたりでは蕎麥の花が眞つ白に咲いてゐた。千曲川が霧の底に眞つ白な渦巻をなして流れ

てゐた。小諸の古城も、上田の古城も雨に濡れてゐた。わづかに取りのこされた城の石垣、矢倉の一部分も静かな秋の雨に濡れてかへつて尊かつた。わたくしは古城を見るたんびに茂市に指さして見せた。茂市はそのたんびに「あゝさうかな」と朴直な視線を向けた。秋の雨は行く先、来る驛ごとに冷たく降つてゐた。

姥捨を越ゆるころから日は暮れかゝつてゐた。旅役者の群がどか／＼と汽車のなかに駆け込ん

で来た。いつの間にか秋の雨に見入つて眠りこけてゐるものもあつた。明科で大雨のなかを大町行き

の自動車に乗りかへて、眞つ暗な道を走つた。大町に着いたのは九時ちかくであつた。雨は夜つびでどしや降りに降つた。

二十一日の朝も雨であつた。こけら葺きの屋根、石を載せた屋根から屋根へとつゞく大町は、なつかしい信濃の山の町の一つである。舊い糸魚川街道が北から南へ走つてゐる。その街道を中心に行儀よく山の町は並んでゐる。老木があり、高瀬川の礫があり、湖水があり、雪をいたゞいた鹿島槍や爺ヶ岳があり、いかにも落ちついた町である。對山館の三階の欄干に凭れて街を眺めてゐるとしみじみと旅のこゝ



ろも湧く。松茸やしめじを並べた店頭に秋の雨がけさもしと／＼と降りつゞいてゐる。この前大町をたづねた時わたくしはしづかな時雨の中に笛の音を聞いたことを記憶してゐる。

雨を冒してわたくしたちは大町を出た。大町から松本、松本からさらに島々までは電車である。今年の秋は登山者の絶えたるを見はからつて燕から、大天祥、槍に出て初雪の山を越ゆるつもりであつたが、雪は十日以前から降つてゐてすこし危険だといふことであつたので急に計畫を改めて先づ上高地に入ることにした。

島々からは奈川渡を経て中の湯まで自動車を通ふやうになつてゐた。上高地入りもこれではあまり樂すぎると思つた。

連日の雨で梓の水も濁つてゐた。島々から稻核へと、山路にかゝるにつれて雨は一層はげしくなつて来た。崖がぐづれ自動車を下りて歩かなければならぬこともあつた。谿が深く、山が急峻なために自動車に乗つてゐてもしば／＼ひやりとさせられることがある。

谿の紅葉が點々と燃えはじめてゐる。奈川渡で自動車を乗りかへるために一時間餘も待たなければならなかつた。待合所の人たちは將棋をさしてゐる。雨はますます／＼降りしきる。懸崖の紅葉は炎よりも赤い。中の湯行きの自動車に乗つて出發する。紅葉はさらに紅くなる。水が澄み、雨は小降りになる。中の湯から一里半の山徑は焼岳に沿うて歩かなければならぬ。淺間の爆發を見たばかりの者にはあまりいゝ氣持ちではない。焼ヶ岳は靜かに燃えてゐた。河童橋の畔の旅舎五

千尺にたどりついたのは薄暮のころであつた。宿の人が氣をきかせて運んでくれた大盥のすゝぎ湯に冷えきつた足を入れた刹那は、さすがに古風な旅をうれしいと思つた。

この前上高地をたづねたをりは島々から大あらしの中を徳本峠を越えて夜の十時すぎに五千尺に着いたが、上高地に来るたんびに不思議に雨に縁がある。五千尺の窓に凭れて梓川の礫と水楊の並木を越えて穂高の雪溪に魂を奪はれてゐる間に日は暮れてしまつた。今夜はひつきりなしにはげしい雨の音である。

夜に入つて提灯の火が雨の中を走り、やがて消えた。中の湯まで出かけて行つた若者を探すためである。あらしの中を走りゆく提灯の火は何となくものすごいうちにも寂しいものである。

二十二日の明け方から山はあらしになつた。穂高も明神嶽も雲につゞまれてゐる。時々姿を雲の上にはあらはす。

九時ころになつて俄にあらしが止み、空が晴れて来た。穂高の懸崖を縫ふて幾十條の瀧が落ちる。走。碎ける。飛ぶ。銀のごとく雲をへだて、かどやく。わたくしは雨の日の穂高を愛する。雨上りの穂高を愛する。

見よ、見よ。わたくしは叫んだ。

嶺はけさの雪につゞまれてしまつた。

雪と雲の間に火に燃ゆる紅葉が。雪と岩の間に、岩塊と草原の間に、天に懸つて紅葉が燃ゆ



る。空は飽くまでも深く、高く、青く、紅葉は天に懸つて燃えてゐる。見よ、見よ。わたくしは叫ぶ。

わたくしたちは明神池を見るつもりで五千尺を出かけた。小梨平の片隅には水車の音が笛のやうに響いてゐる。山鳩が飛び、駒鳥が鳴いてゐる。

梓川の丸木橋をわたつて取付きのところに嘉門次爺の小屋がまだとりのこされてゐる。この前たづねたところは小屋のまはりに蔦うるしの花が雪のごとく咲いてゐた。

明神池の岩の上で飛驒に歸つて行くといふ商人らしい男と一緒に朝の山をながめた。

空はすっかり暗れてしまつた。駒鳥は澤といふ澤、溪といふ溪に鳴きはじめた。わたくしたちは牧場を歩いた。さらに二三十の丸木橋をわたつて槍見河原まで歩いて行つてしまつた。あまりに水が美しく、山の紅葉が燃え、空が青いので。……槍ヶ嶽は黝い岩山の姿を天にそびえさしてゐた。はじめにその河原に立つて槍を見た日、涙を落したことを思ひ出した。

日が暮れ五千尺に歸つた。五千尺の主丸山氏も松本から夕方山に歸つて見えた。丸山氏に相談して明日の朝槍ヶ嶽に登ることに決める。案内二人に米四升、味噌、醬油、罐詰、夜具、木炭二貫目を運ばせることにする。

二十三日。三時には眼がさめた。星がまたゝいてゐる。大町からつれて来た茂市のほかに五千尺の案内人を連れる。松下といふ頼もしき青年である。かれは黙々として山を歩む。いかにも忠

實なる青年である。山の男らしき男である。

「いゝお天気だ……」日本晴れの秋日和である。駒鳥はけさも澤から澤に鳴き、溪から溪に囀る。一溪を横切ること駒鳥の音を聴く。一澤を見出すごとに駒鳥の唄を聴く。山に登ることはうれしい。しかし澤に來、溪に來ること駒鳥の聲を聴くのもうれしいことである。幾度か足をとめては澤の駒鳥を聴き、尾根の紅葉を仰ぎ、初雪に飾られた雪溪をながむ。栗鼠が跳び、野兔が走る。

秋の山はまつたく登山者の姿を絶つ。うれしいことの一つである。山の尊さがとりもどされ、山の高さがとりもどされ、山は静寂のうちにかの女のまことの相をとりもどしてゐる。

一の俣の小屋も、槍澤の小屋もとさされてゐる。紅葉のみが燃えてゐる。雪を待つ白樺の林には駒鳥が鳴いてゐる。

赤澤の根腰を越え、大喰と中岳を真正面に受けて一時間も歩めば千島桔梗、岩桔梗、うさぎ菊、龍膽が夏のさかりのお花畑の名残をとめて咲いてゐる。薄雪草はやゝ終りにちかい。わたくしたちはごろごろの石道にしがんで岩の間の木の實を摘む。二三日前に降つたばかりの初雪がほんのりと雪溪の古雪を化粧してゐる。

坊主の小屋には幡龍上人の石像が岩の間に置かれてゐる。昔の坊さまはえらいものだと思ふ。道もなく、案内もない時代によくこの山奥にたどりついたものだと思ふ。



一羽の大鷲が西岳の方から槍をかすめて大喰の岩にかくれる。翼をひろげたところは一丈もあらうと茂市に言ふ。

殺生小屋の戸を明け、茂市と松下青年が夜の支度をする。小屋の横の天水溜には氷が張つてゐた。松下青年は氷の水を割つて氷を洗ひはじめた。富士も見え、赤石も見え、八ヶ嶽も見え、小屋の直後の槍の穂先が今にも落ちかゝつて來さうである。

夜の空は殊にうつくしかつた。一萬尺の岩山にたゞ一人立つて大空を見上げてゐる自分自身の姿に氣附いた刹那、をのゝきに似た感じもわいた。岩も動く、空も動く、わたくし自身の姿も岩のごとく冷たく動かつた。

星の數の無限なる。天の無限なる。槍の沈黙の深さ。おぞましき、尊さ、神祕さ、孤獨なるわが影の寒さ。

八時ころであつた。わたくしははじめて落石の音を聞いた。中岳であらうか赤澤であらうか。奥穂高であらうか。

沈黙そのものゝ山の静寂を破つて遠い嵐のごとき落石の音が響く。嵐よりも遠く、嵐よりも近く、やがて嵐よりも遠くへだたりゆく落石の音は、秋の山の神祕の一切をこめて暗に消えてゆく。あたかも滅びゆく人間の魂の行方を聯想させるやうに。

落石の響は一萬尺の空をかすめて秋の空遠くやがて暗い溪の底に吸ひこまれるやうに消えてゆ

く。

十分或ひは二十分の間を置いてはものすき落石の音がつゞく。山の吐息のごとく。山の死滅のごとく。一切の偉大なるものゝ最後の日が刻まれてゆくわびしさをこめて。

二十四日。午前三時ころからふたゝび山の岩のくだけ落ちる音がつゞいた。

「落石だなあ……」茂市と松下青年が暗のなかで語つてゐる眠さうな聲が聞えた。

落石の響は空をかすめて、遠い溪に消えてゆく。わたくし自身の魂を誘ふやうに。

「寒い、實に寒い……」と誰かといふ。茂市が屋根裏のやうな寢床から下りて來てわたくしの枕もとに炭火を焚きはじめた。

夜が明けかけて來た。

落石につゞいてはげしい雷鳴がはるかな下の溪に響く。

「雪が降つて來ましたよ。」と松下青年が土間の竈の方から聲をかける。わたくしは起きて行つた。松下青年は氷の張りつめた水を掬んでは朝の支度を急いでゐる。

「昨夜は槍の絶頂の月をながむるつもりでゐたが、月が出ないうちに眠つてしまつた。けさはこの雪が……」茂市はきよとんとして槍から大喰、中岳をうづめた雪をながめてゐた。

「早う山を下りんことにやあぶない……」茂市は暗い顔をしてゐた。見てゐる間に雪は三寸になり四寸になつた。「もしこの勢で半日もつゞけられた日には……」そんなことを考へてゐると



不安な想像がわいて来て仕方がなかつた。

「出来るだけたくさん食べて置くに限る。」そんなことを語りながらわたくしたちは味噌汁を飯にかけて無理に喰つた。

幾度か窓を明けて空をながめた。

この冬有名な登山家が落ちて死んだ穂高のビイクも見えなくなつた。中岳も見えず、直ぐ眼の前の大喰も雪あらしにつままれてしまつた。

「雷鳥ですよ。雷鳥が鳴いてゐます。」

「親鳥を呼んでるのでせう。」

わたくしたちは耳をかたむけて、雪あらしの中にわびしく響いて来る雷鳥の聲を聞いた。

## 竹の小窓

けふも柘家の縁端にうづくまりて半日を過ごす。庭の面に散り敷く笹の葉の一つ一つを拜む心になりてじつと見入るのも京の旅である。苔むせる石も、池の藻草も、むべの葉に沈む日さしも魂の奥ふかく迫り来る。竹の植込みをへだて、見るつゝまじやかな小窓の障子にも秋近き隣り人の心を感じる。

いつの年であつたか、京極に文樂の「堀川」を聴いてのかへるさに鴨川縁に廻り、しみじみと京の雪に降られつゝ柘家に歸つて来たことがあつた。千鳥も鳴いてゐた。あの夜も私はこゝの竹の植込みをへだて、小窓に映る灯をすゞろなる旅心に眺めた。

芳野の花を見てのかへりに、畝傍、飛鳥川のほとりに大和の春を惜しみ、京に入りては鞍馬貴船の奥に逝く春を追ひ、こゝの竹の小窓に面して終日静かな古都の雨を聴いたこともあつた。



或時は小窓にゆらぐ燈の影に祇園囃子の音をなつかしみつゝ旅の心に浸されたこともあつた。詩仙堂の木立深く鹿追ふ僧都の音は時雨するころの洛北のあはれを一つにこめてゐる。竹を植ゑ、竹を友として生涯清澗の聲にを澄ました丈山翁を偲んだのもこゝの窓前の竹の小蔭であつた。小窓の前の一叢の竹、そこにもありがたき古人の心は動く。

おうおうと唱へつゝ早曉の街を行く托鉢僧の聲に残夢秋さびて、竹の葉に露の音もわびし。ゆくりなくも小窓のかなたに宿り、朝立つ旅人にもそこはかのあはれを憶ふ。さすがに京の旅なればこそ。

## 旅日記

七月十五日朝東京驛を立ち、その夜は岐阜に泊る。長良川の鵜飼を見る。月は鈴鹿にかかる。

船は二人の船頭の手を押されて流れをさかのぼる。舳に碎くる水に淡く月の影の動くを見る。長良川の鐵橋の欄干に凭りて川面まで精霊船を吊りおろす人々の影が見える。

五つ六つ七つと精霊船の糸につるされては長良川の河面に落されてゆく。糸を手離されるともに精霊船は波のまにまに川下へ川下へと流されてゆく。遠くへだたれば鵜飼見る船の燭と見分けがたくなる。やがて落ちかかつた月の下に消えてしまふ。秋の夜のごとくあはれである。

颯い上流の山峽を下つて鵜飼の船の來るまで三時間ばかりも岸に船をつけて待つ。所在なさに空を仰ぐ。銀河の面にはすでに秋風が立つてゐる。

七月十六日の夜名古屋を立ち伊豆へ行く。駿河から来てくれたYと同じ上り列車に乗る。夜の



十二時から夜明け方静岡へ着くまで語り明かす。不圖扇に落書した歌を自分の扇にも書けとねだる。

花さかば照る日よし

花ちらば雨もよし

青葉七日

わか葉八日の

旅なれや

汽車の中にて書くことはむつかしいので、伊豆の温泉に着いてから書いて送ることにしてわかる。

伊豆まで来いとすすめる。伊豆まで一緒に行きたいといふ。だが伊豆まで行くわけにゆかぬのでとYはしよげる。

瘦せたるかれの姿を静岡のステーションに見捨てつつ沼津へ行く。

伊豆の海邊には盆の十六日の朝のこととて糶を立て、香を焚いた家が並んでゐた。精霊棚はみな家の外にかざられてゐる。

天城にはまだ鶯が啼き、ほととぎすが飛んでゐる。

伊豆を立ち長崎への旅に立つたのは七月の二十二日であつた。

大井川のほとりではYの一家の人々が田圃の中に立つて走つてゆく汽車の中のわたくしを見送つてくれた。

關ヶ原あたり、琵琶湖のほとりは合歡の花がさかりであつた。夜は雨がひどく、幾度か嵐の音に眼ざむ。

一年振りに下ノ關をわたつて九州の土を踏む。

父と母の墓は松山の上の緒土の中に出てゐた。

墓の傍に小ひさな水溜りがあり、そこには眞つ黒な烏蛇が浅い草の中にとぐろを巻いてゐた。

子供のころよく石を投げていたづらをしては烏蛇に追ひかけられたことを思ひ出した。

父が亡くなるころ赤い花が咲いてゐたことや、母が亡くなるころ痛の苦痛に耐へず、庖丁を持つて来てみぞおちを突き刺してくれといつたことなどを思ひ出した。

赤い百合と蝦夷菊をそなへて緒土道をつたひ松山を下る。

松山の下は谿川になつてゐて水はまだ汚されてゐない。ほとんど昔のままである。若い遊女たちが髪はこはれたまま、浴衣一枚のしどけなき様をして水にはひつては洗濯をしてゐる。

谿に沿うて船乗りを對手の遊廓が並んでゐる。その暗い格子戸の前には六七人の花賣りたちが



露を帯びたままの秋草を賣つてゐる。

眠つたやうな静かな遊廓の軒下を傳うて裏山の火葬場に骨を拾ひに行く人々に逢ふ。

長崎の舊友Uの家をたづねたのは七月の二十五日であつた。通辭某の邸跡といふので、庭には日本に見馴れぬ古木が残つてゐる。雨に濡れながら諏訪神社に詣つ。

夜は空晴れて十四日の月が古い港町を照らす。

月を浴びて漆喰町駕籠町あたりを見て歩く。祇園祭の夜だつたので若い女たちは手に手に眞つ赤にうれた酸漿を購うてかへつてゐる。枝たりの酸漿を持つた女たちを月の光りに見るのはうれしかつた。わたくしたちの子供のころの長崎に比べてひどく西洋人の影が寂しくなつた。丸山の入口を右に折れて管内に出て、昔の支那人町を歩いて見たが、支那人の影もすくなくなつた。美しい支那の女が嬰兒を抱いてまんまるい月を見てゐた。

出島の和蘭陀館はわたくしたちが子供のころは波の音を庭先に聞いたものであつたが、今は海は埋められて工場の際になつてしまつた。氷菓の看板が雨に濡れたまま立てかけられてあつた。

「アイスクリームをくれないか。」とヴェランダの下から聲をかけたが、二階の窓から顔を出した女は、

「二階にお上りまつせ、色々西洋料理があります。」と答へる。

和蘭陀館の庭は草深く雨に濡れてゐた。

昔の波止場から船を浮かべて月下に霧を横切り稻の岸に上る。岸を歩いてふたたび船に乗る。長崎ホテル、大浦のあたりは燭が消えてしまつてゐるのが昔に比べてひどく寂しくなつた。奈良、京都などに見るやうなかつて華やかなりしものの滅びゆくわびしさに似たわびしさが月の下の舊い港をつつんでゐる。

枕ちかく筑後町の天主堂の彌撒の鐘を聴いて眼ざめ、浦上の丘の天主堂の彌撒を見にゆく。浦上の天主堂と路一つへだてて城のやうな石垣を築き、監獄が作りかけられてゐる。二人の囚人が目くらむほど高い石垣の上に鎖につながれたまま立つて石を積んでゐる。その獄衣の姿が秋近い紺青の空に反映してゐる。

色硝子の高窓を洩れて来る光線が幾つかの虹を描いて禮拜堂の床に落ち、白いヴェールを被つて跪いてゐる女たちや、聖母の像をつつんでゐる。懺悔聴聞僧のスリッパの音が高い天井にかすかに響いては消えてゆく。

Uに別れて夜汽車に乗る。十五夜の月が長崎を抱く彦山のいただきから燃えて出た。大村灣の月はいつながめてもいい。

早岐の手前二十丁ばかりのところに一人の友人がある。對馬の兵營時代の親しい友人である。海から半町ばかり離れた小高い丘の上の森につつまれた大きな邸である。眞つ黝な椗の森につつま



まれたかれの家を月が照らしてゐるのをわたくしは汽車の窓から眺めた。いつの年であつたか、かれの家に泊まつて月下に鱧を釣り、酒を飲んだことがあつた。十年餘も別れたまま逢つたことがない。郷愁にも似たる悲しみがわく。

七月二十八日。九州の旅を終へ、ふたたび伊豆にかへる。伊豆の山には白い百合がさかりである。

八月六日。信濃沓掛に着く。

落葉松の林の中の家を借る。家は落葉松の落葉にかこまれ、高原の草花につつまれてゐる。北の縁側より落葉松の木立をへだてて軒に迫るほどに近く淺間を見る。

雨が降り、雨が晴れる。

山には雲がかかり、雲が消える。

淺間を見て一番に思ひ出したのは亡くなつたTのことであつた。

そのころ二十の青年であつたかれは秋の嵐の日淺間に登つたが、小諸の牧師に助けられて自殺を思ひとまつた。それからちやうど十年の後かれはやはり自殺をした。

淺間の斜面を眺めてゐると、Tが考へ考へ寂しい顔をして登つて行つたであらう徑のほとりの

岩塊が高い天に反映してゐる。

郭公鳴き、鶯鳴き、瑠璃鳥鳴き、水鶏鳴く。

七輪一つ、十能、火鉢、餉臺、炭取り、箒、はたき、アルミの釜、鍋、庖刀、まないた、目筈、バケツ、干杓各一つ。茶碗皿三人前といつた風な簡易そのもののやうな生活である。床の間だけは長野からたづねて来たSのおかげで直入の觀瀑の一軸を借りて飾ることができた。

夜に入りて霧深く、雨はげし。

八月七日。雨、甚だ寒し。ネルを着る。夕方雨の中をおまはりさん見ゆ。

八月八日。立秋。午前五時の汽車で越後高田へ行く。寒し。長野にて二十人ばかりの新聞記者らしき人々のはひつて来た。俳人一茶の百年祭のことで一茶の郷里柏原へ行くらしく、一行は柏原で下りた。三年前の秋わたくしは柏原に一茶の跡をたづね、小丸山の墓に詣つたことがあつたので曾遊の地といひ何となくなつたかしかつた。

柏原から先はわたくしにとつては初めての旅である。關山あたりの谿間には白樺が多いが目立つて見える。

吹雪、雪崩れを塞ぐために線路に沿うて雪よけをしつらへてゐるのも珍しかつた。妙高にはまだ雪が白く残つてゐた。裾野には月見草が川原の石の間に咲きみだれてゐた。

月見草の積をわたる子供らの姿のいかに孤獨なることよ。



越後信濃の境にはコスモスが秋らしく咲いてゐる。

信濃路の子らは寂しからむ、月見草咲くに雪のつもりて。

信濃を過ぎて越後に入り高原を走る汽車は歩一步と日本海の岸へ下る。佐渡の海、加賀の山、芭蕉が傾城と一つ家に寝たといふ市振の關、『奥の細道』の記事がそれからそれへと思ひ出される。

空は歩一步越後に入るとつれて低くなる。地と空が相抱き合つてゐる。そこには灰色の憂鬱が旅人の魂を窒息せしめさうに沈んでゐる。

楡の並木がある。いかにもかほそく頼りない姿である。土を打つてゐる人々の姿と低い空とが一樣に呻いてゐる。何といふ陰鬱な土であらう。

そこに働いてゐる人々の姿を見れば、人は呻きつつ土を打ちつつ死ぬるのが運命のやうに思はれる。自然は決してかれ等のコムラーでなく、自然はただかれ等を虐げんがために嚴として冷たく、地のつづくかぎり、空のつづくかぎり憂鬱な眼をしばたいたいてゐるやうに思はれる。そこにはまだ神話時代の恐ろしい殘虐な山の神々が山鳴りを起して無力な人間を脅かしつつあるやうに感じられる。

高田の町は暗い町である。遠い旅路の涯の町を思ひ出す。雪を防ぐために張り出された長い軒

の下に作られるであらう雪の日の暗い、狭い通路を想像するとなつかしくもあるが、あはれでもある。

曇つてゐるせむか、町の屋根から直ぐ陰惨な空と結びついてゐる。そこには空といふものが無い。地の憂鬱から直ぐに雲の憂鬱へと結びついてゐる。わたくしは町の詩話會の人々から贈られた木彫の人形を見た。素樸にしてむしろ稚拙にちかひものであるが、楯に依を積み、腰を屈めて楯を押し一人の男を刻んだものである。それは越後の冬を象徴したものと思はれる。男の額には不用意に刻まれた数條の深い皺がある。

憂鬱なる自然、憂鬱なる町、憂鬱なる空。そしてそこに刻まれたる憂鬱なる木彫人形。

偶然にもわたくしは高田の柳糸郷といふ旗亭で御風氏と逢ふことができた。

十年振りであらうか。話は亡くなられた抱月先生のことまで盡きた。死ぬる者のかなしみ、生くる者のかなしみ。

雨が降つて来た。

越後の旅はさらに憂鬱の色を濃くした。

日が暮れて来た。

疲れたる農夫たちはなほ雨の中に立つてゐた。

雪が深いためであらう。どここの家でも中二階ほどの高さのところさらに窓を切り開いて明り



を室内に取り込むやうな仕掛になつてゐる。

雪國の人々にとつて雪はなつかしいものであらう。しかし何となく悲しいなつかしみではないか。

八月九日。寒し。

浅間へ登る人多し。

夜の八時幾分の汽車が沓掛に着く。その汽車が着いて二十分も経つとわたくしたちの家の下の崖道を浅間登りの人たちが群をなして上つて来る。夜の十一時ころの汽車はさらにたくさんの人を運んで来る。

家の前五六間のところに谿川があり、夕暮れになればよく水鶏が鳴いてゐる。家の西手の落葉松の林の下は急に崖になつてゐて、その崖の中程が沓掛の宿から浅間の根腰を越えて上州六里ヶ原を横切り草津に行く本筋の道になつてゐる。しかし今は軽井澤から草津行きの電車が出來たので、六里ヶ原を横切る旅人はほとんどなくなつてしまひ、この道を通ふ人といつては沓掛の宿から官林の間伐に出かける樵夫か、上州へ荷を運ぶ二三頭の馬くらゐなものである。北の縁側からは高原の雑草地帯が落葉松の林に界してひろがつてゐるのが見える。林縁に沿うて草津道が走つてゐる。もし林縁に沿うて道を下つて来る人影を見出せばいつまでもわたくしはそれを眺め

てゐる。人の影、馬の影が草の中にあらはれ、草の中に隠れては近づいて来る。草には秋の風が吹き、花が咲きみだれてゐる。

炬燵やぐらを馬の鞍にくくりつけ、それに乗つて六里ヶ原を横切り、浅間越えをして信濃へ出て来る旅人もある。多くは草津からの歸りの旅人である。氣の毒な病を恥ぢ、電車にも乗ることをせずわざわざ遠い道をまはつて来るのである。

秋草の中にそのやうな馬上の旅人を見るのはさびしいものである。

ここでは誰れでもなつかしい。終日人と語ることもないので、夜になつても崖の下の道を通る人があればそこまで飛び出して行つて人を見る。

「浅間へはこの道でせうか？」

「たいていはそこに立つてゐるわたくしを見出して聲をかける。

「その草の道を左にまがるのです。」

カンテラを點した者、提灯をさげた者、たいていは糸立を着、白い息杖を持ち、草鞋を穿いてゐる。

ほとんど毎晩のやうに、十一時の汽車で沓掛に下りた人たちがわたくしの家の崖の下の道を通つて浅間へかかるまでは、わたくしは起きてゐて、道の傍に立つてゐる。そして人々を見る。

夜になればいつも浅間は雲につつまれてしまふ。たまに動い浅間がはつきりと大空にそびえて



ある夢のやうな姿を見れば、何となく恐怖の念に打たれる。夜の黝い山はあまりに莊嚴である。朝の九時ころになれば前の草原を横切つて浅間がへりの糸立姿の人々が下りて来る。わたくしはまた崖の道まで走つて行つてその人たちを見る。

「山は荒れてゐましたか？」

「石が飛びましたよ。」

「顔を土の中に埋めるやうにして風を避けましたよ。」

「御来迎はどうでした。」

「よく見えませんでした。」

わたくしはその人たちといつても同じやうな會話をくりかへす。

沓掛の町は燕が多い。

家は昔ながらの古さで、二階の手すりが二尺ばかりも往來へ飛び出してゐる。太い柱は煤光りがしてゐる。頑丈な格子戸が目立つ。どこの家にも燕が巢喰うてゐる。一軒の家の軒端に十個ぐらゐの燕の巢が並んでゐる家もある。軒には燕の巢と並んで古い繪馬が幾つも釘付けられてゐる。罌粟とおいらん草とコスモスが咲き、町の兩側を美しい水が流れてゐる。

町の角の小暗い店に立ち寄つてロシア人のW氏が葡萄を買つてゐるのを見た。W氏は大きな男

である。膝頭くらゐまでの浴衣をバンドでしめて、小ひさな葡萄の房を手のひらにかかへて、恐らく故郷の唄であらう、何か唄をうたひながら戸外に出て来た。そしてそこいらに立つてゐる日本人と笑ひながら話してゐた。革命で追はれて、一人の娘さんとも別れ別れになつて、病院にはひつたり、執拗な病氣になやまされたりして、不安な日を送つてゐる外國人を高原の古い町に見ると氣の毒にもなる。W氏は唄をうたひながらキャベツ畑の中を歩いて行つた。

八月十四日。芒の穂出づ。萩咲く。

八月十五日。曇。時々雨。草原を横切り、山に出で浅間越えの中程まで行つたが、日が暮れかかつたし、雨まで落ちて来たので引きかへす。

わたくしは山の中で一人の五十あまりの旅人と逢つた。かれは金剛杖を突き、白い手甲、脚絆を着けてゐた。山から山を歩く人であらう。

肩には小ひさな行李を負うてゐた。

ただ一人で山に登る人を見るのはさびしいものである。たいていは二人三人五人六人と連れを作つて登る人が多いので。

嵐が吹いてゐた。嵐は雲を叩きつけて通り過ぎた。雷が鳴つてゐた。しかしその旅人は歩一歩山を登つて行つた。嵐の聲をも、電光をも、雨をもまるで知らないがやうな静かな足どりで。



何と言ふ静かな孤獨さであらう。悲愴な孤獨であらう。尊いほどに。

わたくしは幾度か振りかへつてかれを見た。

かれは登つて行つた。

水のほとりには水鶏が鳴いてゐた。

夜つびて嵐のために落葉松の林がさわぐ。

八月十八日。雨。駿河のYの病氣のことを聴く。かれを思ひ終夜眠つては覺める。

いつものところからか臺所の棚へ一疋の馬追ひがはいつて来てゐたが、後には連れを誘うて来たのか二疋になり、數日経つと三疋になつた。そして夜になると窓の中で鳴く。窓からは星が美しい。

山まで二里ばかりの道を魚を賣りに来る若い男がゐる。

十六の年から二十五まで十年間、秋から冬までを越中の山にはひり、霞網をかけて鳥を取つてゐたといふ男である。「金儲けだけではあんな商賣はできませんよ。秋になつて渡り鳥が飛んで来るころになればもう山にはひりたくてたまらないのです。三十日四十日と一度も里に下りることなく、森閑とした山の中にあるのは何ともいへないものですよ。いつも朝の三時ころ起きて白と夜が明けるときまで焚き火をして、鳥の渡つて来るのを待つてゐる。東の空が白む、空が燃える

空が見えないほどの小鳥の群が飛んで来るのです。そりや、熊にだつて幾度も逢ひました。だけど熊は害はしません。こつちで早く氣付いて見ぬ熊をしてさへゐればいいのです。」若い魚屋の話は盡きない。かれは魚の腐るのを忘れて山の話をする。

高原には渡り鳥が多い。

長野のSは、「山の町では秋になれば時々渡り鳥が町の電柱に打つ突かつて死んでゐる、それを町の子供たちが拾ふ」といふ話をしてゐた。

八月二十六日。浅間に登るのだと思ふとうれしくて眠れない。小學校のころ遠足にゆく前の夜うれしくて眠れなかつたことを思ひ出す。替への草鞋を支度し、糸立、息杖を枕もとに置いて寝る。

夜の十二時に家を出る。霧が深くて山も見えない。一三十分も歩いてゐる間に髪も糸立も雨に濡れたやうになつてしまふ。草原を過ぎれば密林地帯になるので、月の夜だが道は小暗い。八月も末なので登山者はない。ただ一人密林地帯の中で山を下つて来る大きな男に出逢つた。かれはちよつと見たところでは船乗りのやうな服装をしてゐた。そこは深い崖に沿うた道であつた。右に避けようとするればかれも右に来、左に避けようとするれば左に来るといつた風で、ちよつと氣味悪かつたが、かれは酔つてゐたのであつた。



今晚は！ と聲をかけるとかれは夢からさめた人のやうに驚いて、今晚は！ と返辭をした。月の明りで見えたかれの顔は岩に打ちつけたのであらう血が黒くにじんでゐた。

「どこへゆくんです？」  
「あすの朝の汽車で東京へゆくんです。自動車の部分品を買ひに行くのです。」かれは躊躇として山を下つて行つた。

一里あまりの密林地帯を通り抜けて信濃上野の國境に近い峰の茶屋の明りを霧の中に見出した時は生きかへつたやうな氣がした。

峰の茶屋には樁火が焚いてあつた。火の傍に銃が横たへられてあつた。

「どうしたのです？ 今ごろ鐵砲なんか。」

「昨日六里ヶ原に熊が出ましたので。」

「熊が出ましたか。」

「もう淺間葡萄がうれてきましたから。」  
峰の茶屋を左に折れ、ふたたび林に入り、七八丁歩いたところで行者戻しの嶮にさしかかるのである。空は低く、霧が立ちこめて一間先は見えない。息を切らして五六丁歩いたところから風がひどく吹いて來た。十丁ばかりも歩いたころ風はさらにはげしくなり、空には星が一つ二つ三つと見えて來た。刹那である。風は石を飛ばして吹いて來た。振りかへつて見るとピラミッド型の

怪物のやうな大きな眞つ動な山の姿が忽として中天にそそり立つた。研ぎ澄ましたやうな月が山の面を照らした。山の投影か！ 幻像か！ わたくしはそこに立ちすくんでしまつた。そして物の化のやうなピラミッド型の黒い山を拜んだ。合掌して拜んだ。跪かんばかりにして。何といふ莊嚴さであらう。何といふ無氣味さであらう。動いピラミッドは今にもわたくしを壓するほどに高く直前に、中天にそびえてゐる。迫つてゐる。

風が石を吹き飛ばして來た。

霧が千切られては飛んだ。一片々々の霧に月の光りが冴えてゐる。

動いピラミッド型の山の縁には落葉松の白く枯れた幹がちやうど魔王の怒つた髪の毛のやうに立ち竝んでゐた。山を叩きつける嵐の聲が恐ろしい程に聞えた。やがて動い山はふたたび霧にとざされてしまつた。

淺間の噴火口の呻る聲が地の底から響いて來た。石を飛ばす嵐が呻つた。先に登つた人たちは岩の蔭に這ひつくばつて嵐を避けてゐた。

東の空が白みかかる。

御來迎！ 御來迎！ と呼ぶ人の聲は忽ちにして嵐に引き千切られてしまふ。砂を掘つて這つてゐる男もある。

刹那々々にかはりゆく山の色、山の姿、雲の海。黎明の一刹那の感激に、登山者の夜を徹して



の苦しきは酬いられる。

背丈わづかに四五寸の可憐なる芒は石を吹き飛ばす淺間の野分にもめげず山のいただきまで石ころの山の肌を柔かにつつんでゐる。

九月九日。高原の星の美しさはいふまでもない。しかも高原の星の光りの一番美しいのは眞夜中の二時から三時までの間であらうか。その前にはまだ宵の霧がのこつてゐるし、その後になる夜明け方の霧がわき初める。まつたく二時半ころの高原の星は凄いほどに美しい。わたくしはよく二時ごろ起きて落葉松の下で枯れ枝を燃やして山行きの飯を焚いた。飯を焚きながらあまりに美しい星に見とれた。

二時に起きれば四時にはたいい家を出ることが出来る。九月になれば夜が明け切つてしまふのは五時である。草鞋の足に柔かな火山灰を踏んで山に出かけるのは言ひがたいほどのうれしさである。

かけすが鳴き、みやまどりが鳴く。

栗鼠は木に飛ぶ。

峰の茶屋を通り過ぎて十丁ばかりの間、火山灰の道を挟んで老樹が立つてゐる。

そこは上、信の國境である。そこからは草ばかりで滅多に木を見ることもない。

吾妻、淺間などの牧場が右手につらなつてゐる。白根と淺間との間に標高三千幾百尺の六里ヶ原の高原が淡々として走つてゐる。

百體の石佛が飛び飛びに、大笹への道と、草津への道のしをりとして草の上三尺ばかりの高さに立つてゐる。六里ヶ原が雪に埋めらるる時百體の石佛のみが旅人のために唯一の道しるべとなるのである。

道は別去の茶屋で大笹と草津とへ岐れる。別去の茶屋は六里ヶ原にただ一軒とりのこされた天明の大噴火當時からの家である。十數頭の馬を入られるほどの土間が、大きな古い建物の半分を占めてゐる。土間の中に厩があつて、母馬と仔馬が養はれてゐた。仔馬は如にはひつて玉蜀黍を食つては叱られてゐた。家はすすけ、柱は折れ、屋根は苔につつまれてもなほ昔のままに六里ヶ原の孤獨を守るやうに草の中に立つてゐる。

わたくしは六里ヶ原を愛する。草の六里ヶ原、白雲の六里ヶ原、野葡萄の六里ヶ原、稚松の六里ヶ原、無人の六里ヶ原、たた草と白雲をのみ見る六里ヶ原、そこには大利根の一番上流の小ひさな源泉が秋草の下をくぐつて静かに流れてゐる。その水はこの上もなく甘い。わたくしは別去の茶屋から鬼の押出しといふ數里の熔岩谿をたどり、かつて聞いたこともないほどの美しい小鳥の聲を聞き、吾妻に出で、牧場の傍に沿うてふたたび淺間越えにかかるまで六七里の間ただ一人の影をも見なかつた。人の聲をも聞かなかつた。そこには熊が大好きだといふ淺間葡萄が熟して



あた。鈴蘭の葉が繁つてゐた。一疋の縞蛇が道を横切つてゐた。

わたくしは孤獨なる六里ヶ原を愛する。六里ヶ原の草の上三尺の高さに點々として旅人を見守る百體の石佛を尊く思ふ。

九月十三日。長野へかへる人を送つて沓掛の驛から歸つて來たのは夜の十一時であつた。二時半には起きていつものやうに落葉松の下で星を仰ぎながら飯を焚き、行厨を作つた。

夜の明け方沓掛の通りで十錢の銀貨を一枚拾ふ。そこいらにゐる子供にと思つたがまだ朝が早いので子供はゐない、そのままポケットに入れて上野行きの汽車に乗る。

碓氷を下り安中にて汽車を拾つ。  
中仙道の安中驛はどこかに昔を偲ばせるものがある。廢驛といつたわびしさにつつまれてゐる。途中から一人のおかみさんと道仲れになる。安中の町についていろんなことを話してくれる。或る古い大きな酒屋のやうな店について右にまがれば、そこは急に開けて川に沿うた稲田になつてゐる。

左手の丘に寺がある。

三十あまりの女が七十を越したかと思はれるほどの老婆から草履をもとめてゐる。老婆は大きな風呂敷にいつぱい自分で作つたといふ草履をつつんで背負つてゐる。

「これが四錢といふのですよ。まあ何て安いのでせう。可哀想ぢやありませんか。」といつて女は五錢白銅を老婆にわたす。老婆は一錢多いからといつてかへさうとする。

わたくしは今沓掛で拾つた十錢のことを思ひ出したので、伴れの少年にわたす。少年は老婆を追つて寺の山門の前で十錢を老婆にわたした。

老婆は耳が遠いので、何のために出し投げに十錢をめぐまれたのかわからない。さつきの女が中に立つて説明をしたのでやつとわかつたらしい。

「ありがたございませう、もつたいないことでございます。」老婆は最初に十錢の銀貨を指に挟んだ右の手を高く舉げて太陽の光りに銀貨をながめた。そして太陽を拜んで泣いた。次にS少年の前にぬかづくやうにして何かいひながら泣いた。

老婆のこのいたましい姿を見、さつきの女も泣いた。わたくしの後ろに立つてゐた妻も泣いた。川の縁に三人の男が立つてゐた。わたくしは不圖俠客安中草三郎のことを思ひ出した。

「あの家ですよ。そこに水車があるでせう。あの中で安中草三郎は稼いでゐたのですよ。」と一人の男が指さした。稲田の傍にかたまり大きな水車小舎があつた。中では五六人の若者たちが働いてゐた。そしてわたくしたちを見て黙禮した。

裕福らしい禪寺が川を一つへだてた山の中ほどに見出された。橋をわたつて七八丁歩いたところに遠くから見える丘と美しく咲いた百日紅が聳えてゐた。わ



たくしたちは百日紅の蔭で憩ふことにした。

古い堂があつて、堂の濡れ縁には八十近い老人が肩を脱いで涼んでゐた。

「これから雉子尾峠までは幾丁くらゐありませんか？」

「さあ、わしは腦を病んだので何もわかりません。」と老翁は答へる。

わたくしたちは老翁に別れて山道にかかつた。曼珠沙華が眞つ赤に咲いてゐた。

日はざらざらと焼くやうに照りつけた。

雉子尾峠では鷲が一つ芒の山を飛んで行つた。

榛名は巨人のやうに聳えてゐる。

榛名まではまだ五里、榛名では日が暮れるであらう。榛名湖の縁に沿うて榛名の高原をさらに二里歩かなければならぬ。少くともまだ七八里は行かねばならぬ。しかもわたくしたちにとつては初めての山路である。わたくしは二十萬分の一の地圖をひろげて、草の葉をむしつて丹念に地圖の曲線をたどつて見たが、どうしても山の途中で日が暮れることは間違ひない事實である。

リュクサックの中には蠟燭が三本はひつてゐる。「これだけあれば伊香保までは歩ける。それから先は野宿して草の中に寝てもいい。」わたくしはひとりで度胸をきめてしまつた。

「まあゆつくり歩くさ。暑い間は一眠りした方がいい。」わたくしは糸立を草の上にひろげて眞つ先に空を仰いで寝た。「どうでもなるやうにしかならぬ。」旅で日が暮れたり、道に迷つた

りするたんびに感じる自暴自棄と同時に何ともいへぬなつかしいあきらめがわいて来るのであつた。

このあきらめの懐しければこそ、どうしても旅の心は忘れられぬ。

九月の末であつた。この前六里ヶ原の別去の茶屋で玉蜀黍を喰べて叱られてゐた仔馬が、母馬といつしよに沓掛の町まで山を越えて来た。

「あすは上州の馬市につれて行つてこの仔馬を賣るのです。」と若い馬子はいつた。

明日賣らるることも知らず仔馬は母馬の前になり、後になりして、草原の中を六里ヶ原の方へかへつて行つた。



## 芳野紀行

四月五日六日と伊豆では寒い日がつづいた。天城には雪が降つてゐた。櫻はさかりであつたが、天城の花を見てはわたくしは芳野の花を想像してゐた。

雨が降りつづいた。時をりは嵐さへ吹いた。わたくしは宿の傘をかりては松山の蘇土道をのぼつて行つた。谿にも、松山にも、湯の町にも、草山の麓にもさかりの花が雨に煙つてゐた。

松山のなかの小屋にはひり、爐に柴をくべては終日を雨に暮らすこともあつた。草山を出た雲がやがて千切れ千切れていつかは雨の中に消えてしまつたり、不圖松の幹にからんで柔かな霧となつて流れてゆく姿を眺めてゐると飽くこともなかつた。

今年に豊年鳥が来て鶯を啄いたので花がすくなく山の人はいつてゐた。

ちやうどそのころわたくしは志摩あたりに鶯の群があつまつて来て鶯をたべたのでこの春は花

がすくなくといふ新聞記事を読んだことを思ひ出した。

日も日もわたくしは山にのぼつて行つた。一抱へも、二抱へもありさうな櫻の老木が松の間に咲きこぼれてゐるのを立ちどまつては飽かずながめることもあつた。「身を分けて見ぬ梢なく盡さばや」とうたつた西行の心も思ひ出さるる日が多かつた。

天城の谿から谿、峽から峽と静かな花は咲いても、散りかかつては眺める人もない。それほどに天城の春は閑寂である。春の雨のみが煙のごとく谿をこめてゐる。

天城の花を見るにつけて、雨が花を打つにつけて芳野を思ふ念はひたぶるに旅人の情をそそるのであつた。

雨また雨の日がつづいた。天城の花を惜しみつつ芳野への旅に立つたのは十四日の朝であつた。

柔かな麥の穂をしつとりと雨がつつんでゐた。湯の町へ通ふガタ馬車のなかには旅人の影も稀であつた。

駿河の海は荒れてゐた。用宗の海岸を走るところわたくしは窓を明けた。雨は横なぐりに叩きつけて来た。

わたくしは線路に沿うた麥畑茶畑のなかにYの姿を探した。しかしYは立つてゐなかつた。昨日伊豆から出して置いたわたくしの手紙がまだYの手にとどかなかつたのであらう。去年からそ



この海岸に佗び住まひをしてゐるYの白い寂しい顔を想像しながら、わたくしは荒れ狂ふ海の波を見つめてゐた。

大井川は雨に煙つてゐた。わたくしは雨の日の大井川を愛する。わたくしはかつて幾度か大井川のほとりを歩いた。かつてわたくしとともにそこを歩いたたれかれのことを思ひながら雨に濡れた襖をながめた。春雨降る日の廣い襖は秋よりも寂しい。

白い襖をへだてて麥があり、町があり、山がある。山も町も雨に沈んでゐる。愁然として旅人の心を打つ。

關ヶ原を過ぎるころ雨はふたたび窓を横なぐりに叩きつけて來た。日が暮れて來た。夢の中にも、をさがすやうな心持ちで嵐のなかの花を見る。

京都へ着いたころは日はすつかり暮れて雨はただ降りに降つてゐた。

いつも泊る鉄屋町の終家の隣りは大きな呉服問屋になつてゐて、幾棟かの倉が並んでゐる。夜の十時ころになるといつも數人の男たちが火を見廻はつて歩くのであるが、その聲が建仁寺あたりの托鉢僧を聯想させるおうおうと響く聲である。はげしい嵐のなかに六七人の男たちの地の底からでもわいて來るやうな聲が聞えて來るのであつた。いかに古風な火の用心である。旅疲れのうたた寝におうおうと呼ぶその聲を聴くと、いかに京の町へ來たといふ感じがわく。

わたくしは芳野への道や、汽車の時間を調べたり、鞆のなかに入れて來た山家集と芭蕉全集を

取り出しては拾ひ讀みをした。

芭蕉が芳野の花を訪ねたのは貞享五年の春であつた。

「やよひ半過る程そぞろにうき立心の花の我を道びく枝折と成りて、芳野の花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にて契り置し人の伊勢にて出むかひ、俱に旅寝のあはれを見、且はわが爲に童子と成りて道のたよりにもならんと、自ら萬菊丸と名を云、まことにわらべらしき名のささいと興あり。いでや門出のたはぶれ事せんと、笠のうちに深書す。

乾坤無住同行二人

よし野にて 櫻 見せうぞ 檜 木 笠

よし野にて 我も 見せうぞ 檜 木 笠 萬菊丸

去年秋「三河の國保美と云處」——伊良古崎のほとり——に杜國が世を忍んでわたのを訪ねたをり芭蕉は春の旅を約束したのであつた。

去年の秋から芳野行をたのしみに待つてゐた芭蕉の心をいろいろに想像しながらわたくしは枕頭の雨の音を聴いた。雨を氣にしては幾度か眼をさましては雨の音を聴いた。

雨の夜が明けた。わたくしは空を仰いで軽い溜息をさへ洩らした。



午後になつても雨は止まなかつた。わたくしは芳野行を一日のぼすことにしてあてもなく鴨川の方へ歩いて行つた。三條小橋の上から高瀬川の暗い流れをながめることにわたくしはいつも鴨外の『高瀬舟』を思ひ出す。流されてゆく若い囚人の物語を思ひ出しながら三條大橋をわたつて奥山の方へ歩いて行つた。夜櫻の名残のみが雨に濡れて、花は散つてゐた。

けさの新聞で博物館に岡山の大原氏のコレクションの一部がけふから陳列されること、ミレエの繪が一點加はつてゐることを讀んだので、西谷の方からまはつて博物館へはひつて行つた。わたくしはよい折に京都へ来たと思つた。グレコ、シャヴァンヌ、マチス、カリエール、ラフ、エリ、ベナール、レールマンなどの作品が四十點ほど並べられてあつた。雨の日のせゐか観る人もすくなく、窓からは散りのこりの花をながめつつ心ゆくまでしづかさを鑑賞を楽しむことができたのは何よりの旅の見つけものであつた。なかんづくわたくしをよるこばせだものは、ミレエの「アンビエユの断崖」といふ繪であつた。わたくしはその繪の前に立つた時、これこそほんたうの詩だと思つた。幾度か去らんとしてはふたたび立ち止まつた。断崖を掩ふて柔かな草が青々とかがやいてゐた。一筋の結土経は右より屈曲して左へ、断崖の縁を縫うて走つてゐた。徑は草に隠れてはまた草のなかを走つてゐた。断崖の根を噛む白い波頭が寂然として日の光りを浴びてゐた。そこには一片の雲翳もなかつた。鳥の影もなかつた。空と海とただ洞然として人の心を打つた。豈の柔かな草の上にただ一人の若者が腰こらんでゐた。かれはステッキを抱へてゐた。かれ

は海を見、空を見、何を思惟しつのである。何といふスキートな寂人の姿であらう。

風もなく、鳥の音もなく、ただ徑のみ断崖に沿うて悠々走る。

ミレエの繪を見て館を出ようとする時わたくしは不圖古風な草船の上に一童子の木像がかざられてゐるのに氣付いた。秀吉の一子鶴松の像である。鶴松のために作られた可憐な甲冑二領、小刀などを見るにつけてもいかに晩年の秀吉がその子のために父らしき濃かな情愛に絆されたかといふことを想像して、一層人間らしい秀吉を愛する氣にもなつた。たしかにかれはその子のためには分別を失ふほどの子煩悩であつた。鶴松の死に面して失神し、或ひは寺にこもるといふやうな殊勝なかれの心を思ひながら阿彌陀ヶ峰の麓に立つてわたくしは暮れてゆく京の町をながめてゐた。

十六日。雨は晴れた。三條大橋から電車に乗つて先づ宇治へゆく。鴨川沿ひの青柳と八重櫻がさかりである。宇治は二度目である。大地震の年の八月霧島の旅からのかへりに黄蘗の萬福寺に詣でて日が暮れたことがあつた。宇治は豊かな、清冽な水をながむるだけでも忘れられぬ地である。宇治川を挟みて南北の山の相迫るほとりになほさかりの花をのこして春光漫々として漂うてゐる。案内の男が佐々木、梶原先陣の跡だと指さした洲のあたりには二三尺にのび、葦の葉がすくすくと伸びかがやいてゐる。宇治川の土堤を下りて敏歩のところ「扇の芝」の遺跡、横改鑑



懸けの松がある。をりからの落花に平等院の物語りも殊にあはれに思ひ出される。

土堤の茶店では家ごとに草餅を響ぐ。草餅は何となく昔を思ひ出させてなつかしいものである。平等院の寶物を観、庭を見る。苔深く石寂びて春のあはれをこめてゐる。見る人もなく花は散つて宇治の茶畑を埋めてゐる。

宇治から汽車に乗つて奈良を素通りに芳野へ行くことにした。けふも木津川をわたる時、木津の土堤下の竹藪の小蔭に重衡の輪塔を見た。いつの年であつたか、法隆寺に詣じた夏、わたくしは露草のなかに重衡の墓を見出して、

### このあたり塚あり木津の螢草

とうたつたことがあつた。

若草山には行樂の人々の群が點々として草山の石のごとくながめられた。

大佛の屋根、穢澤の塔のみを茶畑の彼方にながめつつ汽車は南へ南へと大和平原を走る。

京終といふ名も旅人には面白い。大和平原の數里の麥畑茶畑をへだてて法隆寺の塔をさがさうと思つて幾度か見當をつけて見たが、春日遅々、道も小山も霞につつまれてゐた。

程よき小山、明るい草山を背景に、春風小波をたたへ乾池の水を前景にして築地に囲まれた大和の家の群が、正しい輪廓の一かたまりをなしてはつつましく相隣りしてゐる。

そこでは平原の中に點々として村が出来上り、町が出来たのではなくて、千年前の舊都の一廓が壊たれ、さらに一廓が崩されて、金殿は朽ちて畑となり、池塘となり、わづかに崩壊の禍を免れた部分のみが點々として取りのこされ、金殿を埋めた土の上に麥がかがやき、春の風が吹いてゐるといつた感じである。山につつまれて靜かに眠つてゐる大和平原全體が千年の古都の廢墟である。何といふ寂しい懐しい廢園であらう。廢園のここかしこに眞つ白な梨花を見るのもわびしい。

大和めぐりは廢墟の過路である。滅びたるものを弔ふ挽歌の旅である。氣をつけて見ればかしこの村はづれにも、かしこの一筋道にも檜笠の大和過路の姿が見える。

三輪、畝傍、なつししい名である。麥畑、水田の中の古い町、雨も降らばさらに情味深きことであらう。

畝傍驛のすぐ前に古風な旅籠がある。庭、部屋のと리카たも昔めいて落ちつきがある。井戸傍の八重櫻がさかりであつた。奥の部屋に案内され茶を喫して疲れをやすめる。眼をつむれば裏の茶畑の上で雲雀が高鳴きしてゐるのを聴く。畝傍、香久山を右と左に麥畑をへだてて見る。飛鳥川のほとり、久米寺のほとり、かしこ、ことただ霞のなか遙かに眼をやるのみ。このあたりの山はみなただの小山である。川はみな小川である。春雨の日に涓滴の音を聴きつつ旅の一日を樂しむにふさはしきところであらう。蛙の聲が悲しくも慣く聞える。



畝傍からは電車になり、道は芳野へと上り坂になつてゐる。小山また小山を縫うて走る。碧潭をなす吉野川の流れを見出して間もなく電車の終點である。花時なので自動車と俤の客を引く者が夥しい。

吉野川の長い鐵橋を渡ればやがて人家は盡き、急坂にかかる。左手に吉野川をへだてて上市のいかにも落ちついた町の姿がながめられる。

わたくしはかつてシモンズの伊太利紀行を読んだ時、一つの町を生けるものとして見たかれの見方を面白いと思つたことがあつた。ローマの町、フロレンスの町、ナポリの町それぞれの脈搏を持ち、感覺を持つてゐる。

京の町、奈良の町、三輪の町、大和の農村それぞれの呼吸と感覺とを持つてゐる。吉野川をへだてて春光を灑がれてゐる山の町上市を見おろした刹那、わたくしはシモンズの言葉を思ひ出さずにはをれなかつた。かつてわたくしは大和から伊賀に入つた日、木津川沿ひの修竹にかこまれた小ひさな村を見て尊い藝術に對するやうな感激を経験したことがあつた。去年高野へ詣でたをり紀伊見峠のあたりで河内の山村を眺めた時もほぼそれに近い感興をそそられたことがあつた。芳野から見た上市の眺めもそれであつた。

美しい靜かな自然のなかにひとりで作り上げられた小ひさな村、小さひな町は時として人間の手で作られた藝術に幾倍する尊さを持つてゐる。

吉野川の上流に青い山が聳えてゐる。伊勢の山である。幾時かの夜がしづかに美しい吉野川の流れを下つてゆく。道は山腰をめぐり川を見失ひ、川を見出す。急坂を登りつくしてはやがて深い路に沿うて緩かな道となる。櫻の老木が先づ道を掩ふまでに咲いてゐる。道は尾根を傳うて一上一下して走る。下の千本、中の千本は見頃であつた。

山の背を一筋の緒土道が走つてゐる。道を挟んで芳野の宿場があり、宿場の家々を埋めて雲のごき花が薫つてゐる。路も峰も花である。ただあまりに電車の便が發達したために、せつかくの名山も靜心をもつて花をながむるにはあまりに人の影が多過ぎるうらみがある。芳野の花こそ靜かな雨の日に眺むべきものであらう。

義臣村上義光の墓は道傍の小高い丘の上にある。このあたりからいよいよ芳野の花らしき花のながめがはじまる。「歌書よりも草書に悲し芳野山」の跡もこのあたりよりはじまるのであらう。

芳野山は花の山であり、同時に數々の人間哀史の山である。芳野といひ、高野といひむしる葉櫻のころ、青葉のころ、ほととぎすや佛法僧の啼くころを選んで靜かに訪ふべき山である。

南朝五十年の御所跡に立てば花は旅人の悲しみをこめて散りに散る。

宿に着いたのは五時過ぎであつた。出来ることなら今日のうちに奥の西行庵をたづねて、明日は如意輪寺あたりの花を見て、なるべく人のすくない間に山を下りたいと思つたので、宿に着いて休む間もなくさらに山をのぼることにした。道傍の店では裏竹を染めてこしらへた花籠を賣つ



てゐる。わたくしは子供のころあの花籠を母に買つてもらつてどんなによろこんだか知れない。東京では見かけない。子供のころのことを思ひ出す時には吃度あの花籠のことを聯想する。わたくしはその花籠を夢に見たこともあつた。一つもとめて歸りたいと思つたが、たうとうもとめないでしまつた。櫻の坊、竹林院の前を通りすぎて天王橋あたりからはさすがに昔のままの山の宿の面影が残つてゐる。道はふたたび急峻になる。宗信法印の輪塔が暗い木立のなかに冷たい苔につつまれてゐる。後醍醐帝が皇女を妻されたといふ勤王の士である。

宗信法印の墓から二三丁のぼつたところでわたくしは奥から木を卸して来る袖人たちに逢つた。丸木をそのままに車輪にした小ひさな車の上に芳野の杉材を運んで山を下つて来るのであつた。有名な芳野杉である。一間物、二間物とあるが、いづれも氣持ちのいいほどよく桎が通つてゐる。

「こんな杉で酒屋さんのあの大きな酒樽をこしらへたら千圓くらゐかかりますか。」わたくしは一人の男にたづねた。

「それや、すつと昔の話ですよ。今ではとても幾らかかるかわかりません。この木なんかこれくらゐ挽いただけで天井板一坪はとれます。ただこれだけでも二百圓や三百圓はしますからなあ。」といつて杉の木口七八分くらゐの厚さのところを指して見せた。

「高野山は見えますか。」

「この上の山から見えます。あれが金剛山、萬城……それからもうすこし左手に高野が見える筈です。」

わたくしは袖人に教へられたまま山をのぼつて行つた。幾度か立ちどまつては麓の花をながめた。谿は暮れかかつてゐた。花は霞のごとく山の背を走る道と、谿とをつつんでゐた。吉野川であらう、暮色につつまれた幾重の山のかなたに銀のごとく光つてはやがて落日とともに暮れて行つた。

そこいらにはまだ梅が咲いてゐた。櫻はまだ堅く蕾んでゐた。花屋倉は急峻な坂を擁して俯瞰する峠の足溜りである。昔は山門のやうなものでもあつたのであらうか。佐藤忠信が芳野の僧兵を防矢した場所であると傳へられてゐる。さらに二三丁行つたところに水分神社がある。古風な建築である。軒も庇も欄干も苔むしてゐる。水分神社からさらに坂を攀ちて數丁歩いたところでわたくしは若い二人づれの袖人に逢つた。

「これから奥の西行庵まで行かせうか。」

「まだ十五六丁はありますがな、それに行きついてもあつちは暗い、山の中ですから、今日は山を下つた方がいいでせう。」

わたくしは若い二人の袖人と別れた。そこいらには樓の老木が並木を作つてゐた。わたくしはしばらくそこに突つ立つてゐた。



春の夜の満月が伊勢の山に出た。落日が高野あたりの山のかたに沈んで行つた。わたくしはしばらくの間、芳野の奥の満月と聲とをただひとり靜かに味ふことができた。蕪村の「葉の花」は東に日は西に」の句を思ひ出さざるをえなかつた。

わたくしは西行庵を断念して、ひたぶるに芳野の奥の満月の姿にながめ入つた。

谿は霧につつまれてしまつた。月の光りはまだ谿の底までは届かなかつた。風の音も絶えた。わたくしは坂道の傍にしゃがんだ。その一筋の道をかつて西行が歩み、芭蕉が辿つたであらうことを考へると薄暗の中の徑も尊かつた。

どこの家も花見の客たちが夜が更けるまでさわいでゐた。わたくしは寢床についたがどうしても眠れなかつた。京都の宿を立つ時、山家集を懐にして來たが、隣りの部屋の人たちがさわぐので、とても歌一つ讀むことはできなかつた。わたくしは花のさかりに芳野を訪ねたことを後悔するやうな氣にさへなつた。湯が空いたといつて來たのでふたたび起きて湯殿にはひつたが、山は水が乏しいので、湯は膝までも來なかつた。わたくしは逃げるやうにしてかへつて來て夜具にくるまつて寢た。夜つびて兩戸を締めないので月の光りが水のごとく冷たく障子に映つて來た。夜の十一時ころであつた。わたくしは枕もとの障子が急に激しく震へて、獸の呻るやうな聲を聞いたので、障子を明けて縁側に出た。

二階の縁側から五六尺へだたつた樗の幹に栗鼠のやうな形で、猫くらゐの大きな動物が尾を立

てて呻つてゐるのであつた。

鳥でもなく、獸でもなく妙な動物である。巧みに木から木を飛び歩く。宿の男にたづねたらばんどりだといつた。その名を聞いた時、わたくしは夕方櫻の坊の横で子供たちが月の下に出て、「ばんどりだ！ばんどりだ！」と叫んで高い木に石を投げてゐたことを思ひ出した。

ばんどりのさわざでわたくしの眼はさらに冴えた。夜が更けて、月の光りが眞冬のやうに澄んで來ても人々は唄をやめなかつた。わたくしは一刻も早く夜が明けて、このさあがしい境地からのがれたいと思つた。

夜の明けのを待ちかねてわたくしは起きた。顔も洗はないで逃げるやうにして宿を出た。わたくしははじめに救はれたやうな快さを感じた。道には眞つ白な霜がおりてゐた。

「蚤虱馬の尿する枕もと」わたくしは芭蕉の句を思ひ出した。夜つびて隣りの部屋でビールを呼び、わめき、うたひ、しゃべりつづけてゐた無智な女の聲は蚤よりも虱よりも不愉快であつた。

昨日夕方歩いた坂道をふたたび花屋倉の方へのぼつて行つた。麓は霧の海につつまれてゐた。奥の千本に近く金峰神社がある。役の行者の道案内をつとめたといふ山神の木像が石礎の下に祀られてゐる。中老の宮守が一人焚火をしてゐた。

「お早うございます。」わたくしは聲をかけてその男に近づいて行つた。そのあたりからはほとんど人の影を見ることもない。



「けさはひどい霜でしたなあ。しかし花は時を知つてゐるもので、昨日まで雪がつもつてゐたと思ひましたが、花はもうほころびかけて來ましたよ。」

七八人の大峯詣りの道者たちが裏の山道を下つて來て一緒に火にあたつた。

わたくしはその人たちに別れてさらに急な坂をのぼつて行つた。小鳥の聲が聞えて來た。

大峯山への道から右に岐れて杉の木立のなかを四五丁も歩いて谿に下つたところに蒼清水がある。水は暗い木立をくぐつて五六尺の高さから落ちてゐる。水のかたはらに梅室の手に成れる芭蕉の「露とくとく」の句が刻まれてゐる。碑は苔につつまれて文字のみ黒く沈んでゐる。

何となく勿體ない心持ちもしたが蒼清水を手に掬んで激ぎ飲む。

とくとくの水からさらに南へ一丁ばかり山の腰に沿うて狭い道をゆけば、急に半段ばかりの地が展けて、周囲には樺が繁り、殊に老樺が多い。そのやや平な林間の片隅に山を負うて西行庵がある。幸うじて一人一人の膝を容るるに足るほどの草の庵である。眺むるに、佇むに、ただ涙流るるほどの尊さを覺ゆる。

ここに來て西行の「よしの山やがて出じとおもふ身を花ちりなばと人やまつらん」の歌を思へば西行の悲しい決心が眼に見えるやうで、草も清水も歎歎してゐるやうな氣がする。大尺の大男西行が芳野の奥の地に獅嘯みついて泣いてゐる悲しさが旅人の腸にこたへて來る。

悉らく芭蕉もそこに佇んで泣いたであらう。

何といふ偉大な二つの寂人の影がかつてその草の上に投げられたことであらう。

西行庵の草の屋根に達するほどの丈高い馬酔木が一本自立つて見える。その雪のやうな花が濡れ縁の端に咲きこぼれてゐた。

何時かは庵の主が旅から歸つて來るであらうを待ちわびてゐるかのやうに馬酔木の花は白く尊くさびしかつた。そこには西行が人生の寂寞をじつと見つめてゐたであらう日の餘けまが漂うてゐた。

奥の櫻は多枯れて、草の霜はまだ消えてはゐなかつた。

ふたたびとくとくの水を掬んで、わたくしは如意輪寺の方へと志して山を下つた。

金峰神社の堂守はなほ焚火をつづけてゐた。

「御増燵よう！」

わたくしたちは旅人らしい挨拶をかはして山をおりた。



## 修善寺行

まだ薄暗い間に眼がさめた。湯のなかからは田舎の客らしい男女の甲高い聲が絶えず聞えて来た。雨が降つてゐるのか、笈を傳うて流るる水が遠い鈴のやうな音を立ててゐる。

旅だ！と思つただけでも、神経のはしばしまでもくつろいだやうな氣がする。久しい間見失はれてゐたほんたうな自分の姿が見出されたやうな快さや、懐しさや、傷々しさが、甘い涙を喚びさまして来る。

池の鯉が跳ね上る音や、筒抜けた階下の湯のなかからの笑ひ聲が、靜かな雨の朝の空氣を掻きみだしてつたはつて来る。

宿の男が氣をくばりながら、そうつと雨戸を明けて行つた。どんよりとした雨の空の鈍色が障子に反射して見える。久しい間聴いたことになかつた四十雀や、鵲眼兒や、鶉や鶯の聲が、直ぐ

枕に近い樹立のなかから流れて来る。

長い廊下を湯の方に歩いて行くと、そこでは見知らぬ旅人たちがわたくしを見ては「お早う」といふ。わたくしもまた「お早う」といふ。何の不自然な感じも抱かないで。

『カラマゾフ兄弟』のなかで、父のフィヨドル・パヴロキッチがアリヨシヤに言つたことがある。「お前を愛することはできる。けれど悪漢に對しては俺も悪漢になるのだ。」と。……善人となるのも悪人となるのも大抵は周圍の境遇にある。

旅では大抵の人が善人の心に歸つてゐる。都會では生活の自然の壓迫から、經濟上の自然の要求から、人は無理にも自分を殺して、悪漢の仲間入りをしてゐる。冷酷な人間となつてゐる。それが一度旅に出ると不自然な壓迫や要求から遁れると同時に、彼等はほんたうな自分に立ちかへつてゐる。魂を害はれてゐない善人の群にはひつて行く時、わたくしたち自身も善人の心を喚び起されずには居れない。

湯から上つて欄干に立つと、霧につつまれた春の山が桂川を隔てて湯の町の屋根に迫つてゐるのが見える。修禪寺の本堂を廻つて雨に濡れた櫻が白く煙つて見える。

川鳥が桂川の瀬をなした水の上をかすめて翔んでゐる。その聲が千鳥に似て優しく、傷々しい。黒い大きな岩の上にも、屋根の上にも鶉鴒が雨にうたれながら宿つてゐる。鶉鴒の唄も寂しい。細く雨にふさはしい聲である。



東京を發つ時二冊の本を持って出たのであつたが、わたくしは何うしても本を讀む氣にはなれな。本を讀む機會は何處ででも見出さる。けれどもこのやうな落ち着いた心で、自然そのものなかに浸されてゆく機會は滅多に見出せるものではない。本を讀むために少しでも自然から眼を離すのは、惜しいやうに思はれてならぬ。

昨日この町に来る途中でもさうであつた。わたくしはバスケットのなかから本を出して見たが、一行も讀むことはできなかつた。一年中、地下室の生活見たいな生活をしてゐるわたくしには、太陽の光りの直下に照らされてゐる自然を見ることは、心の躍るほどの驚異であつた。

新しく掘りかへされた土の上にも、松林の間にはちらほら見えてゐる桃の畑にも、水車小屋の、草につつまれた草葺き屋根の上にも、白い蕪の花にも、黄色な辛子菜の花の上にも、丘阜の上にも、生れたままの自然の輝きが湛へられてゐた。「本を捨てよ」と言つたマアカス・アッレリッスやモンテーンの言葉をわたくしはそのまゝに受け容れることができた。

午後になつて雨が止んだ。小高い雑木林の小徑を歩いてゐると、木立の間から天城や、十國峠や、乙女峠がなだらかな傾斜をなして連つてゐるのが見える。修禪寺の鐘の音が、靜かな山の隅まで餘韻をつたへてゐる。麥畑をかこんだ疎林からは小鳥の聲が絶えぬ。樺林を通り抜けて水車小屋の三つばかり列んだ小川の傍に来ると一面にチウリップの咲いた花畑がある。そこから鹿嶋の墓は直ぐであるが。日が暮れかかつて來たので桂川に沿うて町の方へ歸つて行く。去年の

冬來た時、見知つた犬が、やはり同じ家の前にゐて、尾を揮つて來たが、何にもやるものを持たなかつたので頭を撫でてやつた。桂川のところまで跟いて來て、橋の上で茶畑の方へ歸つて行つた。

夜が明けきらぬ間から小鳥の聲が聞える。修禪寺の鐘が谷の底からでも湧いて來るやうな響き方をして傳はつて來る。大仁行の馬車の鈴の音が必ず朝ごとに聞える。「さよなら」「御機嫌よう」といふやうな挨拶が取り交されて馬車の人々は危ふげな橋をわたつて、桂川に沿うた野の道を下つて行く。馬車はやがて青い丘の陰にかくれてしまふ。浴衣を引つかけた、病人らしくもない、頑丈な田舎の人たちが退屈まぎらしのつもりか、橋の上に立つては、往々來るさの旅の人々を見てゐる。

嵐山と城山の間を越して下田街道に浴うて旭の瀧を見に行つた。桑畑の傍に立つてゐると、後から來た老人が、問ひもしないのに先方から聲をかけて「瀧の道なら、こつちだ。」と書つて教へてくれる。老人について麥畑のなかを七八町も歩いてゐると、下田街道から右手に遠くの空に懸つた高い瀧が見える。南晝にでもありさうな古雅な眺めである。老人は耳が遠いと見え、拵々わたくしの間に對して見當ちがひな返辭をする。

橋の花が眞つ紅に咲いた寺の廣場で老人と別れた。今日はお説教があるので、庫裏には老人た



ちが茶など煎じてゐるのが見えた。

「三十六丈の瀧で、朝五時ごろ朝陽が映るころは何とも言へない眺めだ……」といふやうな茶店の女の説明を聞いてゐたが、柔かな女瀧といつた感じの瀧である。下田街道に出ると、そこからは廣い瀧をなした狩野川が、春の水を泛べてうねりくねりして流れてゐるのが見える。李や梨の白い花の下を五六人づつ、かたまつては老媪たちが寺の方へ歩いて行くのを幾度も見かけ

狩野川に架けた釣橋を渡つて妙國寺に行くことにした。「お女郎衆」であつたと村の人から聞いた橋場の女は今日もやつれた顔をして橋場に坐つて、橋錢を取つてゐた、橋を吊した針線には襦袢だの、女の襦袢だのが乾してあつた。河下の方には、青い淵を湛へた横瀧の渡船が仄かに見える。船には二人の男が乗つてゐた。

妙國寺までは一直線に、妻畑の間の道を歩いて行かねばならなかつた。雲雀の高鳴く聲が何處からともなく聞えて來た。

家康の寵妾「お萬の方」が世を忍んでゐたと傳へられる妙國寺は、がらんとした古い寺である。本堂から庫裏へ通ふ廻廊の屋根には青い草が一面に生えてゐた。蟲蝕んだ階段を昇つて行くと、暗い須彌壇の前には、顔の蒼ざめた女が、しきりと何か念じながら、手一つぱいにかかへた袴の葉を、臺の上に落しては、裏を見せた葉と、表を見せた葉の數を算へてゐた。

庫裏の方に廻つて「お萬の方」について細かい傳説をも聴きたいと思つたが、そこには薄暗いからんとした大きな空の片隅に、ただ二人の羅僧が明るい窓口に對して坐つてゐるばかりであつた。

「お萬さまは久しい間この寺に居られたといふだけで私たちは何にも知りません。」といふ羅僧の聲を後にして、わたくしは袴の花のこぼれた門の方へ歩いて行つた。廣い水畑の隅に一人の老人が、草搔で雜草を撈つてゐるのを見出したので、わたくしは老人に「お萬の方」のことを訊ねて見た。

「お萬さまの化粧の井戸といふのが、つい近年までありました。今ではちよつと見當もつきません。あの畑の邊でした……。」

と言つて指さした藪の傍の畑には、白い蕪の花が麥の間からほの見えてゐた。

「お萬柿と言つて、お萬さまがお植ゑなされた柿樹があつて、一年に三度柿の實が果るといふ昔からの言ひ傳へでした。俺共も二度果つたのは覚えて居ります。三度目は花ばかりでしたが……」老人は草搔を動かしたまま、そのやうなことをも語つた。

振りかへつて見た時は、老人は麥のなかに隠れてゐた。富士の白い巖が妙國寺の樹立の上の青空にくつきりと曲線を描いてゐるのが見えた。

頼家の墓に詣つたのは夕方であつた。政子の寄進に成つたと傳へられてゐる經堂の前には長唄



の脚匠の家が出来て、中からは絃につれて唄の聲などが渡れてゐた。夕暮の道を埋めるばかりに花が白く散つてゐた。

五六人の田舎の男女が、あの輪塔の石をかかへ上げては何か念じてゐた。「石が軽く持ち上げれば湯が利くのだ」といふやうなことを誰が言ひ傳へたのであるか、石塔をかかへてゐる無智な顔の男女がうとましくなつて来た。

修禪寺の庫裏の横に出た。旅から歸つて来たのか、托鉢から歸つたのか、若い僧が二人縁に腰をかけたまま草鞋を解いてゐた。傍には深い笠が二つ脱ぎ捨ててあるのも、山寺の夕暮らしい感じを抱かせた。

鶯の聲が霧深い雑木林からひつきりなしに聞える。昨夜はこの町で活動寫真があつたので宿田舎客たちは夜遅く活動から歸つて来て、湯のなかで騒いでゐた。わたくしは夜半に幾度も眼をさまされた爲か、今朝は少し頭が重い。

伊東からわざわざ逢ひに来てくれたK君とS君を送つて大仁まで歩いて往つて、歩いて歸つて来た。人に逢ふことを避けて旅に出てゐながらも、人に別れては寂しさが痒々と迫つて来る。K君やS君の馬車が越えて行つた天城の連互が春らしく霞んでゐる。山には野火の煙が柔かい春の光りに溶け込むやうに上つてゐる。

蓮華草の一面に咲いた田の畦に兩脚を投げ出して下田街道に行く馬車を見てゐると、馬車の中

から聲をかけた女があつた。修禪寺に来る途中で知つた母子づれの旅人であつた。色の白い十八九の娘は今日も力のない微笑をたたへてゐた。娘の黒い瞳が今日は特に、人懐っこく見えた。

「今度は少し海岸の温泉に行つて見ようと思ひまして……」といふ母の聲を道して、馬車は桃の花の咲いた村の方へ、狩野川沿ひの道を走つて行つた。

不治の病を持つた娘を伴れて、温泉町から、温泉町へと旅をつづけてゐる母親の氣の毒な運命を考へながらわたくしは馬車の後をしばらく見送つてゐた。輝かな曠野は青い色に燃えてゐた。

二人の旅人の上に祝福あれ。

山に登ることも飽きた。全然人間界から去つて自然のなかに没され切りになることは、わたくしには出来さうにもない。

ドストイェフスキイのものを讀んでゐると、かれの世界は殆ど人間の心、男と女との心と心の愛着、離合、縫れ合ひ、絡み合ひのみに限られてゐたやうに想ふ。かれにとつては鳥の聲を聴いたり、空の色を見たりすることよりも、刹那々に動き、流れ、苦しみ、怒り、泣き、悶ゆる人間の魂の相を見出すことに無限の靈感があつたやうに想はれる。かれは餘りに人間的な人間であつた。

人間といふものから孤立してゐると、山を見ることよりも、流れを見てゐることよりも、仍り



人間といふものに近づかずには居れないといふ感じが沁々と湧いて来る。そして實際人間ほど深い微妙な神秘性をたたへた自然はないといふことが幾分推察されるやうな気がする。ドストイエフスキイほど強い人間執着の心は持ち得ないとしても、やつぱりわたくしには人間を忘れることはできない。山を越えて行つた人が懐かしい。

わたくしは湖畔に孤獨の生活を送つたソローの生活を思ふ。かれの孤獨の生活は決して嫌人主義的な生活ではなかつた。ソロー自身の生活は全く人間からかけ離れたものではなかつた。かれの簡素な山の家には三つの椅子があつた。一つは彼自身の Solitude のために、一つは Friendship のために、一つは Society のために。かれは山向うを通る馬車の轍の聲も懐しいと思つて聞いた。かれの机の上には訪問客によりてささげられた柳の環もあつた。かれはその足跡や、踏みにつられた草や、路傍に折り捨てられた稍などを見て、直ちにかれの不在中に訪ねて来た人が、男であつたか、女であつたか、また何れくらゐの年配の人であつたか、その性質さへも判断することができた。また或る時は三町ぐらゐ離れた旅人を其の香を嗅いで追つかけて行つたこともあつた。山のなかに、自然の胸に懐かれようとしたソローも、人間を忘れることはできなかつた。

ドストイエフスキイとソローを比べて見ると一人は巷のどん底の人間であり、一人は森の奥の人間であるやうに思はれるが、人間を懐しむ心に於いては共通の點を見出すことができる。人間ほど人間を避けながらも人間を懐しがつてゐるものはない。

わたくしたちは時々孤獨のための椅子が欲しい。

同時に友人のための椅子と、社会の人のための椅子を持つてゐないでは生きて居れない。

明日は東京に歸らなければならぬと思ふと、さすがに淡い旅の哀愁も湧く、大雪のなかを七八里も歩いたので、厚も立たぬほど病つたといふ隣室の男と語つてゐても、何だか旅の離愁といふやうな感じがする。

大澤だの堀切だのといふ山里に通ふ草山の峠に立つ。大城から乙女峠の連山や、狩野川の流れも見える。富士の裾野がやがて海に入つて煙つてゐる。麓から三人の女が空籠を背負つて上つて来る。

「姉さん」と聲をかけると、先方でも手拭の冠りを取つて愛想笑ひをする。顔色の良い、田舎には珍らしいすつきりした女である。

「日が暮れぬうちに歸りなされ」と言つた女たちの妻は、やがて山の懐にかくれてしまふ。裏山から修禪寺の庭に出た。廣い本堂のなかを、黒い衣の僧たちが法燈をかがけて黙したるまゝ動いてゐた。廻廊を歩む若い僧の顔が白く夕月に照らされてゐた。

石磴を下つて来ると右手、鐘樓がある。鐘樓には三人の雛僧が立つて、入り相の鐘を撞いてゐた。一つの鐘と次の鐘との間には、かなり長い間がある。鐘の餘韻がいつまでもいつまでも蜜蜂がうなるやうに響いてゐる。その長い間の間を雛僧たちは何か語つては笑つてゐる、三つばかり



鐘が撞かれてからであつた。二人の鐘僧は整の上を庫裏のなかに減えて行つた。後ではただ一人の鐘僧が重たげに撞木を動かしては、彫物かなんぞのやうにだんまり込んで鐘の下に立つてゐた。

鐘の音は山から山を越えて、やがて暗のなかに吸ひ込まれてしまつた。淡い月影の下に、今夜も遠い山の野火が帯のやうになつて燃えてゐる。

## 山で逢つた人、別れた人

旅で邂逅つた人の印象はなかなか消えないものであるが、山で逢つた人たちの印象はさらに一層深く、いつまでも刻みつけられてゐる。

榛名に登つたをりのことである。信濃の沓掛の宿を立つて安中で汽車を捨て、安中の町の中程から右に曲つて、雉子尾峠にかゝつたころは、九月初めの朝の九時ごろであつた。九月とはいへ照りつける日の光りはまだ真夏のやうに暑かつた。越土道を登つて峠に近くだどりついたころは咽喉もかすかすに潤れてゐた。そこいらは段々畑がつゞいてゐて、葡萄や梨畑が桑畑と入り混つてゐた。

わたくしたちは梨畑の片隅に小屋とでもいひたいほどの農家を見出したので、水を貰ふために庭先に近づいて行つた。品のいゝ五十歳ぐらゐの女が愛想笑ひをしながら出て来て快く冷たい水



を飲ましてくれた。

出かけようとする、女はわたくしたちを無理にとどめて、畑から梨だの葡萄だのをもぎ取つて来て、せひ喰べてくれとすゝめる。「東京のお方と聞けばなつかしいのでございます。わたくしの娘も東京へ奉公に参つてをります」といふ話であつた。その梨の味といひ、水分といひ申し分ないものであつた。わたくしたちは残りの梨をリュクサックに入れてその女と別れた。女は眼に涙を溜めながらわたくしたちを見送つて梨畑に立つてゐた。

榛名を見ることにわたくしはその梨畑の女を想ひ出す。かの女は今も健在であらうか。東京へ奉公に出てゐた娘も今は大方人の妻となり、母となつてゐることであらう。

わたくしたちは雉子尾峠を越えて、烏川に沿うた町を榛名の麓へと急いだ。烏川の盆地は焦くやうに暑かつた。

榛名の社家町にかかつたころは日も暮れはじめてゐた。榛名神社の裏の天神峠を越ゆるころは日もすつかり暮れて、月を背にして薄暗い道をたどつて行つた。

峠の茶屋はもう戸を締めてゐた。たまたま戸の隙間から燈が洩れてゐる家があつたので、その七間へはひつて行つた。峠の上は冬のやうに寒かつた。

「今夜はこゝにお泊まりですか」と云つて爐の傍に出て来た女があつた。さつき梨畑の小屋で逢つた女と同じ年ごろであつた。わたくしたちはこのまゝ伊香保まで歩いて行くつもりだと告

つたら、女は驚いてゐた。その女も非常に親切な女で、わたくしたちのために饅頭を暖くして、卵だの、茄子だのをに入れてくれた。

月はすつかり雲につままれてゐた。ものすごいほどの黒雲が榛名をつまみはじめてゐた。遠くではさかんに稲妻が光つてゐた。

茶店の女は幾度かわたくしたちに「このやうに曇つたし、夜も遅いで、そこいらにお泊まりなさい。」と、さも案じ顔に言つてくれた。そして燭をかざしては二三丁も道を案内して別れを惜しむやうにさへ思はれた。

わたくしたちは振りかへつては提灯の燭を振つて見せた。女も夜霧の中に立つては燭をかゞげて見せた。しまひにはもう女の燭も見えなくなり、湖水の面のみが時折り稲妻の光りに無氣味に映つて来た。

恐らくあの女もまだ生きて夏の間は峠の茶屋を開いてゐることであらう。

信濃の大明の宿に雨に降りこめられて逗留したことがあつた。九月の末であつたが、信濃の秋は日も日も冷たい雨にとざされてゐた。鹿島鎗も祖父岳も美しい初雪につままれてゐた。障子を明けては山を眺めてゐたが、空は雨雲に掩はれてゐた。四十歳ばかりの女中がいつも部屋の間を倒を見てくれてゐたが、何となく寂しい影につままれてゐるやうに想はれた。だんだん話を聴いて



見ると、大正十二年の大地震に神田あたりで夫と子を失ひ、女一人となつて信州へ仕事を求めて来たのだといふことであつた。慰める言葉もないやうな境涯の女であつた。

わたくしたちは宿の二階の欄干にもたれては雨に濡れた往來を眺めてゐた。

T館といふ宿の若旦那のS君は北アルプスの登山家たちにとつては最も馴染の深い青年であり、恐らく日本の登山家仲間では君の名を知らぬ人はないであらう。

わたくしはそのS君から次のやうな話を聞いた。この話は今から二十年も前誰かゞ文藝倶楽部か新小説あたりで小説に作つて載せたこともあるさうだから、記憶してゐる人もあるであらう。T館の二階から鹿島鎗や祖父岳を背景とした古風な落ち着きを持つた大町を眺めてゐると、柿葺の屋根の上に一つ一つ煙出しが附いてゐるのが目立つて見える。冬の間深い雪にとざされるので、その雪の上へ煙出しを突き出して置かなければならぬ。何處の家にも必ずこの煙出しが屋根の上に突き出されてゐる。

宿の若旦那S君は秋の雨に濡れた煙出しを見ながら雪の夜の話を語るのであつた。

S君の友人が町の藝者と深い仲になり、家を飛び出してしまつた。大町の家には母親と妹が夜も目を案じ暮らしてゐた。或る雪の日S君は友人から何かのたよりでも来てゐないかと思つて藝者家を訪ねて見た。日が暮れてゐた。格子を明けて中にはひるとS君は自分の目を疑はずには置れないやうな場面を見た。それは友人と駆け落ちした筈の藝者が薄暗の中に、長火鉢の前に坐つ

てゐるのであつた。驚いて聲をかけて見ると、それは當人でなくて妹藝者の方であつた。

同じ日の真夜中のことであつたらう。友人の家では友人の母親と妹が寝もやらず友の身の上を案じて爐の傍に坐つてゐた。静かな雪の夜であつた。

午前一時か二時のころ、母親も妹も俄かにもすごい物音に顔へ上つた。それは屋根の上の煙出しのあたりをかすめて疾風のごとく過ぎて行つた。たしかに汽車の走る音であつた。

まだそのころは大町あたりには汽車も電車もないころなので汽車の走る音などが聞える筈はない。それなのにたしかに煙出しのあたりを、すさまじい音を立て、汽車が走つて行つた。

数日後にわかつたことであつたが、大町の母親と妹とが煙出しのあたりに汽車の音を聴いたその夜、その時間のころ、友人と藝者は明石か舞子の濱附近で汽車に飛び込んで心中を遂げたのであつた。

鹿島鎗をかすめて雲は静かに徂徠してゐることであらう。高瀬川の廣い磯には水楊の柔かた葉蔭が投げられてゐることであらう。わたくしは信濃の山を思ふことにT館の二階から雨に煙る大町を眺めつゝ聴いたS君の話を懐ひ出す。

東京から来てゐた不幸な女は、わたくしがその翌年ふたゝび大町を訪ねたをりはもうそこにはゐなかつた。



神聖そのものゝやうな山にも時としては人間の小さな智慧が働いてユウモラスな悲喜劇が生まれることもある。これも大町の茂市といふ山案内の男から聞いた話であり、たいていの人は知つてゐることだと思ふ。

或る男が自分の情婦か何かを亡者に扮装して、親しい人を失つて悲歎にかきくれてゐる人たちから金を捲き上げたといふ話である。雪溪や高山植物の花につままれた高い山の上の詐欺事件であるだけに芝居じみてゐる。その幾多の被害者の一人に、大工か何かの職人があつた。

その職人は亡くなつた妻に逢はれるといふので嶮岨な道を北アルプスの立山まで登つて行つた。そしてたしかに雲霧のかなたに亡くなつた妻の姿を見た。この男がそのまゝ妻の姿を拜んでゐたら、山上の美しい物語で終つたであらうが、かれはあまりの戀ひしさに妻の亡霊を追つかけて行つた。捕へて見ると亡霊でなくて、普通の女であつた。事件は詐欺に終つた。罪な悪戯であり、憎むべき行爲であるにちがひないが、何處かに大まかなユウモアがある。山の上では人間の罪惡までが美化され、醇化される。

山に登る毎に茂市が話してゐた。

「登り口が険しい山は巔に近づくに登り易くなる。登り口が緩やかな山は巔に近づくと急峻になる」と。

「それから今までつゞき見たこともないところに良い道を見出すことがある。そんな時は氣を付けなければならぬ。それは獣の通つた道だ。人間の通つた道よりも、獣の通つた道の方が却つてほんたうの道のやうに見える。」

殺生小屋に泊まつたのは九月二十一日のことであつた。

すでに小屋が閉鎖されてゐるといふことだつたので、上高地の宿からは木炭や夜具、米までも山案内の男に擔がせて行つた。

あまり月がよかつたので小屋の外に出て見たが、ひどく寒くて五分と戸外には立つてをれなかつた。

小屋にはわたくしと妻と案内の男二人の外には三人の若い登山家たちが泊まり合はせた。この人たちは燕の方からやつて来て、殺生小屋で一緒になつた。米を出し合はせて一つの釜で炊いて喰べたが、その夜は神秘的な落石の聲にいつまでも眠れなかつた。夜が明けると鎗にも徳高にも雪が降つてゐた。雷鳥が鳴いてゐた。

朝の食事をすますと、三人の若い登山家たちは肩の小屋の方へ、わたくしたちはふたゝび上高地の方へ下ることにした。たゞ一夜だけの泊まり合はせであつたが、時々思ひ出す。

その翌日わたくしたちは上高地から徳本峠を越えて島々に出た。たまたま五千尺に泊まり合は



せてゐたN氏がわたくしたちを送つて峠まで道伴れになつた。溪から溪へ駒鳥が啼き、紅葉は燃えてゐた。芭蕉の「送られつ送りつはては木曾の秋」を思ひながら、わたくしたちは峠で東西に別れた。

山で逢ひ、山で別れた人たちのことは、かりそめのことに忘れがたいものである。

### アカシヤの花

三月の末に東京を立つて伊豆から京都、吉野をめぐる。四月の末にちよつと東京に立ちかへつて来た。そんな風で今年の春は東京の花は一つも見なかつた。旅の疲れをやすめる暇もなく五月の半ばからふたゝび京阪地方を歩いて東京にかへつたばかりで今度は信濃に出かけて行つた。

五月廿四日 杵掛に下りて落葉松のなかの星野温泉に一泊。山櫻がさかりで、八重はまだ蕾である。浅間には雪が残つてゐる。

宿では炬燵に火を入れてくれた。

炬燵はきらひであるが、八ヶ嶽の雪を見ながら炬燵の馳走にあづかる。

落葉松の芽生えは美しいとは聽いてゐたが、いかにも柔かな女性的な感じである。色は翡翠に似て翡翠よりは温ひがある。



郭公が鳴きつれてゐる。

石南花はまだ早い。

六里ヶ原に行つて見たいと思つたが、石南花はまだ雪の下にあるといふことを聞いたので止めた。

去年の夏六里ヶ原に行つたころは可愛い仔馬が別荘の茶屋に生まれてゐたが大方どこかに賣られて行つたであらう。

五月三十日 越後から加賀、越前をめぐりてふたゞび信濃を経て東京へかへる。妙高も、日本アルプスもまだ眞白な雪につままれてゐる。

白樺の若葉と、その柔かな眞白な幹は春の旅人にとりなつかしいものである。

加賀の日本海の砂丘で見たアカシヤの眞白な花、關や碓氷峠で見たアカシヤの花は忘れがたきものである。奈良の馬酔木の花に似てさらにやさしき花である。さらにわびしき花である。

秋の碓氷の紅葉にもまして、初夏の碓氷の新緑はなつかしいものである。

山藤の花も到るところの新緑の山に見出した。

たゞアカシヤのやさしき、わびしき姿のみが旅人の心にふかく刻みつけられてゐる。

## 朝の海

瀬戸内海を通ふ汽船であらう。高松の港の方から二、三度つゞけさまにひゞいて來る汽笛の音を聞いた。わたくしは不圖眼を開いて見た。窓のカアテンの間から星がまたゞいてゐるのを見た。うとうとと見はてぬ夢を追ふやうにふたたびわたしは眠つてしまつた。

松風の音であらう。遠い時雨を想はせるほどにかすかな夜明の風が屋島の浦々から嶺へ嶺へと吹きあげて來るらしい。時としては、さゝやかなる浦波のごとく、時としては遠ざかり行く沖の大波のごとく窓近く訪れては、はたと跡絶えてしまふ。

じつと眼をつむつて松風の音を聴いてゐると、昨日屋島寺の薄暗い御堂の中で觀た重盛の籠や、景清の念持佛の尊い御像、何彼とうかんで來るのであつた。潮にぬれた鎧に美しく描き出された秋草のさながらに色もあせず見出さるゝのも昔を思ふてあはれであつた。昨日屋島寺を出る



時暮れゆく鐘樓の下に立つて見送つてくれた美僧の姿までが遠い昔の人のやうにも思はれた。わたくしは窓のカアテンを明けた。高松の町は霧につままれてゐた。夜の色はなほ高松の町をめぐる裾山になゆたうてゐた。高松城の矢倉が渚に沿うて夜明け方の微かな白い光りをたゞよはせてゐた。燈臺の火もまたゝいてゐた。

山駕籠に心地よく揺られながら松林の間を走る。枯れ枯れな冬草の間に野菊の可憐な姿を見出す。

一本々々磨きあげられたやうな屋島の赤松の間を大槌、小槌、豊島、女木、男木の鳥影が走る。

「崇徳天皇さまの白峰陵といふのはあすこいらの山になりますがまだ霧がかかつてをりますので……」と駕籠の男たちは高松の右手の山を指さした。

北嶺に達したところ小鳥が鳴きはじめた。

小豆島を中心に瀬戸内海の無数の島々が波の上に浮かぶ。海は煙つてゐる。海は溶けて朝霧に消えてゆく。とりのこされた燈臺の燭が薄暗い鳥蔭にまたゝいてゐる。長い航海を終へてかへり行く汽船であらう、朝の海をすべつて走る。待つ妻、待つ子をあとがれつゝ甲板に立つ人々もあるであらう。たのしき戀人を胸に描きつゝ船橋に立つ若者もあるであらう。夜明け方の海はなごやかに幸福なる汽船を東へ東へと見送る。相迎へ相去る。一つ一つの小島に朝の祝福を投げつゝ船

は行く。

船は思ひ思ひの旅人の心を載せて朝の海をすべつては島影を縫ふ。海は明け方の空を映して五月の山よりも青く、空よりも廣く。

三十年の昔である。わたくしははじめて故郷を立つて下關から汽船に乗つて瀬戸内海を大阪に行つたことがあつた。少年にとつては遠い頼りない旅であつた。三等船室の暗い底で釜山から来た妓生といふものをはじめて見た。一言三言朝鮮の言葉を教へられたことを今も記憶してゐる。

雪白の腰衣、美しい異國の女の印象は久しく少年の頭に夢のごとく刻みつけられてゐた。

朝の静かな海をすべつて汽船は走る。赤松の小島、白砂のなぎさ。一つ一つの小島に朝の祝福を投げつゝ汽船は走る。

そこには三十年の前わたくし自身が朝の海を眺めつゝ甲板に立つてゐるであらう。或はわたくしと同じやうな境涯の少年がけさも海をながめつゝあるであらう。

静かな朝の海よ。鳩のごとく臆病な少年の美しい夢を、お前のその空よりも青い水の面に映せ。

朝の海をすべつて船は行く。故郷の母の懷を離れてはじめて遠い旅に出た少年は朝霧につつまれた瀬戸内海の或る小ひさな港に船が着いた時、棧橋の上にしやがんで三味線を抱へてゐた狂女を見た。少年はその狂女の横顔に、別れて来た故郷の母のおもかげを思ひ出した。少年は朝の海の面をながめながらそつと手の甲で涙をふいた。



その朝の海の潮の香が、その朝の狂女の歌が、その朝の波止場の人々のどよめきが、今わたくしの胸によみがへる。

桃の花が咲いてゐた。母は桃の花の下に立つてゐた。瀬戸内海は桃の花のさかりであつた。船が島から島へと岸を縫うて走ることになつた。桃の花を見ては故郷の母の寂しい姿を思つた。

静かな朝の海よ。今日も朝の海を走る船の甲板に立つて故郷を思ひつゝ島影をながめてゐる少年があるであらう。朝の海よ、お前のその静かな懐にわたくしは鳩のやうに臆病な少年の心を思ひ出す。

朝の海よ。わたくしは信ずる。お前の懐をすべる船といふ船は人類へのよろこびと幸福のみを積みつゝ港へ急ぎつゝあることを。

朝の海よ。お前の懐をすべつて黄金が、香料が、紅寶石が港より港へともたらさるゝであらう。

朝の海よ。だがお前の懐をすべつてさらにさらに尊い船荷が港から港へともたらさるゝであらう。静かに耳をすませ。潮の香がその銀翼の帆をつゝんでしまつた。朝の微風がよろこびをさゝやきつゝ走る。

遠い海のかなたより海のかなたへのおとづれ！ 若い夫より若い妻へのなつかしいおとづれ！ 母より子へのやさしいおとづれ！ 子より母へのうれしいおとづれ。

朝の海よ。海はまだ眠つてゐる。霧の中の島影にはまだ夜の薄暗がとりのこされてゐる。ベッ

下に眠る船客たちはお前の懐に静かな夢を結んでゐるであらう。朝の海よ。かれ等の航海と夜明け方のやすらかな睡眠を祝福せよ。

かれ等が一度地上に足を踏みいるゝ刹那、人間界の苦惱と憂鬱がかれ等の魂を暗くするであらう。朝の海よ。お前の静かな懐に眠つてゐる間だけ、かれ等は人間界の一切の苦惱からも憂鬱からも救はれてゐるのだ。

朝の海よ。波を立てゝはならぬ。かれ等の夢のベッドを揺つてはならぬ。

朝の海よ。わたしは人生の光明と希望のみをお前の懐に感ずる。だが、白髪の老母は朝の海を眺めながら立つてゐる。遠い水平線をかすめて白い鳥が飛ぶ。黒い翅をひろげ、長い單調な航海に疲れた汽船が近づいて来る。

白髪の老母は甲板の上をどり上つて子を呼ぶであらう。かの女は旅疲れのわが子を待つてゐた。しかし朝の海よ。お前は白髪の老母の前を通り過ぎた眞黒な幻影を見た。

朝の海よ。お前はたゞ一人波止場のいしたゝみに泣き伏して静かに祈る白髪の老母を見た。

朝の海よ。お前は静かにたゞよひ来る讚美歌を聴く。眞黒な幻影を抱きつゝ白髪の老母は街を歩む。

朝の海よ。お前は人間のよろこび、人間の悲しみ、すべてをお前の懐に抱く。だがお前は人間の悲しみ、よろこび、哲學、智慧一切を超越したる存在だ。お前の懐に抱かるゝ時人間のよろこ



びも悲しみも浄化せらるゝ。

朝の海よ。お前の懐に抱かるゝ時わたくしたちは嬰兒のごとくうたひ、嬰兒のごとく笑ひ、嬰兒のごとく泣く。

朝の海よ。天地創造ながらの朝の海よ。波はわく。雲はわく。爛々として太陽はをどる。人生のよろこびよ、いのちよ、朝の海のごとく聖なれ。

人生のかなしみよ。朝の海のごとく聖なれ。

朝の海よ。生くることのよろこびをさゝぐ。

「阿波の鳴戸がこの見當でせう。これが須磨明石……このあたりに雪につゝまれた大山が見えるはずですが……」わたくしは振りかへつて見た。そこにも見知らぬ二人づれの旅人は朝の海を越えて中国あたりの山をながめてゐた。

わたくしたちは屋島の嶺を下つて海に出た。

「この岬の蔭が船隠といつて平家が兵船を隠して置いたところださうです。梶原が攻め寄せて来たのはこゝなんです。」

「那須興市の扇的があの岸のところですよ。」  
やゝ波が高くなつて来た。

わたくしは昨日、日の暮るゝころ佐藤嗣信の墓に詣でたことを思ひ出した。朝霧の中に洲崎寺、嗣信の墓のあたり、或ひは惣門の跡をながめながら船は壇の浦を沿へ近く走る。波は立ちに立つて旅人の心を揺らす。

「住みなれし都の方はよそながら袖に波越す磯の松島」新中納言知盛の歌を想ひ出す。わたくしは昨日日暮れてつひに菊王丸の墓を訪ねなかつたことを残り惜しく思つてゐた。

けふは波さへなければ瀬戸内海を横切つて、鞆津に出で、京都へかへるつもりであつたが、波が高いため船をやることはできない。自然船を屋島の岸につないでふたゝび壇の浦邊を訪ねることになつた。菊王丸の墓に詣づることのできたのも何かの宿縁であらう。鹽を焼く小屋のあたりを回り、やがて濱に沿ふて走つて来る村の童たちに菊王丸の墓を訊ねた。

「菊王丸さんの墓なら知つてる。童たちは先に立つて枯れ草の中を七、八丁も飛んで行つた。ほこりの多い道から二三間はなれたばかりのところ、蔭深い木立の下に石を積みあげた塚がある。その塚のうしろにこけむしたさゝやかな塔婆がある。菊王丸の墓である。」

「生年十八歳とぞ聞えし。能登殿この童を討たせて、餘りに哀れに思はれければその後軍をもし給はず云々」荒れ果てたる路傍の塚の前にたゞすんでゐると平家物語の記事をさながらに淨かんで来る。萌黄にほひの腹巻を着、草ずりのはづれを射貫かれて船中に運ばれてゐるけなげな若武者の姿が映つて来る。



案内してくれた藩の子供たちは、菊丸の墓をおぼふやうにして繁つてゐるまゆみの眞つ紅な實をもぎとつては「ちうちうたこかいな」と無心に算へてゐた。

静かな朝の潮をへだて、源平の若武者たちの墓は霧につままれて眠つてゐた。海はかすかなる松風の音を旅人の耳に残してかどやきはじめた。鳴きつれてゆく千鳥の跡をじつと見送つてゐれば旅人の心はさすがに沈む。

「大けな汽船ぢや！」菊丸の墓のまゆみの實を弄んでゐた子供たちは濱に立つて叫ぶ。瀬戸内海を西航する汽船が沖の小島をかすめてゆく。

朝の海よ、お前の懐をすべつて母より子へのなつかしい消息！ 子より母へのうれしい消息！が！ 若き夫より若き妻への！

### 草鞋脚絆の旅

一三日前から裏の竹山で鶯が鳴きはじめた。いよいよ春が来たと思つただけでも旅に出たくなる。

それにつけてもこの頃は何事も餘り便利になり過ぎたために、却つて旅といふものゝ感じなり、味なりが稀薄になつてしまつた。

三十餘年前の旅であれば、何としても脚絆、草鞋といふやうなものが必ず第一の付き物であつた。

いよいよ旅に出るとなれば先づ脚絆、足袋を取り出しては脚絆の絆を附け直したり、草鞋の具合も調べて見るし、また草鞋の緒に布を巻いて見るやうなこともした。

そのころはまだ田舎には電燈はなく、みんなランプであつたが、薄暗いランプの下で、草鞋を



穿いて見たりするものも何となく、気が引きしまるやうで子供心にもうれいものであつた。

朝は無論眞つ暗な中に起き、星を見ながら冷たい水で顔を洗つて食事をすまし、行厨を風呂敷に包んで、さて草鞋の紐を結んで家を出る。朝立の気分といふものはまた格別であつた。夏などは日中は暑いので眞夜中ごろに立つて、夜が明けるまでには四里、五里歩いてゐるといふこともした。一里二里と歩いてゐる間に一番鶏の聲が聞えて来た。

わたくしは子供ころは田舎ではなかなか時計などといふ物を持つてゐる家は稀で、たいていは鶏の聲で起きた。一番鶏、一番鶏といふやうな鶏の聲は今でもはつきり耳に残つてゐる。月に照らされた狭霧の中から遠い鶏の聲が聞えて来るのを、道をたどりつゝ聴くのは、また朝立ちの旅のあはれでもあつた。

わたくしはまだ何事も不便な時代に生まれて、不便な旅を経験したことはまことに幸福であつたと思ふ。

馬車とともなく、たゞ歩くより他に方法はなく、餘程贅澤な人であれば俵も乗つたであらうが、わたくしは俵に乗つて見ようなどとは想像したこともなかつた。そのころの俵は鐵輪で、走るにつれて心棒に引つけかけられた鐵の輪が音を立てる仕掛になつてゐた。

一日の行程は十里から十二三里のところであつたが、わたくしは足が達者だったので十五里くらゐは歩いた。わたくしの父のごときは非常に足達者で、昔のことであるから大小の刀を帯した

まま長崎から佐賀、さらに背振ちかくの山村までを一日に歩いたといふことであつた。三十里餘りの道程であり、今日の人にはちよつと想像もつかないことであらう。

父はよく「その折、わしの道伴れになつてくれと頼んだ上方の商人があつたが、これは千兩箱を一つ肩から負うて、平氣な顔をしてわしと一揃に歩いてゐた。恐ろしい足の早い男であつた。」と語つてゐた。

\*

草鞋といへば、道に沿うて何處でも草鞋を賣つてゐたが、道には穿き捨てられた草鞋が到るところに落ちてゐた。旅馴れた商人たちの中には片方の草鞋が切れてしまへば、良い方の草鞋は捨てないで切れた方の草鞋の代りは、道ばたに捨て、ある草鞋を拾うて間に合はせる者があるといふ話を聞いた。

歩くといふことは疲れることにちがひないが、馬車もなく、自動車もない國道を歩一歩たどつて行くことは、いかにも呑氣なものであつた。

わたくしは數日前埼玉縣の忍町で一併入に逢つたが、その人から明治二十五年に箱根を越えて京都まで東海道を二十日かゝつて歩いたをりの物語を聞いた。一泊十五錢くらゐの泊りを重ねて行つた時代の旅がうらやましくもある。

旅館といふ感じの宿がすくなくなり、旅館、ホテルといふやうな感じのものになつてしまつた



の時勢とはいへ、ちよつと寂しい氣もする。

あのころの旅にはまだ矢立が付き物であつた。わたくしたちのころはそれに蝙蝠傘といふものも旅の付き物の一つであつた。笠、糸立といふやうなものは、つひこのころまでの山登りにさへ付き物であつたことを考へると、旅の變遷といふものゝ速かなことに驚かされる。

四十年前のことであらうか。東京から箱根を越えて北伊豆の温泉場に行くに、三島あたりで汽車を下りて、それからさらに山路をたどるに暗い木の下をくゞるたんびに山蛭が落ちて來るので笠を冠り、蝙蝠傘をさして行つたなどといふ老人の話聞いたことがあるが、これとても今日では想像もつかぬ。

温泉場の食ひものといつては日も日も鶏卵と鮪のみであつたといふことである。

東京近くの温泉場でも三十年ばかりの間にはすゐぶん變つた。

大正一二年ごろであつた。國府津で汽車を下り、早川口から輕便鐵道に乗つたころは雪が降つてゐたが、門川に着いたころは夜になつて雪も二寸くらゐ積もつてゐた。

眞鶴あたりで、雪のたそがれを山駕籠に揺られて行く花嫁などを見たことを記憶してゐる。

門川には何でも海のすぐ傍にたゞ一軒の小ひさな宿屋があつて、それに泊まつた。湯河原行き

の馬車が、月の光りを浴びて雪の道を走つて行くのを宿の二階から眺めてゐた。馬車の鈴の音が妙に旅らしい心細さを感じさせた。

このごろ、あのあたりを汽車から眺めて見ても、何處にその旅籠屋があつたのか見當もつかなくなつてしまつた。

\*

交通が便利になると土地の人氣も悪くなるし、その土地の特色も失はれるし、何れにしても旅をする者にとつてはあまり便利になるのは考へものである。



## 松島紀行

夜が明けかかつてゐた。

汽車はちやうど阿武隈川の鐵橋をわたつてゐた。川上の山は白い雪につつまれてゐた。明けきらぬ夜明けの空には月が残つてゐるのを夢見心地にながめた。

草は枯れに枯れて地は黒く、人影一つ見えぬ曠の道のあたりにはまだ薄暗がとりのこされてゐた。

仙臺の町はわたくしにとりては三度目の旅である。一度は平泉を訪ねたをり、一度は北海道へ旅したをり、それも夜泊まつて朝早く立つたので、わたくしはまだ一度も仙臺の町を知らなかつた。今度は二日だけ仙臺を中心にして田舎の方まで廻らねばならぬやうな用事があつたので、仙臺といふ町の旅の印象だけは刻みつけられたやうな気がする。仙臺の町を北に出はづれて小笹の

つつまれた丘と丘との間を縫ふ道をたどるほどに昔の刑場の跡といふのがある。老松の下には道を挟んで二基の地藏尊がある。幼年のころ原田甲斐が單身でこの刑場まで出かけて行つて獄門首の口中に扇を突き込んで歸つて来たといふ物語りの場所である。

廣瀬川の名は樗牛の物を讀んだころから記憶してゐた。冬涸れの水は淺く、川床の砂は白く漂うてゐるが、水はいかにも澄んでゐる。岸の雑木林には雪が残つてゐる。柱のやうなつららが幾條となく崖に沿うて垂れてゐるのもさすがに雪國らしい感じをわかさせる。

三瀨園といふ山上の旅館から眺めた仙臺の町は、遠く海を控へた森の都である。丘から丘、森から森、その間を廣瀬川が縫つてゐる。南國に生まれたわたくしにとつては雪の國の冬はむびし過ぎる。草も木も丘も枯れ過ぎてゐる。空の色までが死よりも深い灰色につつまれてゐる。雲低く海を掩うて仙臺の町は暮れんとしてゐる。

顧みれば國境の山はすでに暮れて雪のみはるかに白い。

日暮れて、見知らぬ旅の町を歩むのはまた旅のあはれでもあり、旅の面白さでもある。見知らぬ旅の町の燭ともしころほど、しみじみと旅の心を思はせるものはない。

\*  
「今年はめづらしく雪がすくなくてあたたかです」と宿の女たちはいふ。しかしさすがに朝は寒い。意地悪い寒さである。庭の木の葉までが雪にまびえてゐるやうな色である。遠い山の雪を



たがめながら、朝の食卓のあたたかな味噌汁をすする。仙臺味噌の味は何となしに子供時代の旅といふものを思ひ出させる。底に深くかすかな香氣と滋味をつつんでゐるやうな味である。このごろの東京ではほんたうな仙臺味噌の味をたのしむことができない。朝はやく旅の先々を急ぎながらすする一椀の味噌汁の味は三十年前も今もかはりはない。旅の頼りなさ、心細さ、そして不思議な誘惑は朝の一椀の味噌汁に漂ふ。

仙臺驛から鹽釜行き電車に乗る。

天神の社、つつじが岡の名はすでに『奥の細道』で記憶してゐたので、何となくなつかしい。松の木の間には櫻の老樹がある。宮城野の原を見わたす絶好の地であらう。芭蕉が奥の細道を分けて旅をつづけたころはこのあたり一面に萩の原であつたらしい。

畫工加右衛門といふ男はなかなかの風流人であつたらしく、鹽釜、松島の案内圖を書いて芭蕉にあたへた他、紺の染緒の草鞋を贈つてゐる。名取川をわたつて芭蕉が仙臺に入つたのはあやめ暮く日であつたといへば、つつじが岡あたりは青葉嫩葉にかがやいてゐたことであらう。

限りもなく広い仙臺平野を貫いてかすかな道が流れてゐる。眼をつむれば寂然たる古人の旅姿が泛かんで来る。

多賀城の趾は左の方一里ばかりの丘の上にある。ただそれと指さるままにながめて過ぎる。

末の松山も亦小ひさな驛の南三四町のところにある。老松數株、わづかに末の松山の名をとどめ

てゐる。

鹽釜の町をつつむ丘には墓地が目立つて見える。雪ふかく花といふものがないためであらう。丘といふ丘の墓には美しい造花がかざられてゐる。奇觀である。

鹽釜神社はちよつと奈良の春日神社のほつりを聯想させる。杉古りて石礎の苔ふかく、老梢の間に海をながむる景色はなかなかいい。この鳩の色のかがやかに清げに見ゆるのは海につつまれた山氣の澄めるせみであらう。

\*

鹽釜の埠頭には松島遊覽のモーター・ボートが集まつてゐる。たまたま病人を載せた和船がわたくしたちのボートのすぐ傍から離れるところであつた。恐らく附近の海岸か島あたりの若者であらう。その枕邊には妻らしい若い女がうればしげな面持ちでしやがんでゐた。二人の若者と一人の老人が船を漕いでやがて岸をはなれた。

鹽釜の築港を出外れたあたりでわたくしは眞山少年の美談を聞いた。仙臺中學の學生四名がボートを漕いで、そのあたりで荒波にくつがへされやうとした時、眞山少年はボートの荷を軽くするため海に投じて三人の級友を救つたといふことである。

眞山少年の物語りを聞いてゐる間に船は松島群島の間を横切つてゐた。

遠い山にも島にも雪がまばらに消えのこつてゐる。雪の日の松島は殊にいいといふことである。



すずかもといふ水禽が幾千となく群をなして島をかすめて飛んでゐる。大きさは普通の鴨とほぼ同じものである。翅の付け根が白くなつて飛び立つことにその白い部分が眼立つて美しく見える。

案内者は島の來ること一つ一つの島の名を教へてくれるが、送迎に遠なきほどの島の數々、なかなか覚えられないものではない。

島といふよりは孤嶽と名づくべきほどの小島にもかならず美しい木振り枝振りの老松稚松を見出す。まことに松島の名に背かぬ。

粗朶を樹てたる形に竹を連らねて魚を追ひこんでゐる漁夫たちがある。あたりにはすずかもが波のまにまに浮かんでゐる。飛んでゐる。半島の雪が繪のやうな遠景を描いてゐる。

連れのK君は炬燵を擁してビールを傾けてゐる。炬燵を擁して海をながめ、赤松をながむる舟行、さすがに北の國の旅である。

小波、小波に重なり、島は島に重なる。

遠き島は波に煙り、近き島は雪まばらに、水禽の聲を聴く。

松島の最もすぐれたるながめは恐らくその潮に臨む赤松の姿態の美しさ、幽玄さにあらう。その一つ一つの島々に蟠居してゐる端麗な赤松は荒海のしぶきにさらされたる老松といふ感じをあたへない。むしろ京都あたりの古刹の苔むした名園に亭々たる古松を聯想せしむる。時雨を待つ

北山の松を想はせる。

その一つ一つの島が、その一つ一つの島の世界を持ち、味を持ち、風趣を誇示してゐる。二十年前も前までは隅田川あたりでも、鰻を扱いてゐるのをよく見たことがあるが松島に來て松の下蔭に鰻搔く男を見ようとは夢にも想はなかつた。

五大堂は岩の丘の老松にとりかこまれてゐる。古びたる五大堂一つのために松島の詩趣は幾倍の美酒を盛りたる心地がする。このあたり古人の草鞋の跡を思へば一步々踏む土もいただきたき思ひ。

瑞巖寺は老杉の奥にある。左右の岩を擁り幾百體の石佛をあがめてゐるのも珍らしき旅の印象の一つである。

政宗が朝鮮から持ち歸つたといふ紅白二株の老梅も今なほ臥龍の姿を見せてゐる。雪國の二月は春淺く梅もまだ雪に埋れてゐる。

支倉六右衛門が將來したギヤマンの燭臺を寺の薄暗い廊下に見出した時、暫く佇立、追憶の情に囚へられないわけにはゆかなかつた。かつて新しく、かつてゆたかなる異國的な驚異であつたものの、古寺の暗に葬られてゐるのを見ればはいかにも佗びしいことである。

寺を出てふたたび雪の中を驛の方にとどろ。

遠い山も山も雪である。松の下蔭は残りの雪にうすら寒い。



縹渺たる水をかすめてすすかかもが飛んでゐる。

松島は雪まばらなり鴨のこゑ

### 光悦寺まで

洛北大原の里に寂光院をたづねた翌日の午後、鷹ヶ峰に光悦寺を訪づれた。

その日は京の時代祭といふので朝のうちから京都の町中が何となく落着かぬけはいであつた。朝、夜明けたばかりに起きて冷たい霜を踏んで三條の大橋をわたり、智恩院の木魚の音を聴いて大津行き of 電車道にさしかかつたころは、甲冑に身をかため馬の口を取らせて悠々と橋板を鳴らす騎馬武者などに出逢うた。

秋の日はしづかに京の町を照らしはじめた。秋の行樂にはこの上もない好天氣である。

野の天神から金閣寺にまはり、三抱へも四抱へもありさうに思はれる金閣寺の玄關の前の水松の下では思はず足を惹きつけられてしまった。

テニソンのイム・メモリアムの中の句を思ひ出したのであつた。



老いたる水松は春が来てもいつも憂鬱な顔をしてゐる。そして網の目に張られたその廣い深い根は幾多の人々の亡き骸を包んでゐる。それはテニソンの無二の友アーサー・ハラムを葬つた寺の庭の水松を形容したものであつた。水松の木蔭がらはいつもの悲しい鐘の音が聞えてゐた。

わたくしはいつも水松を見るたんびにテニソンが描いたお寺の庭の憂鬱な樹を聯想した。

しかし金閣寺の玄關の前のあの亭々として何のわだかまりもなく伸びて、そして思ふ存分東西南北に素直に枝をひろげてゐる老水松を見てゐると、どうしても憂鬱な顔を聯想することはできない。明るくて、靜かで、それかといつて軽くもなく、どつしりした落ちつきを持つた空氣にうつまれてゐる金閣寺の老水松は、いつも柔かな影を白い砂の上に投げてゐる。

そこにはどこまでも足利時代の寂びが漂うてゐる。平家の天下は華やかであり、豪快でもあつたが、まだ何をいつても成り上り者に共通なざわめきがあつた。戀にも無常觀にも赤裸々な原始的などころがあり、力強さもあり、燃えてもゐたが、靜觀の餘裕がなかつた。狂してはゐたが客觀視する暇はなかつた。日本人がほんたうに物の味をその底に徹して味識することを知るやうになつたのは足利ころからであらう。

さういふ意味で金閣寺の玄關の水松を見てゐると興味がある。そこにはかの古木にありがちな、風にたたきつけられたやうな奇峭といつた風な感じもない。枝も幹も靜かにしかもどつしりと伸びてゐる。曇々たる幹に對して枝の張り方、葉の茂り方すべてが圓滿具足の形である。さう

かといつて決して華やかでもない。微塵の浮薄さもない。一枚一枚の葉は椀の葉に似て重厚であるが、更に形良く磨き上げられてゐる。幹をつつむ皮にしても椀に似て堅いがもつと整つてゐる。磨きがかかつてゐる。そこには喧騒や、惱亂を聯想する何物もない。人生を厭離もしない、享樂もしない。悲觀もしない、樂觀もしない。ひたすら透明な智慧の空氣に浸されて悠久を凝縮してゐる大禪師の佛である。哲人のそれである。

世の中に生きて楽しむことのできる人は幸である。悲しむことのできる人も幸である。

楽しむこともできず、悲しむこともできぬ人の一生こそ一番悲痛である。哲人にはかやうな運命があたへられる。また一生のうち或る時代には誰でも屹度このやうな運命にめぐり逢ふことがあるにちがひない。

衆と偕に娛しみ、衆と共に悲しむといふことは理想的な聖賢の生き方であるにちがひない。しかし心から人の喜びを喜びとし、人の悲しみを悲しみとするといふ程度まで自分の心を養つてゆくことは容易なことではない。キリストがラザラの死を悲しんで泣き、芭蕉が杜國を夢みて泣いた心の尊厳をほんたうに知るためには、人は四十年なり五十年なりの人生の苦勞といふものを嘗めなければわからないであらう。

笑ふこともせず、泣くこともせずといふ境地は至上の生き方ではない。それは尊い精神の一路に在るものと思ふが、尙一步進まなければならぬものだと思ふ。それは苦行の境ではあるが、



苦行が目的ではない。目的は涅槃でなければならぬ。

足利時代は苦行の時代からやがて涅槃の時代への微光を見出さうとしてゐたのではなかつたか。そこにはもう陰惨な影はない。一道の白光が木の間を通してかすかではあるが漂ひ始めてゐたのではなかつた。

裏の木立につつまれた茶室を訪れて茶を喫す。この前訪れた時は一人の老翁が茶を立ててくれた。老翁にはただ一人の男の子があつたが、東京の大震災で行方不明になつて、一年経つて消息もないといふ話を聞いたことがあつた。今度もその老翁がまだゐるのであらうと思つて立ち寄つて見たが、もうその老翁はゐらないで元氣な中年の男が茶を立ててくれた。老翁のことをたづねて見ようかと思つたが、止してしまつた。

金關寺を辭して、茅芒などの道をめぐり、朱に染めた格子戸の家つづきの町を過ぐれば道は歩一歩と爪先上りの、左手には近く衣笠山、右手には遠く比叡。振りかへれば加茂川を挟んで京の町が秋の日の下に擴がつてゐる。登るにつれて家は疎らになつて来る。修竹の林を切り開いて家を建ててゐるところもある。朝鮮の人たちが五六十人もひとかたまりになつて土を運んだり、崖をくづしたりしてゐる。鞍馬口あたり、八瀬あたりの道が白く稲田の間を貫いて南北に走つてゐる。

桐の畑がある。茶の畑がある。山城の山が、大和の山が。そして何處のそれとも知れぬ白い流

が溝の下を漂うてゐる。二條の皇城も、東寺の塔も。

わたくしは修竹に挟まれた丹波街道を歩きながら、光悦のことを思ひ出した。恬淡無慾な光悦がすべての高價な家什を人々に分け與へてしまつて、ただ一僕をつれて簡素そのものの生活裡に鷹ヶ峰の竹林の間に紙屋川の涼々たる音を聴きながら、ひたすらに藝道に精進したのであらう日。かれは一月に幾度かはその丹波街道を下つて京に通つたであらう。そして松花堂とも逢ひ、近衛應山とも語つたであらう。まだそのころは草深くして草賊などの害がたびたびであつたといへば道をゆく人の影も滅多に見出せなかつたであらう。

そこに轉がつてゐる石塊も光悦の下駄に觸れたものであるかも知れない。さらにはあの山あの川の音。あの雲の色。坂を登り盡したところかたまりの人家がある。寺があり、學校があり、役場がある。恐らくそのころ光悦の手によつて草の中に切り拓かれた五十五戸の藝術村の名残でもあらうか。軒の低い、土間の暗い、骨太な格子戸の、落ちついた京風の家々である。大原女風な女たちが黒い牛に草をやつてゐる。

村の中程よりやや上手に丹波路に沿うて光悦寺の境内がある。道から門まで半丁ばかりの聲や、修竹、植ゑ込みの具合などが殊にいい。寺といつてもささやかな庵寺といつた感じである。若い大工が一人こつこつと鑿の音をさせてゐた。

その若い大工に案内してもらつて松や竹の間をくぐつて三つの茶室を見せてもらつた。茶室の



窓に相迫るやうに鷹ヶ峰の松が榮々とかがやいてゐる。耳をかたむくれば潺々として水の音を聴く。竹林の下をくぐる紙屋川の流れであらう。

竹林の中の静かな光悦の墓にぬかつき、さ、に光悦の手簡や作品を見せてもらつた。墓は高さ三四尺幅一尺四五寸の平たい碑である。線香が二三本燃えのこつてゐた。東京であつたならその一品を見せてもらふにしても監視付きの下に観るより他はないであらうに、家の主婦は光悦の遺品すべてを處せまきほどに並べ立てたまま何處かへ行つてしまつた。わたくしは主婦の心をありがたうと思つた。

「小袖や宗是茶入を光悦三十枚にかひ被申候、まけ可申と被申候へばそれならばいやと申家を十枚にうり二十枚はかり候てかひ被申候三十枚いたすべき茶入を安くかひ候はいつはりにて候故實を立申根性に而候此事京中には氣ちがひと申候、權現様は御ほめ被成候」(日九書簡)

一つの茶入を買ひたいために家を賣り借金をしてまで買ふところに光悦の面目がある。さらに金三十枚のものなるがゆゑに三十枚で買ふ、まけてもらつては買はぬといふところにかれの藝術家的恬淡さがある。東の人たちがこれを氣ちがひと評したといふのはさもあるべきである。家康が褒めたといふのもさすがに家康である。

今の世にはあまりに常識的な小柄巧な人たちが多い。打算的な人たちが多い。ほんたうの藝術は氣ちがひか、さなくばイヴンの馬鹿でなければ生むことはできない。名を得たいために、幸福

を見出したいために藝術を志す人があるならば、かれは俗人である。藝術は生活の一つの深呼吸に過ぎない。藝術に精進するといふのは、畢竟肺臓を持つてゐる人間が生きてゆくために、呼吸をするといふに過ぎない。朝の空氣、深山の空氣、海濱の空氣を思ふ存分呼吸する。ただそれだけのことである。藝術を生み出す心、創造せんとする心は深山の空氣、海濱の空氣につつまれて深呼吸する愉悦を欲する至念のものではないか。

「光悦世の中のわざとては一こともしらず、心にもなし、我はさこそすべけれとこしらへたるに更になくて生れ得たる心のいさぎよきにてぞ有ける」(眼の草)

恐らくかれの人となりはがうであつたらう。生來の心の萬人にすぐれていさぎよくあつたであらう。或る人はかれを評して「又世に有べき人間とは覺侍らず……」といつてゐる。

生まれながらの有徳者であつた。生まれながらの藝術家であつた。

「二十歳計より八十歳にて相果候迄は小者一人食棧一人にて暮し申事也、此故に一生詣ひ申さず」(本阿彌行狀記)

えらがる者はひところは認められもしよう。世間の噂の後をのみ追ふやうな凡庸な批評家たちにはうたはれもしよう。しかしほんたうな藝術家はむしろ自分の力の足らぬをこそ悲しみもし、恐れもするであらう。光悦はさうであつた。

しかし謙遜と謂ひとは別々である。えらがる者こそ一面に於いては詭ふことを知つてゐる。か



れは先づかれ自身に詔ふがゆゑにえらがるのである。

凡庸な藝術家は周圍に詔ひ、黨人に詔ひ、先輩に詔ひ、後人に詔ふ。そのやうな藝術家に何の爽快な深呼吸があらう。

名を求むる者は詔ひ、幸福を欲する者も詔ふ。「名もいらす、金もいらす、命もいらぬ者ほど始末に終へぬ者はなし。」と大西郷は言つた。藝術の道に於いても一番恐ろしい天才はこの始末に終へぬ者である。名も金も命もいらぬといふ氣ちがひである。

修竹林の小暗い影に小ひさな碑をいただいて眠つてゐる無慾な光悦の前に立つてわたくしは、藝術のありがたさをしみじみと感じた。と、同時に洛北の瘦せた一基の碑があるためにいかに京都の山が尊くされたかといふことを想はずにはをれなかつた。

膳所には芭蕉の墓がある。鷹ヶ峰には光悦の墓が、また何處にかは近松の墓があるであらう。それ等の瘦せたる三四の墓を有することによつていかにわたくしたちの日本の自然が尊くされてゐることであらう。

日が暮れてからわたくしは丹波街道を下つた。

## 八月の霧島

夜の汽車から浪に映る宮島の燭を見ようと思つてゐたが、旅の疲れですつかり眠つてしまつて、眼がさめたころは夜はすでに明けてゐた。中國特有の低い砂山の松の間には赤い百合の花が咲いてゐた。芒の穂につつまれた磯の、廣い鹽田には朝の露が重く、まだ人の影一つ見えなかつた。

静かな朝の入り江は、低い砂山をめぐつてさらに眠りからさめたばかりの静かな入り江へとつづいた。潮に沿うて露重げに夾竹桃が咲いてゐた。

島の影が光り、海の色が磨き上げられたやうにかがやきはじめたころは汽車の窓からは下ノ關の山が見えた。

わたくしたちはステーション前の俵を雇つて壇の浦見物に出かけることにした。ステーション



の前にも、波止場にも、市場にも白い服の朝鮮の人たちが群をなして立つてゐた。眞夏の日がきらきらとかがやいてゐた。殊に藁履のやうなものを穿いた朝鮮の女が、その夫らしい逞しい男の後ろから異邦人の間を、小勝で急ぎ足に歩いてゆく姿は旅人の心を惹きつけた。

二三日前の雨のために壇の浦に沿うた高い崖はくづれて半ば道を塞いでゐた。そこにも二三十人の朝鮮の人が、日本の工夫たちに交つて土を運んでゐた。

恰度退き漸だつたので早朝の瀬戸は白い渦を巻いて流れてゐた。

二位の尼に抱かれて安德帝が身を投げられたといふ海の上は道からわづかに三四十間とははなれないところであつた。そこには赤い浮標がつながれてあつた。御裳堀川が流れてゐたといふあたりには、古びた二階建の家が七八軒も海に沿うて並んでゐた。崖の下で二一人の少年がしきりに貝をあさつてゐた。

四圍の山であらうか、九州の山であらうか、標渺たる煙波をへだてて波の上に横たはつてゐた。かつてそこでは恐らく幾萬の人々がわめき叫んで、人の血を食つたことであらう。戦旗が翻つたことであらう。人間のあらゆる光榮と、努力と、勇氣と、華やかさと、残忍さとか波の上に描き出されたことであらう。

黒い波のみが流れてゐた。岸の芒を吹く風は秋のやうに白かつた。

赤間神社の森は暗いほどに茂つてゐた。網目になつた木の根につつまれて二位の尼、知盛以下

二十人ばかりの小ひさな墓が並んでゐた。それは名もなき行路病者の墓を聯想させた。恐らく里の人々が、岸に流れついたかれ等の死骸を一つに集めて山の根方に葬つたものであらう。苔につつまれたあはれな墓の前に立てば臉の裏がぼてるやうな感じに打たれる。安德帝の御陵は一段低いところにあるが、わたくしたちが訪ねた日は恰度御命日にあたるといふので門が開かれてゐた。

急ぐ旅でもないので博多に下りることにした。

何といふ宿屋がいいのか知らないで、旅行案内を出して見たが三つの旅館の名が出てゐた。人に訊ねるわけにもゆかねので眼をつむつてゐて指でさした宿に落ちつくことに決めたが、その宿は去年の冬焼けたといふことであつたので水野といふ旅館にゆくことにした。

わたくしたちの都屋の直ぐ下は廣い河になつてゐて、そこからは青い空も見え、河に臨んだ大きな建物も見えた。箱崎だの千代の松原だのとあわただしく市中をかけめぐつたが、古城の白い水が一番旅人の頭に深い印象を刻みつけた。

博多は夜の町である。

夕焼けの空の色と雲の色がこの上もなく美しい。すべての建物も人の言葉も人の姿も、一つの柔かなリズムの中に律動してゐる。



近松時代から既にうたはれてゐる柳町は恐らく今の場所にあつたのではない筈だが、ともかく

その柳町を見ることにした。電車の終點から間もなく、青い稲田にとりかこまれた一廓がある。大門をくぐつて取附きの家から、すでに厚化粧をした若い女たちが簾をかけた格子の前に腰を卸して浮かれ男を待つてゐるのであつた。人の善ささうなやりて婆さんが若い女たちと一緒に店の前に立つては夕焼けの空を見たり、笑つたりしてゐた。肌を脱いで化粧をしてゐる女の姿が簾を通して見られる家もあつた。助六の舞臺に見られるやうな古風な遊女町の名残りはまだこの青田の中の廓にはそのままに取りのこされてゐるのであつた。

廓を通りぬけてしまつてから、わたくしたちは紅く燃えた夕焼けのあまりに美しいのに惹きつけられて、しばらく田の中に立ちつくしてゐた。濃く白粉を塗つた女たちが廓の横の橋の上に出て川の面を見つめてゐたりした。

夜になれば水に沿うて燭がまたたきはじめた。月が夕焼けの雲の間から照りはじめた。人々はわたくしたちの宿の直ぐ下の川にボートを浮かべた。わたくしたちもボートを借りることにした。わたくしは十幾年振りに月下にボートを漕いだ。橋の下をくぐり、又橋の下をくぐりながら幾度かボートを橋杭に打ち突けながら川を下つた。

わたくしたちはボートを下りて夜の街を歩いた。

東京への土産にと思つて博多人形をあさつて歩いたが、近ごろのものは立派にはかりなつてゐ

て氣品が乏しいので買ふことは止してしまつた。

夜の十二時幾分の汽車で鹿児島に立たなければならぬので、わたくしたちは早く寝ることにしたがほとんど眠れなかつた。十二時ちかくなつてわたくしは起きた。水の上には月が照つてゐた。街の人通りも絶えてゐた。水の上には廣告塔の電燈の光りが赤い、青い光脚を投げてゐた。水をへだてて鼻の聲が聞えた。まだ誰も眠つてゐた。

「これからまた遠い旅をつづけなければならぬ。」わたくしは眠つてゐる人々の顔を覗きながらかう思つた。冷たい微風が川の面から流れて來た。旅といふ感じがしみじみ、迫つて來るのであつた。

「起きるんですよ。」わたくしはS少年を揺りうごかした。少年は容易に起きなかつた。少年は眼をさましてはわたくしを見て微笑んだ。かれは再び眠るのであつた。わたくしは少年を揺り起した。少年は眼をさましてはわたくしを見て微笑んだ。かれは三度眠りこけた。

「さあ、もう起きるんですよ。汽車に乗るんですよ。」わたくしは一層のこと翌日まで時間を延ばさうかとさへ思つた。旅と言つては東京から箱根以西に出たことのない少年が、はじめて親の手から離れてわたくしだけを頼りに、遠い旅までも限いて來るのだと考へるといぢらしい氣にもなるのであつた。わたくしは少年が寝ぼけたままわたくしの顔を見て微笑むたんに涙ぐましい氣にさへなるのであつた。少年は起き上つた。そしてなほ眠つてゐた。



わたくしたちは冷たい眞夜中の微風に吹かれながらステーションへ行つた。わたくしたちは再び泉の聲を聴いた。

疲れた旅人たちはいざななくクッションの上に眠つてゐた。

鹿兒島行きの汽車は殆んど満員であつた。蒸すやうに暑かつた。それでもわたくしたちは博多の宿では三十分ぐらゐしか眠らなかつたし、ひどく疲れてゐたので直ぐに眠つてしまつた。筑後川を渡つたことも知らず、熊本を過ぎたことも知らなかつた。殊に球磨川に沿うて、千七百尺の矢岳を越えて、鹿兒島に入るまでは幾十といふトンネルをくぐらなければならなかつたのであつたが、眠つてゐたので何も知らなかつた。

S 少年の聲が聞えた。

「人吉には下りないのでですか？」

少年はわたくしが前夜、「都合によつては人吉に下りて古城の跡を見よう」と語つたことを記憶してゐたのであつた。

「止ませう。もうすこしおやすみなさい。」わたくしはかう言つて少年を寢床に就かせた。まだ夜はほの暗かつた。

五時少し過ぎたころからであつたらうか、わたくしは急に横腹がひきつるやうに痛むのを感じた。どうしてもわたくしは眠れなくなつた。夜が追々に明けて來た。

七時幾分かにわたくしたちの汽車は吉松に停まつた。ここは日向線の分岐點である。

夜明けたばかりの山はまだ朝霧につつまれてゐた。高原の寂しい驛である。青い山につつまれた盆地である。わたくしたちはそこで次の汽車を待つために一時間ばかりも待たなければならなかつた。わたくしは刻一刻とはげしい腹痛を感じた。わたくしは一時間ばかりの間に二度廻りに立たなければならなかつた。

「昨夜博多で海月を食つたが、あれが悪かつたのかも知れぬ。」などと詮もなきことなどを考へたりした。

ステーションの前の山では老鶯かきつかりなしに鳴いてゐた。のうぜんかつらの花が青い木立に對して輝くほどに咲いてゐた。

牧園に着くまでの汽車の間でもわたくしはかなりひどく苦しんだ。

偶然にも汽車の中で逢つたK氏は沿線の山を指さしながら「この附近の山の間には最も古雅な舞が残つてゐます。誰か來て眞面目に研究して貰ひたいものですが、いつたいこの附近は昔から藩主自身非常に舞を奨励したもので、地頭などは農民を狩り出して無理にも踊らせたものです。」などと語つた。

芭蕉も南國らしい葉の美しさを輝かしてゐた。谿といふ谿には美しい竹の林があつた。そこには見るからに小ひさな農家があつた。山には絶えず鶯が啼いてゐた。



牧園といふ小さな驛に下りて、そこから四里の山道を自動車に揺られなければならぬのであつた。この附近は國分煙草の本場なので刈りのこされた煙草の葉が山の畑にすくすくと繁つてゐた。軒には赤い葉が吊されてゐた。自動車は草山を縫ひ、谿をめぐつて歩一步霧島に近づいてゆくのであつた、山は雲につつまれてゐた。振りかへれば櫻島が見え薩摩湯が見えた。種馬所の仔馬が柔かな草をはみながら母馬をめぐつて戯れてゐるのもいぢらしかつた。谿川の音が深い森林の底に、響いて來た。

榮之尾温泉から三四丁手前で自動車を捨てて、そこからは谿川に沿うて歩かなければならなかつたが、わたくしは再び腹痛になやまされた。先づ妻を温泉にやり人手を借らうとしたが言葉が通ぜず、十歩にして止まり、五歩にしてたまたみながら雨あがりの山道を辿つて行つた。

温泉宿にたどり着くと共にわたくしは寢床を敷いて貰つて寢た。悪寒に全身がわなわなと顫へるのであつた。わたくしはかつて芭蕉と病んだ會良とが旅に別れた折のことなどを思ひ出した。

「ゆきゆきてたふれふすとも萩の原」わたくしは會良の句を人ごとならず口ずさんだ。

「空が美しい、山の色が美しい。」などと人々は窓の外を眺めて言つた。わたくしは眼を開く勇氣もなく俯向いたまま寢てゐた。蝸の聲と谿川の音にまじつて老鶯の鳴く音が部屋まで響いて來るのであつた。

霧島の山腹の、種馬所附近に住んでゐるNといふ醫師が馬に乗つて見えた。恰度宿の主人がそ

の日肋骨を折つて倒れたため三里隔てた牧園からN氏はかけつけて來たのであつた。その岸に醫師はわたくしを診てくれた。少し熱があるから、すつかり下劑をかけた方がいゝたらうといふので、蓖麻子油を飲むこととした。五十グラムまでは大丈夫だと言つてN氏は五郎八茶碗にのみみと蓖麻子油を注いでくれた。

わたくしは眠りに落ちてはまた胸苦しさに眼をさました。

わたくしが眼をさましたころは日が暮れかかつてゐた。櫻島をつつんだ暮色が刹那々に移り變つてゆくのであつた。國分から加治木あたりの谿はすつかり白い霧の底にかくれてしまつた。湯治客の白い浴衣の影が流れの縁や、繁みの下に消えてゆくのをわたくしはじつとながめてゐた。

夜の十一時ごろであつた、宿の老人が「大隅の市來さんが只今牧園から山に着かれました。」と教へて來た。市來先生はわたくしの中學時代の唯一人の恩師である。

「直ぐお伺ひいたすのですが、體を悪くして臥つてゐますので、失禮ですが先生にお越しを願ひます。」とわたくしは老人の使にことづけてやつた。あまり遅いからといふので市來先生はその夜は見えられなかつた。

翌日はわたくしたちは市來先生と一緒に硫黄湯だの、明礬湯だのをたづねてまはつた。そこは、到底東京近くの温泉地に見ることのできない、始的なものであつた、人々はたいいは自炊



をやりながら逗留してゐるのであつた。こけら葺きの古い傾きかかつた湯の宿は、いかにも山の湯らしい落ちつきを興へた。湯浴客たちは谿に沿うて柴を拾ひ、山水に米を洗うてゐた。

「最も眞剣に神を愛するがゆゑに教會を捨てた。」市來先生は人生の苦痛といふ苦痛を嘗めつくして二十年振りにわたくしの前を歩いてゐるのであつた。今では家を捨てて、一人の婦人と共に大隅の小ひさな町に、かつて先生自身豫想もしなかつたであらうやうな生活を送つてをられるのであつた。

市來先生が大隅のはてから山を越え、海をわたつて霧島までわたくしをたづねて來られたことを思ふと、わたくしは何と言つていいかわからないほどの感激に打たれた。それでゐてわたくしたちは殆んど何も語らなかつた。

月が霧島の谿をも照らした。月も星も、今までに見たことのないほどに美しい光りを持つてかがやいてゐた。虹のやうな月の輪が鷹の淵のやうな大空にかかつてゐた。

山の麓の野も谿も霧の海につつまれてしまつた。月の光りが香ふばかりの霧を照らしてゐた。夜が更けるまでわたくしたちは市來先生と語つた。中學時代に市來先生の家におたMが歐洲航路で死んだことや、またTの弟が自殺したことなどが話題に上つた。

市來先生は翌朝山を下りて大隅に歸られた。まだ麓の谿は霧にとざされてゐた。山の嶺々だけが霧の海の上に恰度群島のやうに浮かんでゐた。霧の海の底を先生の体は下つて行くのであつた。

た。

午後わたくしたちは韓國嶽に上ることにした。霧島第一の嶺である。榮之尾の湯の宿の直ぐ後から道は非常に急であつた。一人の案内者を先導にしてわたくしたちは三抱へも四抱へもあるかやだの、まんこつともみぢだの、赤松だのの茂つた處女林を一里ばかりも歩かなければならなかつた。山は茂つてゐたが明るかつた。何といふ小島であらう、梢から梢の間を囀りながら飛んでゐた。葉の光りのあまりに美しさに恍惚としてわたくしたちはしばしば立ち止まつた。そこでは路傍の一莖の羊齒の葉すら捨てがたき輝きと香とを持つてゐた。かけすや鶯の聲が谿川の音につれて絶えず響いて來るのであつた。巨樹を横たへた倒木を越ゆることにわたくしたちは幹の冷たい苔に手や頬を觸れて見た

霧は樺の林の中を青もなく走つて行つた。わたくしたちは野苺を摘んでは食つた。

處女林を通り過れば山は急に展けて、そこには柔かな草の葉が八月の日の光りを曠野いづばいにほはせてゐた。

躑躅や、空木の間から、草の光りを滑るかのやうに、鶯の聲が流れて來た。

「大波の池が見えます。」と案内の男が叫んだ。韓國嶽を背景として、千年の處女林につつまれた大噴火口は海拔五千尺の雲と霧を凝り集めて碧緑の大波池を湛へてゐるのであつた。周圍二里の、絶壁に凭れる森林に抱かれたる山頂の池は、千尺の崖下に萬古の聖泉を撫しつづきは續碧



の空を宿し、岫を出づる白雲を泛かべ、夜は銀河の影を沈め、月光を秘するであらう。

何といふ聖麗、何といふ静寂！ 韓國の青い岫を出でたる白雲は大波の池に銀影を投げては、柔かな高原の草を舐めて谿に落ちて行く。

韓國の影と空の影と交はるところに一脈の銀線が池中を二分して、波は池の半面にかすかなささやきを立てた。

わたくしは未だかつてこのやうな静かな、美しい山上の池を見たことがない。人間が近づいて行くにはあまりに聖い池である。それは天空と、星と白雲の影のみを宿すために神によつて作られた池であるやうにすら思はれた。

わたくしたちは崖を下りて池の岸に立つた。案内者に跟いて来た五郎といふ犬が眞つ先きに池の中に飛び込んだ。そしてかれはわたくしたちが池の縁にゐた間殆んど一時間餘も水中に突き出た岩の上にはやがんだまま身じろぎもしなかつた。わたくしは池の靈氣に打たれた五郎を興味深く観た。

池の面をかすめて郭公が鳴きながら飛んで行つた。七八丁も隔つてゐるであらう向う岸から絶壁の古林にこだましつつ響いて来る笛の音の如き哀韻を聞いた。河鹿の聲である。莊重といふべきか、森嚴といふべきか、人間の技を絶したる大自然の交響樂である、わたくしはあまりの感激に草の中に踊り上つた。

わたくしたちは岩に腹道ひになつて池の水を飲んだ。聖泉とはこんな泉を指すのであらう。山も池の面も雲につつまれてしまつた。わたくしたちは薄暮の山道を下つた。

昔、日向の大酒屋の美しい娘が大波の池に沈んで、池の主となつたといふ傳説などを案内の男は語つた。

夜は十五夜の月が水の如く澄んでゐた。わたくしは眠るのが惜しくて眞夜中まで起きて谿川の縁を歩いた。大波の池に映つてゐるであらう月光の美しさを想像しては空を眺めた。ここでは月も星もまつたく大空に浮き出てゐる。平面ではなく一つの球體そのものとなつて空間に燃えてゐる。

櫻島も、加治木も月光の下に淡彩の繪を描いてゐるのであつた。

わたくしは不圖、わたくしを呼ぶ聲に立ち止まつた。牧園村長M氏であつた。M氏の風貌は霧島の自然そのものの如く朴々たる無量の温かさを感じさせる。

M氏等は月下にこの地方特有の焼酎飲みをやつてゐるのであつた。

月明の夜に焼酎をあふつて、歌ひ舞ふ素朴な生活は、わたくしをしてバイアズの詩に見るスコトランド人のそれを想はせた。

長者に對する美風、豪健なる薩摩隼人の意氣、それ等は恐らくこの國の山、この國の海に於いて純朴なる焼酎飲みの中に養はるるものであらう。



月は霧の海を照らし、山を照らしてゐる。耳を傾ければわたくしたちは黝い森林の奥から、霧の海の底から焼酎飲みの哀々たる歌を聴くであらう。

翌日の午後わたくしたちは鹿兒島に立たなければならなかつたが、わたくしは再び大波の池を訪ねて行つた。

山の人々に送られてわたくしたちは自動車に乗つた。急峻なる緒土道を駆け下り狭い曲り角に來るたんびにわたくしたちは腋下に冷汗を覺ゆるのであつた。

四里の山を下つて牧園に着いた時は、夕焼空の色が放牧の馬の背にたゆたうてゐた。竹林にうつまれた小ひさな農家や、梅檀の並木の下に乗合馬車などが遠い南國の旅に來たといふ感じをしみじみと湧かさせた。

電話をかけてゐる若い驛員の言葉は恰かも女のやうにやさしかつた。子供等は泉をめぐつて水を掬んでゐた。

國分を出て間もなく単人塚といふのを見た。線路に沿うた小高い丘に二基の塚と、他に甲冑武者のやうな石像とが並んでゐる。塚は塔のやうな形になつてゐてかなり大きなものである。昔龍襲の征伐のころ、かれ等の靈魂を慰めるために建てられたものだといふ傳説があると案内の男が語つてゐた。

月は薩摩灣を照らしてゐた。櫻島を背景とした薩摩灣の月は、須磨で見た月以上に落ちつきと、寂しさを持つてゐた。芭蕉がつひに薩摩灣を見ることなくして死んだことや、西郷と月照とが相擁してこの海に投じたことなどを思ひながらわたくしは櫻島を眺めてゐた。海に沿うて鹿兒島の街の燈が明滅するのを見た刹那、ほんたうに遠い旅をつづけて來た寂しさが涙ぐましいほどに胸を突いた。

鹿兒島の驛から山下の薩摩屋の別荘まで行く間にわたくしたちは夜の鹿兒島の町を見た。

白い浴衣がけの人々が石塀の多い町を歩いてゐた。枝のまきのバナオがどこの果物屋にもつるされてあつた。二つに割つた大きな西瓜だの、まきはうりだのの多いのも南國らしい感じを抱かせた。

旅館は元島津公の茶亭であつたといふことであるが、質素なものであつた。

朱樂の葉が蓮の池をめぐつて繁つてゐた。夜つびて枕もとの池で蛙が鳴いた。この附近では茶盆といふものが深い曲げ物になつてゐて、一つ一つ蓋をつけてあるのが古風な感じを興へる。わたくしたちは蚊を追ひながら、夜更けまで月をながめた。

翌日は縣廳のM氏の案内で磯別邸や集成館を見た。集成館には維新前にすでに島津家に輸入されてゐた十八呎の旋盤や、紡績機械や、またここで作られた極めて上品な切り子の硝子や、所謂古代薩摩焼などを見た。今の集成館の場所は元、紡績工場があつた場所で、集成館そのものは紡



積工場をそのまま使用して作られたものであるといふことであつた。

島津家の文化が如何に他藩に比較して進んでゐたかといふことについてわたくしたちはしばしば驚嘆の聲を洩らした。南洲翁以下の墓を展した時、わたくしは十四年或ひは十五年といふやうな少年たちの墓を見た。わたくしは南洲翁の人格の偉大さと同時に、頼母しい人間の心の美しさに涙ぐまずにはをられなかつた。

南洲翁の墓の裏の参考館では、わたくしたちは會津戦争に於いて戦死した一薩摩軍人の守袋を見た。その中には京都帯陣中に井筒屋の或る女と馴染んだ手紙だの、その女の寫眞などがはいつてゐた。

またそこでは天吹といふ尺八を小ひさくしたやうな竹の樂器を見た。昔は陣中に携へたものさうである。音は尺八に似てさらに哀切なるものである。南洲翁を始め薩摩軍人なるものがかに多感の士であるかを想像せずにはをれなかつた。

夕焼けの空に映る薔薇色の櫻島の眺めは、城山の墓と共に最も強くわたくしの印象に刻まれた。城山が落ちたのは九月二十四日の拂曉であつた。記録によると二十一日は満月であつたやうだ。さうすると二十三日の夜も恐らく美しい月の夜であつたらうと思ふ。汚れた軍服を脱ぎ捨て、新しい薩摩餅に着替へて、月明りに照らされたかれ等の誕生の町を眼下に見ながら、死を決したであらうかれ等の歴史は、壇の浦の哀史に次ぐべき美しい詩である。

鹿兒島を出でて人吉に入り、さらに自動車を驅つて球磨川沿ひの林温泉に泊ることにした。窓によれば球磨川の流は十尺の下にあり、ここにも老鶯啼き、五位鶯は絶えず河をさかのぼつて翔つてゐる。湯の設備もすこぶるいいといふことであつたが、噂通りに湯も美しかつた。

汽車を人吉に下りた唯一の目的は球磨川下りであつた。わたくしたちは宿の直ぐ後から輕舟に乗つた。梶は舳についてゐて二十ばかりの船頭と、その弟らしい十歳ぐらゐの男が梶をとり、棹をさすのであつた。わたくしたちの舟と前後して更に一艘の舟が流れを下つた。

切り岸のやうな山の上には青々とした杉の林があり、そこには雪のやうに白い一羽の鶯が朝の日の光りを浴びてゐた。

舟は瀬を下ることに銀潭の中に舳を沈める。そのたんびに人々は快哉を叫ぶ。舟は巧みに岩と岩との間の狭い奔湍を越えながら矢の如く走る。

崖に沿うて家があり、徑がある。たまたま馬を追うて行く村娘を發見すれば人々は急流の中から山徑を仰ぎて叫ぶ。娘たちも答へる。

一勝地、舅蒸し、清正公などと船頭はわたくしたちを振りかへつては叫ぶ。

槍倒し岩といふところを下るのが一番愉快であつた。水が岩の根を噛んで恰かもトンネルを縦



半分に切つたやうな形になつたかなり長い岩の中を舟は急流と共に走る。そこだけは、人吉の城主相良氏も槍を倒さなければ通れなかつたといふのでこんな名が出たといふことであつた。

巖々たる山と、山との間に八月の空がわづかに展げてゐる他には、満目悉く奇岩と銀湍のみである。瀬を下つては幾度か全身飛沫を浴びて快限りなきを感じる。南晝に見るやうな輕舟を紡つて、人々は急流に鮎を釣つてゐる。亦、一風景である。

林から白石まで約六里、三時間の航程である。白石を下つて間もなく流れは淀み河幅は展げる。白帆を孕ませた輕舟が碧水をさかのぼつて来る。

白石から汽車に乗つて、球磨川に沿うて熊本に行つた。

去年遊んだ雲仙嶽が有明の海を隔てて車窓に迫まつてゐた。山には雲がかかつてゐた。妻の叔母にあたる人がかつて、江戸を去つて天草に住んだことがあつた。わたくしたちはその不運な老人のことを話しながら天草を眺めた。

阿蘇に行く宮地線の汽車を待ち合はせるためにわたくしたちは熊本驛で下りた。その間の時間を利用して水前寺を見ることにした。

水前寺の水は、その水の量も二十年前にわたくしの記憶に比ぶれば涸れてゐたやうな氣がした。その茶亭の印象は暗かつた。

わたくしは熊本驛附近の店から店人と歩いて行つた。そしてそこではわたくしの水前寺に於け

る暗い印象はすつかり改められてしまつた。人々はみな親切であつた。どの店に於いてもわたくしは旅人が感ずるホスピタルなやさしさを抱くことができた。

鹿兒島に於いてわたくしは殊に人の心のあたたかさを感じた。熊本に於いてもわたくしは美しい人々の心を感じた。

熊本を出て間もなく汽車は阿蘇の高原地帯へかかるのであつた。老杉の並木と、燦く煙草の烟が高原の間を縫つてゐた。

すさまじいほどの大煙柱がもくもくとして高原の涯に立ち昇るのであつた。空は輝き、燃えてゐた。

「阿蘇だ！」わたくしたちは窓を明けて巨人の姿を見た。

立野で汽車を捨てて、さらに一里餘の峻路を懸崖に沿うて俵をやらなければならなかつた。

栃の木温泉といふ深谿の温泉宿についたのは薄暮であつた。

ここはまだ極めて原始的な温泉場である。自炊をする客が多いといふことだが、馬の背に運ばれた小笹の束が宿の前に積み重ねられてゐる。馬はいつたいに小ひさいが、みなおとなしい。一人の女で二頭の馬と、さらに仔馬を連れてゐる。或ひは牛と馬とを一緒に曳いて来るものもある。



宿の下の谿川に出て薪を拾ふ老妪もある。

幽谿につつまれた温泉宿の窓からはわづかに天の一方しか見られない。夜になれば河鹿が鳴く。

朔が鳴くころになれば宿の人々は河原に出て遊ぶ。

夜明けまでなつてわたくしたちは初めて有明の月影のみを窓の下の流れに見る。谿があまり深いために月も星も一部分しか見ることはできぬ。

わたくしはまた昨日から病んだ。今日は一里半ばかり離れた阿蘇の病院から馬に乗つた若い醫師が見えた。若い醫師は去年都會地から阿蘇の高原地に移つて來たといふことであつた。家が山間に遠く散在してゐるために一人の患者を見廻るに三時間はかかるといふことであつた。

かれは人懐かしげにいつまでも話して行つた。ここでは夕暮の風は秋よりも寒い。

## 楡の都

あの恐ろしい大地震、秋東京で別れたきり逢つたことのない北見の友人と語つて見たいと思つた。友人の農夫生活も見たいと思つたのが主な動機となつてわたくしはながいこと北海道行きの計畫を立ててゐた。

その長い間の思ひがかなつていよいよ北海道へ立つことになつたのは東京ではまだ暑いさかりの八月初旬であつた。

北海道といふ名を初めて記憶したのはまだ小學校にもはひらぬころのことであつた。故郷の貧乏士族たちを救済する方法の一つとして、そのころさかんに北海道移住がわたくしたちの藩で奨励されたらしい。わたくし、屯田兵といふ名もそのころから記憶してゐた。貧しい父と母がよく額を鳩めて北海道へ行つたものか、それとも行かないものかについて寂しい顔をして夜おそくま



で相談してゐたことをかすかながら覚えてゐる。子供心にも故郷を捨てて雪の深い遠い他郷へゆくといふことは悲しかった。たうとう北海道行きが沙汰止みになつたことを知つた時にはさすがにうれしかった。

そのころわたくしは貧しい父にせがんで喇叭を買つてもらつたことを覚えてゐる。わたくしは夜も寝もその喇叭を吹いた。家のすぐ前に古い池があつて、よく眞つ白な翅の鴿鴿が池のまはりに來ては下りてゐた。

わたくしは汽車に乗りながらも眼をつむつては亡くなつた父や母のそのころの俤を想像した。偶然にもその日は亡くなつた父の命日であつた。

わたくしは去年十一月、陸中平泉まで旅した。そのをり初めて見た那須野は冬枯れて蒼條たるものであつた。木を焼く白い煙が遠い波のやうな丘の上へ漂うてゐた。五里走つても十里走つても人影一つ見ぬ草枯れの道のみが漫々としてつらなつてゐた。

けふは那須野も柔かな若葉につつまれてゐた。日は草の上にかげろふばかりに燃えてゐた。

白河を越えて間もなく日が暮れかかつて來た。水場につつまれた村の高燈籠をいかにも旅らしい心になつて眺めた。一月おくれの盃蘭盆でもあらうか、小高い丘に沿うた家々には水よりも高く燈籠がつるされてゐた。

青田の間には十坪ばかりの小ひさな蓮田に白い蓮の花が暮れかけてゐた。

いかにも秋ちかい旅の心がわく。

日暮れて仙臺の町に入る。わたくしにとつて二度目の仙臺の夜である。この古い町を訪ねるとに『奥の細道』に書かれた風流人のことを思ひ出す。

「名取川を渡つて仙臺に入る。あやめふぐ日也。……ここに畫工加右衛門と云ふものあり、いささか心あるものと聞き知人になる。……昔もかく露深ければこそ、みさぶらひみかさとはよみたれ。薬師堂天神の御社など拜みて其日は暮ぬ。猶松島鹽がまの處々畫に書て贈る。染緒付たる草鞋二足錢す。さればこそ風流のしれもの愛に至つて其實をあらはす。」

あやめ草足に結はんわらぢの緒（奥の細道）

畫工加右衛門といふ男はどんな男であつたらう。宵暗の古城下を歩きながらわたくしはそれらしい風貌の男を物色して見たりした。旅らしい戯れである。

今では草鞋を穿く機会もすくないが、それでも旅に出では年に二度や三度は穿く。草鞋で夜道の土を踏む氣持ちはまた格別である。紺の染緒を付けた草鞋を錢された旅人のうれしさは想像することが出来る。芭蕉も餘程うれしかつたらしい。「さればこそ風流のしれもの云々」の言葉を讀んで居ると腕に錢を寄せてよろこんで居る俳行脚の面鏡が浮かんで來る。芭蕉の文としては



ウモラスな筆致である。

夜になつて雨が降つて来た。

静かな町の夜であつた。寛を落ちる雨の音がさらに旅の心を沈める。

朝はからりと空は晴れてゐた。演習があるのかステーションの廣場には若い兵士たちが寝不足な眼をして汽車をながめてゐた。背囊や劍帯の革の香がすかに漂うて来た。わたくしの頭には二昔前の人たちのことが不圖記憶によみがへつて来た。夜深く青島の戦線に送られてゆく列車のなかの男たち、戦さがすんで凱旋の道すがら玄海の暗夜の荒浪に飛び込んで自殺したI中尉や、基隆の砲臺で死んだE中尉、博多節の巧かつた花田といふ一等卒、よく俳句を讀んでゐた高村といふおとなしい男たちのことが想ひ出された。高村は中隊でもわたくしと同じくらゐるあまゝり丈夫でない兵隊であつた。いつであつたか臼砲の陣地變換でどしや降り雨のなかを高村とわたくしは臼砲の車輪をかついで急峻な草山を走り下つたことがあつた。死ぬまでに苦しかつた。花のさかりで、塹壕を掘るシヨベルを突き込むには惜しいほど花が土を掩うて咲いてゐた。病死した或る兵士の死骸を夜が明けるまで見張りに出かけて行つたのも高村とわたくしであつた。兵士の死骸は翌日の夜、草の中で焼かれた。

そのころのことを思ひ出しながらわたくしは青森行き汽車に乗つた。

あのころは悪い病氣が流行して二十人ばかりの同年兵のうちでも海をわたつて内地に歸るまで

に五六人は死んでゐた。

二昔前のことを思ひ出しながら旅をつづけてゐる自分自身が不思議なやうにも思はるのであつた。

若い兵士たちは汽車の道に沿うて草のなかに寝ころんでゐた。そしてちやうど二十年前にわたくしたちがしたやうに、草のなかから首をもたげてはなつかしさうに旅人をながめてゐた。

\*

去年の初冬、ちやうど雪空の日に訪ねた平泉中尊寺の丘がすぐ汽車の窓に迫るやうに見えた。

あの日は雪が落葉の上に降つてゐた。わたくしはその落葉しつゝした中尊寺の丘の上に立つて衣川をながめ、蕭瑟たる陸奥の冬枯の草山をながめた。光堂の前で氷てついた道を歩きながら藤家三代の榮耀の果をいろいろに頭に描いたりしたことがあつた。

汽車は北上川に沿ひ水をへだてて東稻山を右にながめながら北へ北へと走つてゐた。

中尊寺の屋根が杉の木立のなかに眠るやうに見えてゐた。つはものどもが夢のあとをしのぶにはあまりに日の光りは燃えてゐた。

一村ごとく屋根の上に赤い百合を植ゑた農村が、低い小山にとりかこまれてゐたりした。草屋根の上の赤い百合はそよ風に吹かれてゐた。わたくしは屋根の上にあやめを植ゑた東海道程ヶ谷あたりの古い町を聯想した。



岩手富士が曠野の涯に見えるころから視界は二層展げ、木は低く瘦せ、草は青く肥えた。桔梗は原を埋めて咲いてゐた。三四年前の秋伊賀の上野に芭蕉の故郷塚を訪ねたをり、木津川をさかのぼつて伊賀に入る國境の高原で美しい桔梗の原を見たことがあつたが、それにも幾倍して草原はひろがり、桔梗は野を色どつてゐた。

岩手富士の秋をめぐつて曠野はあはれにも、はるかにもつらなつてゐた。

何といふところであつたらう、二里三里走つても農家一つ見ぬほどの草のなかにたまたま數軒の小屋を櫟林のなかに見出だした。そこはかなりの登り傾斜になつてゐるので汽車はしづかに走つて行つた。

不圖わたくしの耳に京の町で聴く托鉢の聲に似たわびしい聲を聞いた。わたくしは窓から外を見た。七八人の子供たちが汽車を追うて來るのであつた。汽車のなかからはパン屑だの、辨當だのを人々は投げあてた。子供たちは争つて草のなかに投げられたものを拾ひあつめては手早く懐のなかに入れた。

汽車が坂にかかる時間を見はからつては山の子供たちはそこに集まつて來てゐるのであらう。何といふ惨ましい山の子たちの生活であらう。草のなかにパン屑を犬のごとく争ふ山の子のいぢらしさを正視するに忍びないやうな氣もするのであつた。

汽車はさらに幾時間も林檎畑の間を走り、牧場の埒に沿うて走つた。

野に働いてゐる女たちが赤い、或ひは黄色な布を眼深にかむつてゐる姿が、ロシアあたりの女を聯想させるのも旅人には珍らしかつた。

八甲田山が雲の間に見えて來た。日は落ちかかつて來た。

黒い潮が夕燒の空の下に漫々としてたたへられてゐた。

わたくしは聯絡船の甲板の上に立つてじつと暮れてゆく海の上をながめてゐた。その海の上で亡くなつた不幸な叔母のことが思ひ出されて仕方がなかつた。

\*

海峡の潮はいかにも黒かつた。人々はデッキに集まつて暮れゆく内地の山を眺めた。

船長S氏は奈良の人である。奈良のことを話し出すといかにも奈良が戀ひしさうである。このころでは海峡の潮に身を投げる者が多くて困るといふ話などをぼつりぼつりと語り出す。

内地の山が見えずなるころから北海道の山が波の上に泛かび、漁火と、岸の灯がまたたきはじめた。

月が海を照らしはじめた。

わたくしは艦の方へ走つて行つて、雪のやうに白く泡立つた遠い船路の後を飽かずながめた。デッキの上にわたくし自身の影が冷たく投げられてゐた。どこの燈臺の灯であらうか、月の下に青くまたたいてゐた。眞晝のやうに明るく月であつた。蒼白い月の光りをこめてあるかなしか



の霧は波の上を漂うてゐた。

わたくしはベンチに腰を下していつまでも月をながめてゐた。かつて逢つたいろいろな人々の  
聲が泛かんで来た。そして恐らく永遠に逢ふこともないであらう人々のことが。

逢ふことが幸福なのか、別れることが幸福なのか。恩怨二つながら水のごとく、霧のごとく月  
光のなかに溶けてゆく。

函館が見えた！ デッキの人々はさわめきはじめた。幾萬の灯が月を背にした黝い山のいただ  
きから波の上までまたたきはじめた。わたくしの頭には二十五年も前の長崎の夜の燈が浮かん  
で来るのであつた。

わたくしは生まれて初めて北海道の土を踏んだ。その刹那にわたくしは函館の或る寺に葬られ  
てゐるといふ叔母のことを思ひ出した。

わたくしは町を歩きながらあてもなしに山の手の小高い燈を拜みながら黙するやうな氣にも  
なつた。

わたくしが想像してゐたよりも夜の函館の町は賑やかであつた。東京の明るさが東北の町を素  
通りにして直に北海道の町へ移されてゐるのであつた。

しかし空は何となく冷たかつた。暗かつた。そこを歩いてゐる人々の姿までがわびしかつた。  
湯の川の宿は思つてゐたよりも静かであつた。ただ一人で夜更けの大湯に浸されてつくづく旅

らしい思ひに耽ることができた。

夜が明けたらばトラピストを訪ねて見ようか、外側から建物だけでもいいから湯の川の天使園  
をのぞいて見ようかなどと明日の計畫を立ててゐる間に眠つてしまつた。波の音であらうか、風  
の聲であらうか、地の呻き聲にも似た遠い聲を幾度か聞いた。

夜が明けた。わたくしははじめて太陽の下に北海道の街を見た。胡瓜を賣る女たちがロシヤの  
女たちのやうな巾を眼深にかむつて馬に乗つて来るのであつた。後から後から巾をかむつた女た  
ちは馬に乗つて来た。仔馬がうしろから道草を喰ひながら歩いて来た。

馬に乗つて胡瓜や玉割黍を賣つてゐる子供たちを思ふとあはれであつた。故郷を捨てて遠い他  
郷へ来てゐるのだと想像するだけでも何となくあはれであつた。

こけら葺きの屋根、板でつつまれた壁、小ひさな家ごとに見出さるるストーヴの煙突、高く仕  
切られた硝子窓、切りのこされた櫛の蔭、漣しもなき草のなかをわびしげに貫く道路、町に行く  
馬上の女、山へかへる馬上の男、すべてが旅人にはものめづらしい。

トラピスト行き汽船は出てしまつたといふことであつたので、わたくしは五稜廓を一めぐり  
して函館を立つことにした。

函館を立つて間もなくいよいよ汽車はいかにも北海道らしい曠野を左右にながめながら走る。  
ポプラの並木は秋にも似た白い風に吹かれてゐる。地はいよいよ遠く、白い雲の下に地平線をた



づねまどふ。赭土色の山道を一人の若者が馬を走らせてゐる。仔馬が走る。

走つても走つても家もなく、人もない。

伐り拓かれた森林の跡には燕麥の穂が赤く熟れてゐた。

青い牧草の間に、白骨のやうにさらされた大木の根がごろごろと横たはつてゐた。

ながめてもながめても人の影も見えない。

青い草の上に忽然として駒ヶ岳の赭い巖山を眺めたのはすくなくからぬ驚異であつた。紺青の空に聳然たる奇嶺はただちに日本アルプスの鎗を聯想させた。昔大和民族とアイヌの一族が血河屍山の修羅場を演じたであらう大沼のほとりには睡蓮の花が白日夢をこめてゐた。

駒ヶ岳の裏をめぐつてやがて汽車は火山灣の白波に沿ひ、いたりや燕麥の曠野を北へ北へと走つた。波また波、白い翅の海鳥また海鳥。子供らは黒い海を背にして砂に寝ね、大人らは白い波に揺られて海草をあさつてゐた。海の廣さ！ いたり、原のわびしさ。人の影のあはれさ。

山また山、伐られたる山、焼き捨てられたる木の根、捨つることく撒かれたる山の蕎麥、風のごとく渡せたる燕麥！ 日は暮れてゆく、しかし山にも、原にも人も見えず燭も見えない。稀に火を見出してはわたくしは一つ二つと燈を算へた。やがてその一つ二つの燈さへ見えずなつて、ふたたび曠野空山の日が暮れてゆく

羊蹄山のいただきにはなほわづかに夕焼のなごりが残つてゐた。かすかなる夕焼の空と星とを

一つにながめて、灰色の俱知安の町が横たはつてゐた。わたくしはかつてそこに一人の不幸な青年を知つてゐた。かれは病人であつた。かれは祖父と二人切りで山に働いて居た。久しいことわたくしはその青年のたよりの持たない。わたくしはその青年のことを思ひながら俱知安の町の燭に見入つてゐた。

月が出た。浪の荒い北の海が迫つて來た。霧が野をこめてゐた。

「昔はこのあたりから奥には女は入れなかつたものですよ。」と誰かが暗い海を見ながら語つてゐた。

月の下に長いポプラの並木道がつづいた。山は遠ざかり、海は見えずなつた。そこに楡の蔭につつまれた札幌の町が横たはつてゐた。

町の人々は月の下を歩いてゐた。楡は巨人のやうな手をのびして月の蔭を抱いてゐた。

わたくしはそつと手を伸ばして手の平に動いてゐる月の影をながめた。何といふ靜かな月の光りであらう、まさに水のやうな。

それはすでに秋の光りであつた。懐郷の思ひをそそるべき影であつた。

楡の蔭は楡の蔭につづいた。

わたくしはこの大きな都會が見出さるる以前の楡の曠野を想像した。それほどにまだその町は濃い楡の木蔭をこめてゐた。



わたくしは或る店の前の楡の木に馬糞が立てかけられてあるのを見出した。人々は夏の夜をたのしむために、楡の木蔭の月光をたのしむために楡の並木の下を歩いて行つた。たいてい黙りこんでゐた。人々の足音は秋のごとく沈んでゐた。

夜が更けた。静かな夜であつた。雪の夜の馬糞の鈴の音を聯想するほどに静かな。

わたくしは美しい鐘の聲を聞いた。彌撒の鐘の音にも似た響きであつた。

町の人たちは「エルの鐘」と呼んでゐた。

翌日大通りを歩いてゐるとなるほど楡の間に一つの鐘がかけられてあつた。

亡くなつた有島武郎氏がすぐそのちかくの教會堂で日曜學校の先生をしてゐたといふ話や、そのころ日曜學校で有島氏の講話を聞いたといふ若い人にも逢つた。

月寒の牧場はわたくしにミレエの牧羊者を思ひ出させた。日が暮れかかつてゐた。風は真冬のごとく冷たかつた。

「午前三時には羊を追うて野に出ます。そして夜の八時半まで野にゐますー」若い牧羊者は羊の群をながめながらわたくしに話しかけた。かれは一疋の仔犬を抱いてゐた。

羊らは黙々として草を食んだ。風は月寒の天鷲絨のやうな曠野を地平線の涯まで吹きつけた。

牧羊者は薄暗のなかに草に埋もれてしやがんでゐた。

明日北見の友を訪ねようといふ前の晩であつた。

移り氣のわたくしは急に東京へかへりたくなつてしまつた。わたくしは北見の友に逢ひたいために此旅行を思ひ立つたのであつた。

わたくしはかれにも逢はないで急に踵をかへしたくなつてしまつた。

逢ひたい。しかし逢つたつてどうしよう。またすぐ別れなければならぬ。

わたくしは旅につかれてゐた。

逢ひたいと思へば思ふほど、友だちに逢はないで歸ることが自分の今の心を思ひきりさいなむやうでうれしくもあつた。わたくしは自分で自分の心臓を傷つける快よさに耽つてゐた。

北見の友への手紙を札幌のステーションに投げこんで、わたくしは北海道を立つた。

月あり、霧漂ひ、海は荒れて居た。

楡の葉に秋風さびし旅路かな



## 六里ヶ原

信濃沓掛の宿から北へ浅間の根腰を越えて、上信の國境に立つ旅人は澗然たる青空の研きに研かれたる美しさとともに、そこに展かれたる六里ヶ原の草の麗しさ、草の曠さに魂を打たるであらう。

峰の茶屋、別去の茶屋の名にわづかに昔の草津街道の思ひ出をのこす一筋の道は、南より北へと、草に入り草に隠れて六里ヶ原の高原を縫ふ。浅間牧場のほとりに三四の家を見る他たゞ草また草の六里ヶ原に、百體の地藏尊は苔古りて疲れたる行人に慈眼を垂れ給ふ。

浅間葡萄の熟るゝころになれば、鬼の押し出しから別去の茶屋あたりへかけて熊の話の聞く。草に臥して空を仰げば海よりも青き空かな。波よりも白き雲かな。

草をくゞるかすかなる水の音あり、青鳩の聲あり、白根のいたゞきに日照れり。郭公は啼く。

寂然として六里ヶ原の日暮る。

六里ヶ原はまた秋草の高原である。芒の高原である。秋ふかく芒の原を横切りて母馬仔馬の群の日も日も里の家に歸りゆくのを見るであらう。

ゆるやかなる丘また丘、朝風のごとく、しづかなる草の原、牧草の山、悲しきほどに遠き草の徑、永劫の死靜を抱きつゝ遙かなる六里ヶ原は雲に入りて、鳥低く飛ぶ。



## 雲は湧き雲は消ゆる

わたくしは赤松山の墓場に行んで、冬枯の十國峠から箱根のたりの冬枯れの山の姿を眺めてゐた。恰度一年前に吹雪の日、二人で十國峠を越えて東京に歸つて行つたことなどを思ひ出したりした。

その前の年は同じ日に箱根を越えて東京に歸つて行つた。その日も吹雪がはげしく、蘆の湖あたりから引きかへさうかとさへ思つたくらゐであつた。

箱根を越ゆる朝わたくしは山を眺めながら、

箱根路はくもりにけりな旅人の袂ぬらせと雪や降るらん

としたゝめて、湯の宿の人に與へて、宿を立つた。

宿の人たちは山路の雪を案じて引き留めたが、わたくしたちは山を越えることにした。

萬葉の歌人たちの心を傷めたであらう箱根の山は降つては實朝、西行、芭蕉、さらに近代の幾多の歌人たちの露旅漂泊の心を瘦せしめた。そしてなほ永久に旅人の心を憂へしむるであらう。

今日も枯れ枯れの山を這うて雪雲が漂うてゐる。

わたくしは今天涯孤獨の身となつて赤松山の墓場の前に立つて小半日箱根に懸かる雪雲を眺めてゐる。雲は湧き、雲は消ゆる。しかもまた雲は湧く。

人は生まれ、人は歎き、人は死ぬ。しかも人は生まれ歎きつゝ山を眺むる。

「旦那様、このやうに後から後から丸い石が出てまゐりますよ。」

わたくしは突然聲をかけられたので、松の根方に働いてゐる男たちの方を見た。墓の土を掘るたびに丸い石が鉄の刃にかちりと寂しい音を立てた。それ等の石はみんな古昔その山に立てこもつた人たちが、敵を防ぐために川から運び上げて置いたものであつた。そこは寨を築くに屈竟な場所であるやうに思はれた。

「その馬酔木は切らないやうにしておくれよ。」わたくしは若者に聲をかけた。三尺ばかりの馬酔木はすでに蓄さへ見せてゐた。

かつて故人と二人で芳野の奥を訪ねたをり、西行庵の軒に迫るほどに高く眞白な花をかをらせてゐた馬酔木のことを思ひ出した。



四十雀の群が松の枝から枝を傳うて、墓場の上に飛んで來た。ひとしきり梢から梢を渡つてゐたが、いつとはなしに谷を越えて行つてしまつた。

わたくしは赤松山を下り、凍てついた山徑をたどつて城山の方へ歩いて行つた。二十年も前によく歩いてゐた山徑の木も石もそのまゝであつた。杉の木立の晝もなほ暗く感じられたあたりには、今もなほ岩間の水が流れてゐた。

急峻な坂道を十丁ばかり登つて行つたところに城構への跡らしい壕があつたりした。そこから雪をいたゞいた天城も富士もまともに見られた。北伊豆の耕作地や町々を縫うて走る狩野川の流れが白く冬の陽を反射してゐた。

かつてそのあたりには山櫻が匂ひ雲雀が囀り、壺葦が咲いてゐた。幾曲り、曲りに曲つて流れて行く狩野川を眺めてゐる間に、わたくしの心はふたゝび言ひやうもなく暗くされた。一切空、萬有は流轉すといふやうな考へがわたくしの心を支配してしまつた。またしてもわたくしは孤影悄然として枯れ草の上に立つてゐる自分自身の姿に氣付かなければならなかつた。

いつも眺めた山腹の梅もまだわづかに二三輪笑みはじめたばかりのところであつた。わたくしは足をとゞめてはそつとその蕾に指を觸れて見た。

一人來て山の梅見る寒さかな

富士は銀よりも白く光つてゐた。狩野川の瀬の音がかすかに聞えて來た。

わたくしは城山を下りて狩野川の方へ歩いて行つた。梅に包まれた山寺の丸窓がいつになくわたくしの心を惹きつけた。昔から世を捨てゝ山に入つた人達の事が思ひ出されるのであつた。

二十年前に渡つた釣橋も今は普通の橋に代つてゐた。美しい流れに影を映してゐた山椿の花も昔のまゝであつた。

五六丁も田圃の中を歩いて行く間に妙國寺といふ古い寺の前に出た。森につままれた古刹はいろいろの傳説を持つてゐた。しかしそれよりもわたくしの心を惹きつけたものは、かつて故人と二人でその薄暗い本堂に跪いたをり、不圖見出した一人の女性の姿であつた。かの女は何か念じては数枚椿の葉を投げて、裏を見せた葉を算へてゐた。かの女は幾度か同じ仕草をくりかへしてゐた。かの女も亦悲しい運命を背負つてゐたのであらう。

本堂の裏には今日も椿の花が咲いてゐた。本堂からは讀經の聲が洩れて來た。わたくしは押しかぶさるやうにもて來る夕昏の中に立つて讀經の聲を聴いてゐた。不圖靴の爪先にあつた石のかけりといふ音にまたしても寒々と孤獨を感じながら寺の横に出た。寺の横には新らしい道が切り拓かれて、お萬の化粧の井戸も見えなくなつてゐた。お萬は將軍家康の愛妾で、かつて妙國寺に齧居してゐたことがあると傳へられてゐる。なほお萬の方が植ゑたといふ柿の木のみが麥畑の隅に見出された。



雪の山に二人の娘を失つた老夫婦の旅人はかつてその娘たちが歩いた山から山をめぐつてゐるといふことを聞いた。その老夫婦の旅人たちは、世界の何處かには、かつて在りし二人の娘はなほ生きてあると思ふのであらう。

わたくしは暮れてゆく狩野川のほとりに立つて、その二人の旅人のことを思ひ出した。

\*

けさは雨も止んだ、もう春が近づいて來たのであらう。風もあたゝかだ。柳の芽もふくらんで來た。

またわたくしは生きて、寶石をちりばめたやうな春の太陽を浴びることができなのだ。

わたくしは庭に出て兩手を高く伸ばさうとした。併し刹那にわたくしは手を下げてしまつた。高い棒のてつべんでは小鳥が啼いてゐた。

### 雨の修善寺より

日も日も天城は雲に隠れてゐる。狩野川に沿うて下田街道を走る自動車の間まじつてまだガク馬車も通つてゐる。天城から伐り出される木材を挽くための水車小屋も見える。

狩野川を挟んだ北伊豆の風物はすべて倦怠アソビそのものである。しかも氣澄み、神徴するほどの倦怠である。尊いほどの静寂である。

雲が途切れる。天城が黝い山肌を見せる。なつかしい山ではある。越ゆるによく、眺むるによき出である。雲はわき、雲は飛び、やがて洞然たる大空に入る。旅人の心を夏草の上に見出しつつ狩野川のほとりに佇立する。

けさは丘の上の眞つ白な禮拜堂から鐘が鳴つてゐた。彌撒の鐘であらう。桂川には河鹿が鳴いてゐる。河鹿を聴くために桂川をさかのぼつて戸田への緒土道を小學校の方へ歩いて行くのがこ



のころのわたしの日課の一つのやうになつてしまつた。

町の人々は忘れてもゐるであらうが、旅人にとつては吾妻鑑の「西刻伊豆國參脚參著昨日左金吾禪閣於三當國修禪寺二墓給之由申之」の記事を思ひ出さるゝ。元久元年七月十八日二十三歳にして殺された頼家の墓のほとりには朝かち杜鵑が鳴いてゐる。

範頼の墓はともかくとして安達盛長の墓、不越坂、藤次屋敷、殿の前、名のみ残りて草に埋もれ果てた趾をたづねて切々と迫り来る無常感に搏たるゝのも悟り来れば旅のありがたさである。航海術のきはめて幼稚であつた當時遙々日本に渡つて来た蘭溪或ひは寧一山のやうな宋元の名僧たちもかつて修禪寺にこもつて同じ桂川の河鹿の音を聴いたであらう。人生逝く水のことしの歎きを思ふ。

\*

戸田へ通ふ山の緒土道に沿うて桑の實は黒く熟れた。子供時代、麥秋のころになれば、學校がへりに一里ちかい山道を友達の家まで歩いて行つて桑の木に登つて眞つ黒な桑の實を食つたことを思ひ出す。

あのころは父もあり母もあつたが、今は故郷の山の友達もなくなつてしまつた。けふ麥畑に立つて桑の實を噛めば涙よりもわびしい。

時として非常に死を恐るゝ時代がある。死を恐れない時代がある。わたくしはこのごろあまりつて桑の實を噛めば涙よりもわびしい。

死を恐れなくなつたやうだ。結局人生の何ものもわたしの心をひかなくなつてしまつたやうだ。人生すべて見戯といつた感じである。たゞよき仕事だけをのこして死にたいとは思ふ。これも迷ひであらう。見戯とさとりながらもこの一念のみ、まだ捨てかねる。この迷ひを捨つることができたら、わたしは狩野川のほとりに山の小屋を探して終日天城を眺めるやうになれるかも知れない。

修善寺の町を出はづれて桑畑の間を歩いてゐると、かういつた隱遁的な考へがすつかりわたしの心を支配してしまふ。

\*

天城の雲はさらに濃く、さらに冷たく、眺むれど耕人の影もない。静かな雨だ。憂鬱な雨だ。馬酔木の葉を濡らす雨、萱を濡らす雨、山の温泉町をしつとりと濡らす雨。旅人の魂までも濡らしさうな山峽の雨が桂川をこめて降りそゞく。静かな雨だ。毎日このころはあるかなしかの静かな雨がつゞく。雨の中を町外れまで歩いて行つて、じつと桂川の岸に立つて山の小鳥の聲を聴くがいゝ。水懸といふ鳥の聲を聴くであらう。同時に尾長鳥の聲が。

水懸も尾長鳥も雨の多いこのころの季節になればあたかも流れをへだてゝ旅人に呼びかけるやうなわびしい聲で鳴く。雨そのものゝ聲である。溪澗そのものゝ聲である。東京から訪ねて来る若い人たちを連れて裏の赤松山に杜鵑を聞きに行くこともあるが、ほんたうは水懸や尾長鳥のは



うが天城の溪の雨霽の鳥としてはしみじみと旅人の心を打つ。いかにも迫つて来る。

雨である。水戀の聲である。天城は曇りに曇る。

雲、鳥にあくがれて旅をめぐつた古人の心をひたぶるに戀ふ昨日今日ではある。

けふも雨に日は暮れた。

静かな夜だ。宿の番傘を借りて修禪寺の石燈を登る、十餘人の雜僧たちが薄暗い須彌壇の前を  
翻經しながら輪を描いてめぐつてゐる。香華が漂うてゐる。散華が美しく舞ひ落ちる。合掌して  
は父を思ひ、母を懐ふ。

### 孤島の春に

春の雨が煙のやうに島の浦曲をこめた日であつた。眠つたやうな春の水には潮の香が湛へられ  
てゐた。山には白い花や紅い花が芽生えしたばかりの春の谿谷を埋めてゐた。

今日は朝鮮の山も見えぬ。

何時もはつい近くに泛かび出てゐる朝鮮の山脈も、今日ばかりは遠い潮路の涯に沈むでゐる。

薄霧のなかを縫うて玄海を北へ南へ流れて行く白帆の影が淡く郷愁の涙を誘ふ。

今日は鶯も啼かず、雉子も鳴かぬ。何處からともなく、沖の漁船が舷を叩いてゐる音が入江の  
峽に舒して来る。水を拍つやうな、山の峽に滅えて行くやうなその物音が一層孤島の春の雨を寂  
しいものにする。

國を離れた人にとりて、人間ほど懐しいものはない。わたくしたちは練兵の暇あることにこの



島の岸から岸と道もないところを歩いて、偶々古林につまられた数戸の漁村を見出すことに耐へ切れぬ人の懐しさと異郷の寂しさをしみじみ味はまされた。

椿の花が若い女の唇を想はせるほどに紅く燃えた下には雨風に打たれた破船が横たはつてゐた。白い貝殻や船蟲の殻などが雨に打たれながら古い船板にこびりついてゐた。名も知らぬ雑草の可憐な花が板の裂け目から覗いてゐることもあつた。

その春雨の日であつた。わたくしは静かな春の潮に滅えて行く細雨の音を聴きながら、花の多い入江に沿うて歩いてゐた。物の音一つ聞くことのできな春雨の朝であつた。岬から少しまはつたところに低く漂うた煙が見出された。そこには十二三人の海女が雨に濡れながら磯馴木を焚いてゐた。わたくしは何の氣もなしにそのなかにはひつて行つた。海女の一群はめづらしげにわたくしの方を見た。それでも誰れも話しかけるものもなかつた。かれ等は内地人に對して何時も相當の尊敬を拂ふと同時に、一種の警戒心を抱いてゐた。みんなが今までの話しを急に止めて、じいつと煙ぶつてゐる焚火に見入つた。

春の雨は煙のやうに降つてゐる。音もなしに。

しかしかれ等の沈黙は幾らも續かなかつた。年増の女たちは偷むやうにしてわたくしを見ながら何かひそひそと話し出した。けれどもわたくしはこの群から離れなかつた。女たちは大きな聲を出して、他愛もないことを興じ合つて笑つた。そして殆んどわたくしがそこにゐることを氣に

もがけないやうに見えた。

静かな入江の春雨の朝であつた。微かに立ちのぼる煙の下に集まつた十二三人の海女と、たゞ一人の異郷の旅人は紗のやうな春雨に打たれながら潮の香につままれてゐた。

わたくしはその春雨の朝を忘れない。

口汚く大きな聲を出して笑ふ海女の一群のうちに、わたくしはたゞ一人のつましやかな乙女を見た。女は深く頬をつむむでゐた。輪廓の正しい横顔と柔かな髪の毛とが何時までもわたくしの記憶に遺つてゐる。

しとしとと春雨の降る朝であつた。わたくしは名も知らぬ海女を見た。わたくしの心は悲しかつた。

わたくしは繊細い海女の姿を見た。それは静かに流され行く藻の花にも似た女であつた。わたくしはいつまでもそこに立つてゐることはできなかつた。わたくしは寂しい思ひを抱きながら入江の岬を廻つた。青い煙が這ふやうにして春の潮の上にあたゝへられてゐるのをわたくしは尙一度振りかへつて見た。

わたくしは島の春雨の朝を忘れない。



## 玄海の島

長崎から日暮ころ船に乗れば真夜中に壹岐の沖で玄海の荒浪を喰つて、翌日の正午ころ對馬の嚴原に着く。

博多から船に乗れば朝九州の岸を離れて、夕方對馬に着く。ちよつと玄海といふ名におどかされるし、壹岐の岬でもすれば甲板まで波をかぶることもあるが、大抵は思つたほどの難航ではない。「島も通はぬ玄海灘で……」といふやうな唄もあるくらゐだが、わたくしは八度玄海を横ぎつたが、そんなにひどいしげを喰つたことはなかつた。

九州の地を離れて恰度玄海の中程にさしかゝると、九州の蒼然たる山々が水平線の下に一寸一寸沈んで行く。

それと同時に壹岐や對馬の山々が一寸と水平線の上に浮かんで来る。沖の島が手近かに、山

の巖まで見えるやうになつて来るのもこの附近である。

黒い潮の涯に濟州島あたりの山の背が一抹の雲のやうに浮かび上つて見えることもある。マストをかすめて吹いて行く灘の風の聲は、やる瀬ない灘そのものゝ心を訴へる笛の聲のやうにも思はれる。

空も憂鬱である。黒い潮も憂鬱である。銀鱗を日の光りに反射させて水の面にすれすれに翔んで行く魚を見ることもある。鷗の群の下には、海の色を變へるほどに小ひさな魚群が湧いてゐる。そして鷗の影が波の上に着ちて行くことに、逃げまどふ魚群の銀鱗が、見わたすかぎりの潮の上に時ならぬ美觀を呈することもある。

風の立つ日には、碎かれた波頭が煙の柱を作つて白い帆のやうに潮の上を走つて行くのを見ることが出来る。昔の船乗たちの間につたへられてゐた海の幽霊などといふものを想像することができる。

玄海の潮の上に、黒く繁つた島の影を見出すころは、三十五里の島の岸を洗ふ帯のやうな白い怒濤に氣付かすには居れない。三百六十五日、對馬の岸には白い怒濤が狂つてゐる。

黒い岩、巖々としてより立つた岩壁、黒い處女林に掩はれた島の山、二丈三丈と飛沫を擧げて島を搏つ怒濤……何から何までが内地から行つた旅人の眼には珍らしい。

嚴原の港といつたところで、たゞ一つの石から出來上つたやうな岩山につままれた小さな屏風



の蔭と水といふに過ぎない。錨を投げてゐても船は絶えず揺れてゐる。岸には博多小女郎や毛朝九右衛門を聯想させる女や男たちが、潮風につままれて笑つたり、罵つたりしてゐる。

石の塀に包まれた土族町にはまだ昔の佛がのこつてゐる。塀も屋根も苔や蔦につままれてゐる。塀一枚もあるやうな扁平な石を屋根の上に列べ立てた漁家もある。

嚴原から三里山を海に沿うて走つてゐる鶏知までの道には、恐らく今でもがた馬車が走つてゐることであらう。ちよつと早川口から熱海に通ふ海沿ひの道を想はせるが、更に峻しく寂しく、しみじみと孤島といふ感じをわかさせる。岩の根を噛む波の音が馬車の轍の音を打ち消すやうに響いてゐる。黒い玄海の潮を數丈の下に眺めつゝ、御者は眞鍮の喇叭を吹いて行く。

三尺にも足らぬ島の小馬に跨つた女たちが、珍らしげに旅人をながめてゐることもある。女たちは三幅前垂れを腰に纏うてゐる。

わたくしは始めて對馬に行つた日の午後、嚴原から鶏知までの山道を浦潮から歸つて來たといふ島の老人と一緒になつたことがあつた。十一月の末であつたが山には白膠木の葉が紅葉して夕陽に燃えてゐた。

「あれが平戸から、北九州の山ですよ……」と言つて、その老人が青い煙のやうな遠い山を、波の彼方に指さして見せた時は、旅といふものゝ心細さがしみじみと應へた。

鶏知は神功皇后が水軍を率ゐてお立ち寄りになつた村だといふことである。根緒だの白嶽だの

といふ峻しい山の裾につままれた孤村には旅籠屋といつてもたゞ一軒しかなかつた。暗いほど繁つた森が夜つびて海の風に吹かれて、大波のやうな音を立てるので、島の一夜はまんじりともされなかつた。

海までは小半里も離れてゐるが、それでも夜つびて沖の波の音が嵐のやうに響いて來るのであつた。

島の冬は朝鮮風と稱へられてゐる空つ風が、夜晝、山の落葉樹を吹き捲くる。

しかし冬の波の荒いころの對馬の北岸に立つて、黒い數百丈の岩壁を搏つ玄海の怒濤と、幾千となく波の間に翔つてゐる鷗の群を見るならば、恐らくスカンディナヴィアの北海岸とでもいふやうなまだ見ぬ北歐の海邊を聯想するにちがひない。

時としては百尺の巖頭までも潮吹を感ずることが出来る。磯馴れ松が潮に濡れたまゝ、黒い岩にまつはりついてゐる。こゝでは北海の波と、鷗のやる瀬ない聲が、神祕的な諧調を作つてゐる。

私はこの島で見たほどの美しい處女林に掩はれた海岸を見たことはない。

高い山の裾には暗い處女林があり、處女林の縁には十軒か二十軒の漁家がある。漁家の直ぐ下には黒い玄海の水が騰々として湧き立つてゐる。岸には雨に打たれた破船もある。

夏になれば破船の底から晝顔の花が咲いてゐることもある。漁家の壁には、七八尺もあるやうな魚の嘴が吊り下げられてゐることもある。家の様式はばかに床が高く、屋根にはちよつと優



美な曲線を持たせて、武士の邸らしい式臺もあり、鎌倉時代の武人の家を聯想させるものが多い。

島の生活で一番快適な季節はやつぱり春から夏にかけてであらうと思ふ。

春が来たと思ふと山は文字通りに満山櫻と鴈とにつままれる。谷から谷へ鶯が鳴く。

西海岸の或る小ひさな島では、附近の浦々から船を出して集まつて来た女たちが、終日男禁制の女人國を作つて遊び、歌ひ亂舞するといふやうな風習も遺つてゐる。

鴈が散るころになると、盛に郭公が鳴く。島には郭公が多い。日暮ころ戸外を歩いてゐると、五六羽づつ群をなして郭公が飛んで行くのを見る。

山の背を歩けば黄金のやうな木苺が道を埋めて熱れてゐることもある。

早門、北部九州、平戸、天草あたりから鳥取漁を目あてに集まつて来た幾萬の舟が、夕陽を帆に浴びて島の小陰から支海の沖に出かけて行く姿や、日が暮るれば幾十里の間を埋むる漁火や、黎明と共に白帆を微風に揺られながら島に歸つて来る幾萬の漁船の莊嚴美に搏たるゝのもこの頃のことである。

木槿に似た黄色な花が、海岸に咲くのもこの頃のことである。内地から漁期を目あてにあやしい女たちが集まつて来るのもこの頃である。佐須奈あたりの山陰の港で、淋しい絃歌の聲を聴くのも夏の漁期である。

このやうな支海の島にも敗殘者の不幸な物語などを聴くことがある。何處に行つても人間が棲んでゐるかぎりには人生には不幸だの、落魄だのといふものはつきものである。

わたくしは一度鶏知から竹敷まで約一里もあらうと思はれる海沿ひの山道をわづか十錢でいゝか、俵に乗つてくれとせがまれたことがあつた。わたしは道々その老車夫と語つた。その男は大阪ではかなりの商人であつたが、失敗した後、妻も子も大阪にのこして、自分ひとりで中國から九州へと歩き歩いて、最後にこの島に流れて来たのであるといふことであつた。

「いつ、良い芽が出ますものやら……」と老車夫は寂しく笑ひながら言つた。

山の背を歩いてゐて、朝鮮の山の姿がはつきり見えて来るやうになれば、谿といふ谿には紅葉が燃える。

昔蒙古の軍隊が最初に上陸した土地で、また宗家の祖先が戦死をしたといふ。苦田から鶏知の方へ通ふ幾里かの山道を通つた秋の日のことは、今にも忘れることはできない。

谿川を挟んで燃えてゐる紅葉の下を、小ひさな馬に跨つた島の女たちが山から下つて来るのに出逢つたりすることもあつた。

何といふ盛であらう。山の上でうすら寒い秋の夜、高原の上を飛んで行く大きな螢を見たことあつた。

いよいよ朝鮮の山の赤茶けた色彩までもはつきりと見えるやうになれば、死のやうに静かな島



の風物のうちにも、既に冬の玄海といふ恐ろしい嵐の豫覺が動きはじめ。

### 旅三月

六月の伊豆の山は雨のみつといひてゐた。七月になつても雨は止まなかつた。水戀の惻々たる鳴く音を聴くのがせめてもの旅の徒然を慰むるすべでもあつた。天城が雨雪につまればはじむるやうになれば、木立の奥から靜かな水戀の聲が聞えて來た。

八月になつてわたくしは信濃の落葉松のなかに再び雨の日を送らなければならなかつた。家のまはりには郭公が鳴いてゐた。いつもは夜明けの空が白みかゝると同時に、戸を叩くばかりに水鶏の聲を聴いたものだが、今年は雨ばかりのせいか水鶏も聴かなかつた。

信濃の山を下りてわたくしは箱根の仙石原を訪ねた。仙石原の草はまことに美しい。風が吹くたんびに仙石原の草はかどやく。

わたくしの親しい友人がかつて仙石原の草なかに笛を失つて悲しんだ日から、仙石原はわたく



しにとりて懐かしい高原となつてしまつた。その友人 十三年前に自殺をしてしまつし、かれがひそかに戀してゐた女も鎌倉で死んでしまつた。わたくしは仙石原の草のなかに立つて足柄を越えてゆく白い雲をながめてゐた。

仙石原で知つた一人の旅人と一緒にわたくしは乙女峠を越えて御殿場へ下りて行つた。その旅人と一緒に驛の前の旅館の二階で晝食をとつてゐる間に、わたくしはその旅人が熱心なクリスチャンであり、しかも日本に一つしかない珍しい地味な信仰の集團に屬してゐる人であることを知つた。旅人はどこまでもクリストの復活を信じてゐる。裁きの日を信じてゐる。かといつて窮屈なクリスチャンではない。わたくしたちはビールを飲み、かれは煙草をも喫かした。窓からは全幅の富士が見えた。

御殿場で旅人と別れたわたくしは二日後の午後は京都の人となつてゐた。わたくしは洛北の寺をたづね、或る時は椿寺の苔むした庭に立つてゐた。すでに白い萩が咲いてゐた。

椿寺は小ひさな寺である。庭には珍しい枝振りの椿がある。椿のころは賑ふさうだが、今は天野屋利兵衛夫妻の墓のみが苔深く眠つてゐる。たゞ椿寺といふ名を愛するがゆゑにわたくしは椿寺を訪ねたのであつた。

椿寺を辭して龍安寺の石庭を観るべく照りかへしのはげしい砂道に沿うて車を走らせた。二三

年前の秋鷹ヶ峰の光悦寺を訪れた日のことなどを思ひ出しながら洛北の山を眺める。鷹ヶ峰、衣笠山をはじめ一帯の赤松山は繪よりも美しく、繪よりもかゞやいてゐる。たゆたげに重なり合つてはしづかな影をこめてゐる洛北の山を見るたんびにわたくしは時雨ころの京を思ひ出す。鞍馬には雲がかゝつてゐた。わたくしは鞍馬口の廢寺にこもつてゐる一人の男を想ひ出した。妻に裏切られた果は狂人のやうになつて、ちやうど大吹雪の頃北海道まで妻をさがして歩いて、つひに一人で鞍馬の廢寺に住み家とし、經を讀んでゐる男の心をいろいろに想像して見たりした。夾竹桃の花、百日紅の花がさかりである。竹林につまされた靜かな別荘風の家の間に映畫撮影所の建物が幾つとなく不調和な對照をなしてゐるのが見出される。ロケーションの戻りらしい男女優たちが扮装のまま稲田の間を歩いて來るのに出會ふ。大小を帯した維新時代の志士らしい男優たちが柴を束ねたのを擔いでゐたり、御殿女中に扮した女が落松葉を風呂敷に包んでゐたりするのを見た。いかにも暢然たる情趣である。

龍安寺の池にはもうすでに秋が訪れてゐた。水面には水草の白い花が咲いてゐた。そこからは伏見、鳥羽、淀の流れも見えるのであろうが、今は京の郊外にも煙突が多くなつたので、風のないう日など黒い煙が京の町をつんで靜かな遠い眺めも失はれてしまつた。惜しいことである。武蔵野の自然が容赦もなく壊たれてゆくやうに、京の自然も日一日と壊たれてゆく。旅人にとりてはこの上もなく寂しいことである。せめて日本の中に一つくらゐは二十年前の靜かな京の町が遺



されてもいゝやうに思ふ。

池に沿ひ、小暗い木立をくゞり、ゆるやかな石礎を傳うて龍安寺の玄關に立つ。蟬時雨に一山の閑處をこめて、山寺の午後は秋の夜のごとく静かである。

若い坊さまが二人午睡の夢を楽しんでゐるのを驚かすのも氣の毒である。じつとそこに立ちのくして先づ山寺の虚無そのものゝやうな心につゝまれてしまふ。

登を打つ落葉の聲が直ぐ背のうしろに聞える。

幾度か聲をかけて、やつと庫裏の方からお婆さんがにこにこ笑ひながら出て来た。

導かれて先づ本堂に詣して、ひどく雨風に叩かれた廣縁に出る。御堂の廂が思ひ切つて高く、深々と青い空に突き出てゐる。廂の直ぐ下から眞白な砂が枯れ盡した秋の潮を聯想させるほどに敷かれてある。

御堂に面して庭をやゝ長方形に劃つた土塀が廻らされてゐる。塀は心持ち低目に構へられてゐる。石庭の全體の調子を整へるものとしてその簡素なる土塀の形、色合、高さの一つ一つが御堂の扉、廂、或は階とともに甚だ大切な役目をなしてゐる。さらに塀の外美しい赤松林、青い空を忘れてはならぬ。一面の砂の海、そこにはたゞ大小十五の石が敷置されてある。一草一木の在るなく、石は在るべき所に在り、居るべき所に居る。趣に相びず知に執せず、一石一塊秋の風の

ごとく自然に、秋の日のごとく静かである。時としては萬里の山のごとく遠く、時としては古賢の咳を聴くほどに旅人の心を相凭らしめる。淡々乎たる白砂の上を雲は影を投げて走る。聖僧の諦悟を観るべく、一切を観じ盡したる智慧の聲音を聴くことができるであらう。

そこに横たはる一塊の石も天に向つてもの言ひ、一粒の白砂も秋風に向つてもの語る。

一切を捨てよ、木も捨てよ、草も捨てよ、花も捨てよ、流れも捨てよ。そこに永劫の土、永劫の石、永劫の諦悟のみが靜かに取りのこされる。人は死ぬであらう、一切の現象は滅びる。たゞ地を搏つ雨と大地のみが遺されるであらう。

わたくしはふたゞびこゝに來て洛北の時雨に濡れた日の庭を見たいと思つた。時雨るゝまゝに濡れてゆく庭。石、庭の砂、わたくしは靜かにそれを觀たいと思ふ。

龍安寺を出て御室の方へ歩いて行つた。木の下にはすでに萩が咲きはじめてゐた。

仁和寺の塔の前には近くの撮影所の人たちが集まつて來てロケーションをやつてゐた。子供たちも多勢見物に來てゐる。こゝでも維新のころのものらしく、白い袴を着けた朱鞘の志士たちが草の中にしゃがんでゐた。劍を抜いて切り結んでゐるものもあつた。手が空いた男女優たちはこゝでも松の枯枝を拾ひ、落葉をかき集めて丹念に薪を束ねてゐた。愛すべき俳優たちよ。

京の朝はさすがに秋らしく鈴懸の葉も露を浴びたまゝに落ち初めてゐる。三條の小橋から左へ



折れ、高瀬川に沿うて上へ上へと道を拾ふ。まだ戸を締めて眠つてゐる家が多い。朝霧の間から眼ざめたばかりの比叡が黒く佇すんでゐる。鴨川沿ひの柳は露垂げにうなだれてゐる。幹も黒く濡れてゐる。

不圖わたくしの胸に左團次の菊地半九郎が泛かんで来る。松蔭の美しい可憐な若松屋お染の姿が映つて来る。時としては若くして死ぬといふことも決して不幸ではない。富や名を貪ることの醜いと同じやうに、生きんことをのみ貪るのもあさましいことである。十年二十年生きのびたところで過ぎ去つて見れば同じく蓮花一朝の夢である。

死ぬといふことが非常に恐ろしい時代もあつた。たしかに死は今日でも恐ろしいにはちがひない。しかし死を恐るゝ氣持ちは年々に薄らいでゆくやうに思ふ。旅といふものがわたくしたちの心を引締めてくれるのはいつも死といふものが、死といふ觀念がこびりついてゐるからである。わたくしはこのころになつて西行の「いのちなりけり小夜の中山」の心持ちが幾分わかつて来たやうな氣がする。思ひがけなくもふたゝび小夜の中山を越えた日の西行の心を思ふと、生きてゐたことの悦びよりも、さらに常住死に面してゐたかれの無常觀の佗しさの方が強く胸を搏つ。

「二度と訪ふこともあるまい。死が待つてゐる」旅人は山を見ても、川を渡つてもかく思ふ。陸中平泉に行けばわたくしたちはそこに遺された芭蕉の辭世の句を見出す。象潟に行けばそこに再びかれの辭世の句を見出す。北陸に於ける荒海の句、市振の關に於ける一家の句、すべてがそ

の山、その海に所縁する芭蕉の辭世の句であつた。「奥の細道」に遺された北の國々の山も川もことごとく芭蕉の辭世の句を刻みつけてゐる。すべての旅人はその到るところの自然に所縁して辭世の句を遺し、辭世の言葉を感じるにちがひない。旅人はつねに見知らぬ山、見知らぬ町に對して最後のさよならを述べるために旅をつゞけてゐる。

山といふ山を見盡し、町といふ町を見盡し、見知らぬ旅の秋に靜かに死ぬることが出来るならば、旅人の望み足れりといふべきである。

わたくしはこんなことを考へながら南禪寺の門の前に立つてゐた。

わたくしは南禪寺の横から裏の山徑を登つて行つた。去年わたくしは同じ道をたどつて行つた日のことを思ひ出した。あのころは鶯が鳴いてゐた。けさはこゝにも秋は近づいてゐた。木の葉は稲えす暗い溪川に沿うて落ちてゐた。小暗い木立の下に一人の男が墓碑を刻んでゐた。去年この溪川に沿うて歩いた日もわたくしは同じやうに墓碑を刻む聲の音を聞いた。碑を刻む聲の音は森閑とした山にこだまして、たとへば木を叩く啄木鳥を聴くやうに、魂の底に響いて来るやうに感じられた。

わたくしは溪を越えて、さらに溪を越えて行つた。碑を刻む聲の音がなほどこまでも響いて来た。